岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集

# 平成 26 年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋Ⅱ遺跡 沼袋Ⅲ遺跡 八幡沖遺跡

ほか調査概報 (39遺跡)

2015

(公財) 岩手県文化振興事業団

# 平成 26 年度発掘調査報告書

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。 それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するの に欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたっ て大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成26年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及 び調査概報として発刊するものです。全県下で43遺跡、約20万㎡が調査され、縄文時代から近世ま での遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託 者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します

平成 27 年 3 月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団 理 事 長 菅 野 洋 樹

## 目 次

平成26年度の発	掘調査の概要について			1
	I 発掘調	<b>直</b>	3告	
(1) 南川尻遺跡	<b>5</b> (洋野町) 5	(4)	沼袋Ⅲ遺跡	(田野畑村) 67
(2) 下向遺跡	(洋野町) 35	(5)	八幡沖遺跡	(一関市) 79
(3) 沼袋Ⅱ遺跡	5 (田野畑村) 47			
	Ⅱ 発掘課	本概	F 李B	
( a )				H. H / - 1 .
	(北上市) 91			遺跡 (宮古市)111
	<b>夏遺跡</b> (遠野市) 92	(27)		妳(宮古市)112
	遺跡 (遠野市) 93	(28)		宮古市)113
(9) 栃洞Ⅲ遺跡	<b>\$</b> (遠野市) 94	(29)	荷竹日向Ii	遺跡 (宮古市)114
(10) 平野原Ⅲ遺	遺跡 (遠野市) 95	(30)	石峠Ⅱ遺跡	(山田町)115
(11) 館岡Ⅱ遺跡	5 (平泉町) 96	(31)	間木戸I遺蹟	妳 (山田町)116
(12) 西平内 I 遺	貴跡 (洋野町) 97	(32)	沢田Ⅲ遺跡	(山田町)117
(13) 北ノ越遺跡	5 (久慈市) 98	(33)	田屋遺跡(カ	大槌町) 118
(14) 宇部館跡	(久慈市) 99	(34)	松磯遺跡(カ	大槌町)119
(15) 伏津館跡	(野田村)100	(35)	田鎖車堂前法	遺跡 (宮古市)120
(16) 中平遺跡	(野田村)101	(36)	千鶏Ⅳ遺跡	(宮古市)121
(17) 上泉沢遺跡	5 (野田村)102	(37)	宮野貝塚(カ	大船渡市)122
(18) 力持遺跡	(普代村)103	(38)	伽羅之御所置	跡 (平泉町)123
(19) 菅窪長屋構	<b>⋠Ⅱ遺跡</b> (田野畑村) 104	(39)	八幡沖遺跡	(一関市)124
(20) 菅窪長屋構	青Ⅲ遺跡(田野畑村) 105	(40)	赤前Ⅲ遺跡	(宮古市)125
(21) 向新田Ⅲ遺	遺跡 (宮古市)106	(41)	浜川目沢田	I 遺跡(山田町) 126
(22) 青野滝北 I	遺跡 (宮古市)107	(42)	焼山遺跡(山	山田町)127
(23) 青野滝北Ⅱ	[遺跡 (宮古市)108	(43)	赤浜Ⅱ遺跡	(大槌町)128
(24) 青野滝北Ⅱ	I遺跡 (宮古市)109	(44)	高田城跡(四	<b>坴前高田市)129</b>
(25) 高根遺跡	(宮古市)110			
調查報告遺跡抄續	録			

### 平成 26 年度の発掘調査の概要について

平成 26 年度の発掘調査は 51 遺跡 220,349㎡で開始したが、最終的には 43 遺跡 175,513㎡について発掘調査を実施した。これらの遺跡は、沿岸部を中心に県内の7市4町3村にまたがっている。実績値を前年度と比較すると、遺跡数で6 遺跡、面積で約 20,000㎡減少している。県内陸部と沿岸部を結ぶ復興支援道路関係の調査が今年度から新たに加わった。復興事業に関連した調査が、受託面積全体の約8割以上を占めた。通常の調査としては、北上川河川改修事業や内陸部の県道改良事業などが挙げられるが、農地整備事業に起因した調査が皆無であったことは特筆される。調査を実施した43 遺跡のうち、7 遺跡については平成 25 年度からの継続調査、17 遺跡については調査未了のため次年度以降への継続調査となった。全体に遺構密度の高い遺跡が多くあったことと、調査途中に対象範囲が拡大したことによるものである。

縄文時代では、遠野市新里愛宕裏遺跡では中期の住居跡 4 棟、九重沢Ⅲ遺跡では後期の住居跡 5 棟などが見つかっている。洋野町西平内 I 遺跡では、後期の環状に展開する配石墓群と列石、これらの遺構を覆う整地層が確認された。大槌町赤浜Ⅱ遺跡でも配石遺構が確認され本格調査は次年度以降の予定である。普代村力持遺跡では、狭小な範囲から膨大な土器とともに、縄文時代中期を中心とする住居跡が 60 棟以上検出された。この地域はほぼ北緯 40 度に位置しており、北に展開する円筒式土器文化と南に展開する大木式土器文化の交錯する様子が読み取れる遺跡である。縄文中期の住居跡が卓越しているなかで、宮古市向新田Ⅲ遺跡では縄文時代前期と晩期の住居跡が複数見つかっている。同じく、宮古市高根遺跡では山腹急斜面に住居跡、貯蔵穴が構築されており、従来に見られない縄文時代の占地の在り方を再考させる事例であった。山田町石峠Ⅱ遺跡、間木戸Ⅰ遺跡、沢田Ⅲ遺跡、浜川目沢田Ⅰ遺跡では、縄文時代中期を主体とする住居跡群が見つかっており、沿岸部でも内陸部と遜色のない大規模な集落が営まれていたことが明らかになった。

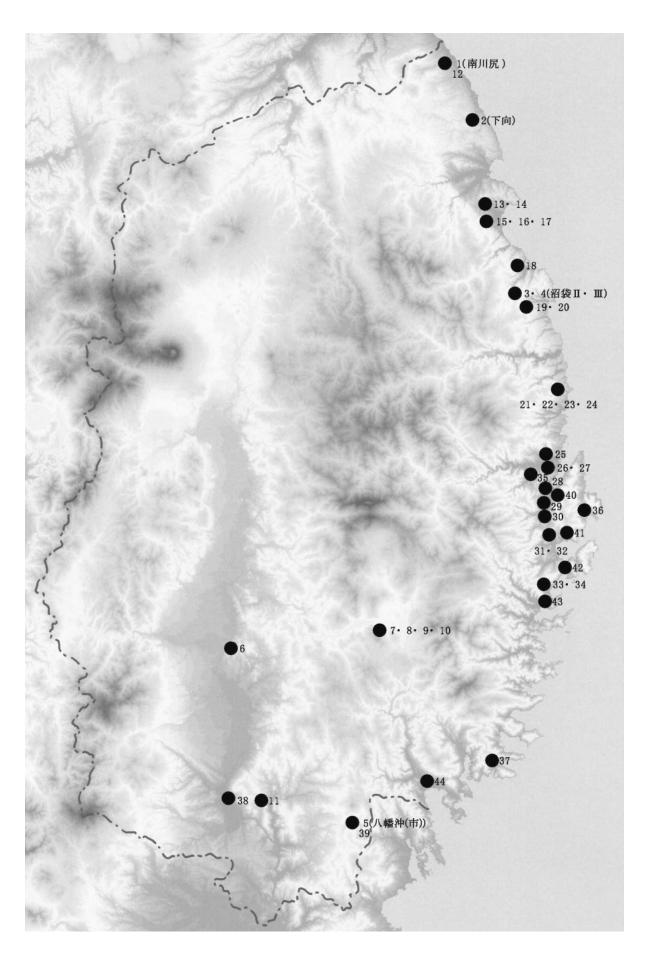
弥生時代では、北上市中村遺跡で前年度調査した千苅遺跡から続く弥生時代初め頃の遺物包含層(土器捨て場)が確認された。宮古市木戸井内VI遺跡からは、弥生時代後半の方形基調の住居跡が2棟見つかっている。

古代のうち古墳時代から奈良時代では、野田村中平遺跡・同上泉沢遺跡、宮古市沼里遺跡で住居跡が複数見つかっている。また内陸部では、中村遺跡(北上市)の調査が行われ、奈良~平安時代の100棟以上の住居跡が見つかった。前年度調査の千苅遺跡と同一であり、集落の範囲が更に拡大した。宮古市荷竹日向 I 遺跡では、70棟に及ぶ住居跡のほか、鍛冶工房跡・鍛冶炉・排滓場が見つかり、集落内に鉄生産関連の工房を抱える様相が確認された。平泉関連では、伽羅之御所跡で、隣接する無量光院の南辺に相当すると思われる堀跡が見つかった。宮古市田鎖車堂前遺跡では、12世紀のかわらけや陶磁器類のほか、鎧の一部である小札、馬具などの鉄製品が出土した。12世紀藤原氏関連の遺構・遺物が、内陸部と違わない形で沿岸部にも存在することが明らかとなった。

中世では、久慈市宇部館跡、野田村伏津館跡、宮古市荷竹日向 I 遺跡、山田町石峠 II 遺跡、陸前高田市高田城跡、一関市八幡沖遺跡、平泉町館岡 II 遺跡などで調査が行われた。高田城跡では、堀跡・土塁・切岸・掘立柱建物跡等が見つかっているが、建物や遺物が非常に少ないことが特色として挙げられる。

今年度は、平成24年度の後半から開始された復興関連調査が3年目を迎えた。内陸に比較し調査事例の少なかった沿岸部において、各時代・各地域の調査が実施されたことは非常に意味のあることである。現地説明会等の開催にあたっても、毎回百名以上の参加があり、関心の高さがうかがわれた。

(調査課長 斎藤邦雄)



平成 26 年度 調査遺跡位置図

## I 発掘調査報告

### 凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ: 42 × 32 × 30cm 中コンテナ: 42 × 32 × 20cm 小コンテナ: 42 × 32 × 10cm

## (1) 南川尻遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町種市第28地割地内

**委 託 者** 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成 26 年 9 月 4 日 ~ 10 月 30 日

遺跡コード・略号 IF 48-1197・MK J-14

調査対象面積 6,340 m<sup>2</sup>

調査終了面積 6,340㎡

調査担当者 小林弘卓・宇部めぐみ・

栃澤 星

#### 1 調査に至る経過

南川尻遺跡は、一般国道 45 号三陸沿岸道路事業(洋野~階上)の事業区域内に存在することから 発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長 359kmの自動車専用道路で、東 日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業 化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年10月24日付け国東整陸二調第1007 号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成 24年10月25日~10月26日にわたり試掘調査を行い、平成24年11月6日付け教生第1509号により、 工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩 手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

川尻

(国十交诵省東北地方整備局三陸国道事務所)

1:25000 角浜・種市

第1図 遺跡位置図

#### 2 遺跡の位置と立地

南川尻遺跡は、洋野町役場より北西へ約2kmの地点に位置し、標高は47~58mを測る。遺跡の現況は山林・水田である。今回の調査区は、西から東へ延びる尾根の頂部と北側を東流する沢(無名)までの斜面地が対象である。

#### 3 基本層序

山側(南側)の調査区をA区、谷側(北側)をB区とした。A区の現況は山林、B区は水田ということもあり、B区においては後世による地形の改変が顕著なため、層序は地点によってやや異なるが、基本的には尾根上にあたるA区からB区北方の沢まで一連の堆積であり、統括すると以下のようになる。

I層…表土、現耕作土相当。B区においては複数回の盛土・水田耕作土に細分できる。

Ⅱ層…10YR1.7/1黒色土。B区のみで確認。水田造成以前の旧表土。

Ⅲ層…10YR2/2黒褐色土。遺物を少量包含する。

IV層…10YR3/3暗褐色土。遺構検出面。黄褐色土ブロック(八戸火山灰)を含む。部分的に堆積しており、下方に行くほど厚くなる。

V層…10YR4/4~5/6褐色~黄褐色八戸火山灰。遺構検出面。地山相当。

VI層…砂礫層。B区北側斜面下方でのみ確認。

遺構検出面は基本的にはIV層であるが、A区においては限定的であり、尾根の頂部にあたる南西側では確認できない。また、旧表土としたII層についても同様で、A区では確認していない。したがって、A区における基本層序は、I-III-IV層またはI-III-V層となる。

#### 4 調査の概要

今回の調査対象部分は山側の1,500㎡ (A区)であったが、北側の沢付近で焼土や散在する土器片を確認したことから、A区より北側部分を対象に9本のトレンチを設定し、試掘調査を行った。この結果、 $T3\cdot 4\cdot 5$  において遺物を確認したことから、これらと周辺の遺構の想定される範囲を含む840㎡ (B区)を対象に本調査を行うこととした。

#### (1)検出遺構

検出された遺構は、竪穴住居跡 2 棟、土坑 5 基、焼土遺構 1 基、陥し穴状遺構 (※以下、陥し穴と略す) 11基である。遺構の大半は A 区で確認されている。 B 区は現況が水田ということもあり、削平・盛土 といった本来の地形からの改変が顕著で、焼土遺構と陥し穴が各 1 基ずつ確認されるにとどまった。

#### SI01竪穴住居跡(第3図、写真図版2・3)

<位置・検出状況>A区東側の平坦部に位置し、検出面はIV層である。褐色土・暗褐色土・黒褐色土の混在する不整形なプランで検出した。

<重複遺構>SKT10を切る。また、SK01A・Bと近接しており、直接的な切り合いは調査では 見られなかったが、同時存在はないものと判断される。

<平面形・規模>径約280cmの円形を呈する。

<埋土>7層に細分した。全体に褐色土・暗褐色土・黒褐色土が混在する。下位には部分的に灰白色系の火山灰が見られる。鑑定を行ったが、十和田起源火山灰の二次堆積との結果であった。

<壁・床面>壁は床面との境が明確ではなく、緩やかに立ち上がる。検出面からの深さは最深部で約30cmを測る。床面はやや凹凸が見られ、部分的に締まりが認められる。

<炉>中心部に地床炉を確認した。約50×30cmの楕円状に赤褐色焼土が広がる。焼成面は非常に堅く締まり、深度は約20cmと良好である。

<床面施設>中心部に土坑(K1)を確認した。開口部径約110cmの円形を呈する。黒褐色土の単層

で、深さは約25cm、断面形は中央部がやや低い擂鉢状となる。上記の地床炉がこのK1覆土上面に形成されていることから、地床炉形成以前の掘り込みであると判断される。

<遺物>土器は約3.9kgが出土し、このうち復元の良好な $9点(1\sim9)$ を掲載した。石器は敲磨器 (37)・礫器(38)の2点が下層より出土した。

<時期>出土遺物から縄文時代後期後葉に帰属すると考えられる。また、床面より採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、2,960 ± 30yrBPという結果が得られた。

### S102竪穴住居跡(第3図、写真図版3)

<位置・検出状況>A区東側のほぼ平坦部に位置する。検出時に焼土範囲を確認したことから、当初は焼土遺構と考えたが、僅かであるが覆土と考えられる土層を確認したこと、周辺に柱穴を検出したことから、竪穴住居跡と判断するに至った。

<平面形・規模>上記のとおり、南側に壁と思われる部分を確認した。その範囲から推定すると径 550cm前後の円形を呈するものと考えられる。

<埋土>部分的に確認できたのは黒褐色土の単層である。

<壁・床面>壁の明確な立ち上がりは不明。床面と思われる範囲も同様に不明だが、炉周辺はほぼ 平坦である。

<炉>約45×40cmの円形に広がる赤褐色焼土である。焼成の深度は約10cmを測る。

〈床面施設〉南側において柱穴を2個(P1・2)確認した。いずれも径40~50cmの円形を呈し、深さは50cm台である。

<遺物>本遺構に伴うものか不明な点はあるが、検出時に炉周辺から出土したものも合わせると、 土器約1.8kg、石器1点が出土した。このうち、土器3点(10~12)と石匙(39)を掲載した。

<時期>出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。

#### SK01A・B土坑(第4図、写真図版4)

< C位置・検出状況>A区東側の平坦部に位置し、検出面はⅣ層である。当初は隣接するSI01の覆土の一部と捉えたが、精査の結果、それと異なる単独の土坑であることが判った。また、精査中は袋状に下部が広がる形態のものと考えていたが、断面状況から上下に重複する2基の土坑であると判断した。上部の土坑をSK01A(以下Aと表記)、下部をSK01B(以下Bと表記)した。

<重複遺構>AがBを切る。

<平面形・規模>Aは開口部径約210cm、底部径約200cmの円形を呈する。Bは上部がAに切られているため全容は不明だが、開口部の残存値径約180cm、底部約170×150cmの楕円形を呈する。

<埋土>Aは5層に細分した。主体は黒褐色土で、下位に黒色土が堆積する。Bは13層に細分した。 黒褐色土を主体とし、壁側は崩落した黄褐色土や流入した地山起源の褐色土が堆積する。自然堆積か。

<壁・底面>Aの壁は北側では中位で内湾、南側では外側に膨らみ立ち上がり、深さは約80cmを測る。底面はやや凹凸が認められる。Bの壁はやや外傾して立ち上がり、深さは約45cmが残存、検出面から推定される深さは120cmである。底面は平坦である。

<遺物>土器はAから約700g、Bからは約50g出土した。石器は出土していない。このうち、Aより出土の 1点(13)を掲載した。

<時期・機能>縄文時代後期の範疇に含まれると考えられる。

#### SK03土坑(第4図、写真図版4)

<位置・検出状況>A区南東側の平坦部に位置し、検出面はIV層である。

<平面形・規模>開口部径約140cm、底部径約90~100cmの円形を呈する。

- <埋土>3層に細分した。下位に暗褐色土、上位に黒褐色土が堆積する自然堆積と考えられる。
- <壁・底面>壁は底面から緩やかに立ち上がり、深さは約30cmである。底面は概ね平坦である。
- <遺物>なし。
- <時期・機能>詳細不明。

#### SK04土坑(第4図、写真図版4)

- <位置・検出状況>A区東側の平坦部に位置し、検出面はⅣ層である。
- <平面形・規模>開口部約90×80cm、底部約80×60cmの楕円形を呈する。
- <埋土>3層に細分したが、主体となるのは黒褐色土である。中位には黄橙色土の火山灰ブロックが見られる。自然堆積と考えられる。
  - <壁・底面>壁は底面から緩やかに立ち上がり、深さは約20cmを測る。底面は概ね平坦である。
  - <遺物>なし。
- <時期・機能>出土遺物がないため詳細は不明。中位より出土の火山灰を鑑定委託したところ、S I 01同様、十和田起源の二次堆積という結果であった。直接的な時期を特定するには至らなかったが、S I 01と同等の時期である可能性が高いものと考えられる。機能については不明。

#### SK05土坑(第4図、写真図版4)

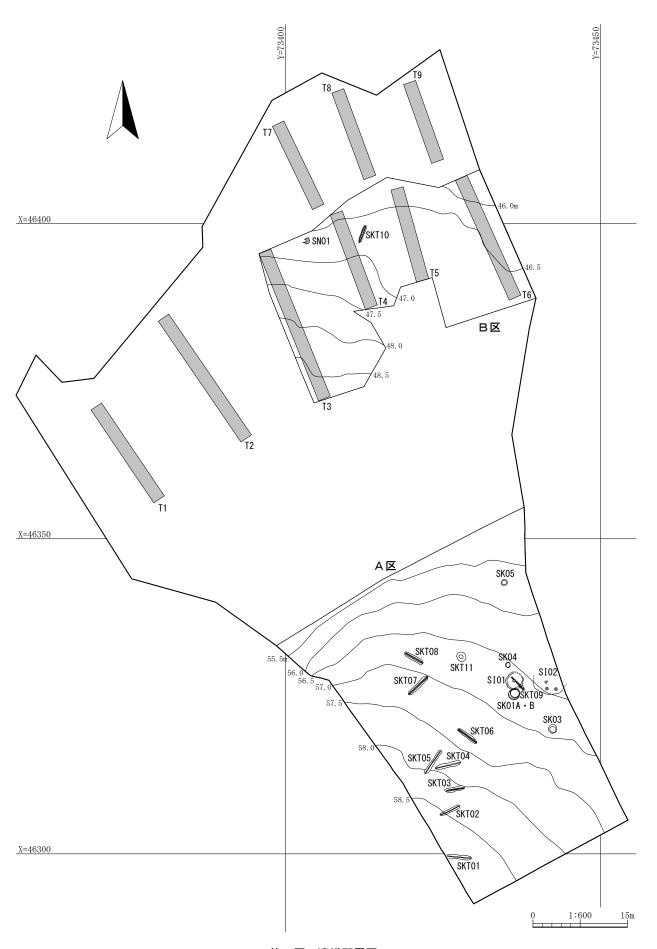
- <位置・検出状況>A区北東側の平坦部に位置し、検出面はⅣ層である。
- <平面形・規模>開口部約110×100cm、底部径約70cmの円形を呈する。
- <埋土>暗褐色土の単層である。
- <壁・底面>壁は外傾して立ち上がり、深さは約20cmである。底面には凹凸が認められる。
- <遺物>土器が約10g出土した。
- <時期・機能>詳細不明。

#### SN01焼土遺構(第4図、写真図版7)

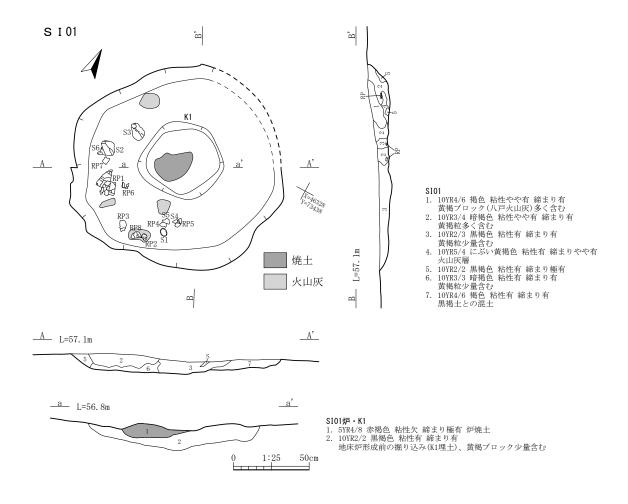
- <位置・検出状況>B区北側の傾斜地に位置する。IV層で検出した。
- <平面形・規模>110×70cmの楕円に近い形状である。
- <厚さ・色調>被熱深度は最大10cmを測る。赤褐色を呈する。上面には締まりが認められる。
- <遺物>本遺構周辺から多くの遺物が出土しており、本遺構に関連する可能性があることからこれらを含めている。土器は約6.9kg出土しており、石器は出土していない。このうち8点(14~21)を掲載した。
- <時期>上記の遺物から縄文時代後期後葉が想定される。撹乱が著しく断定はできないものの、遺物の出土状況から推察すると、本遺構は竪穴住居跡の炉であった可能性がある。

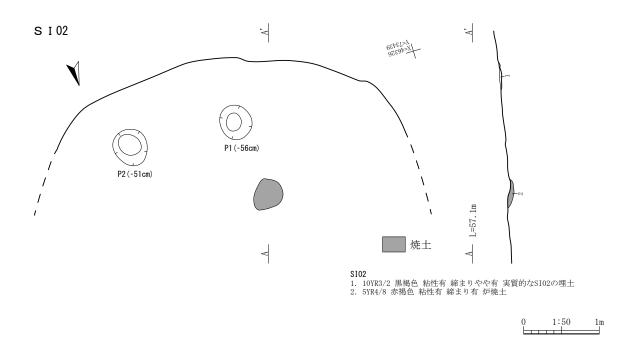
#### SKT01~11陥し穴状遺構(第1表、第5~7図、写真図版5~7)

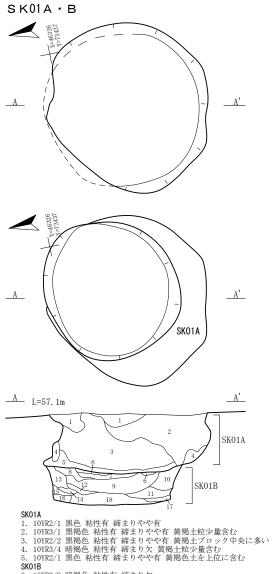
紙幅の都合により各遺構の詳細は第1表に記した。概観のみ述べると、A区で10基、B区で1基検出されている。溝状の形態のものがほとんどであり、円形のものはSKT11のみである。分布状況としてはA区南西部に集中しており、これらの大半は長軸方向が等高線にほぼ平行する。SKT05・07が等高線に直交するが、これらが重複することがないことから同時期に計画的に配置された可能性が窺える。

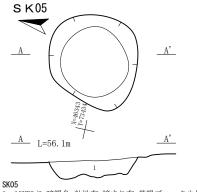


第2図 遺構配置図

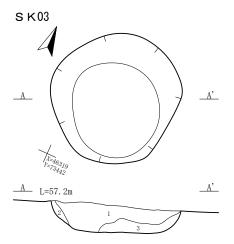




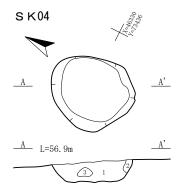




1. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まり有 黄褐ブロック少量含む

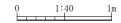


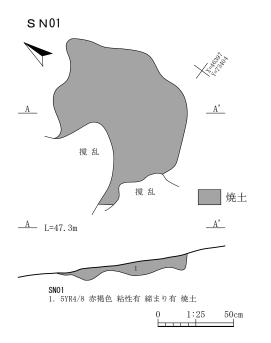
- 5003 1. 10YR3/2 黒褐色 粘性有 締まり有 黄褐色土粒少量含む 2. 10YR4/4 褐色 粘性有 締まり欠 流入土 3. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まり有 黄褐色ブロックを一部含む

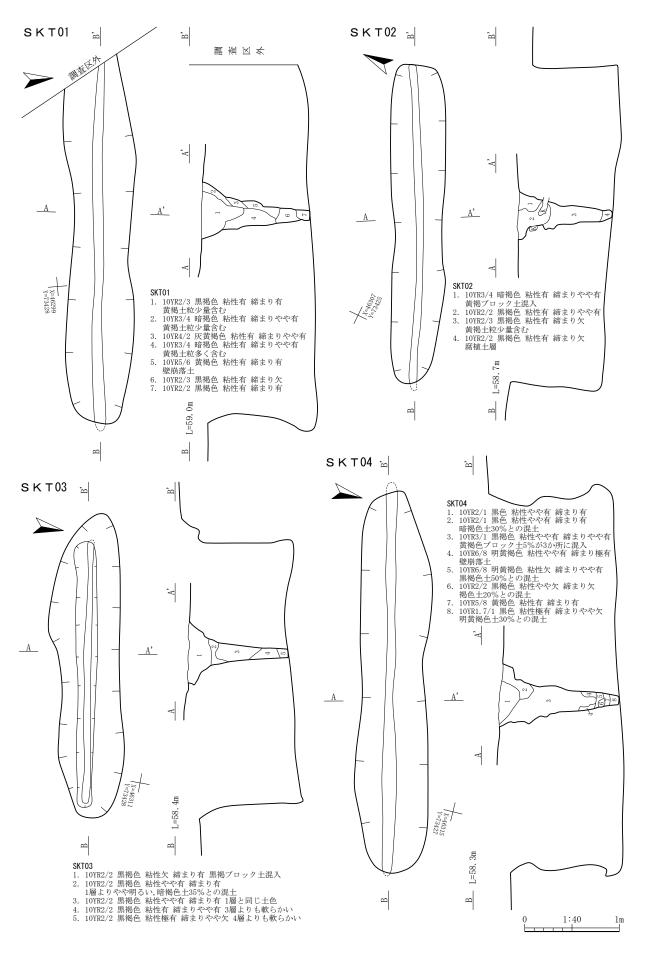


#### SK04

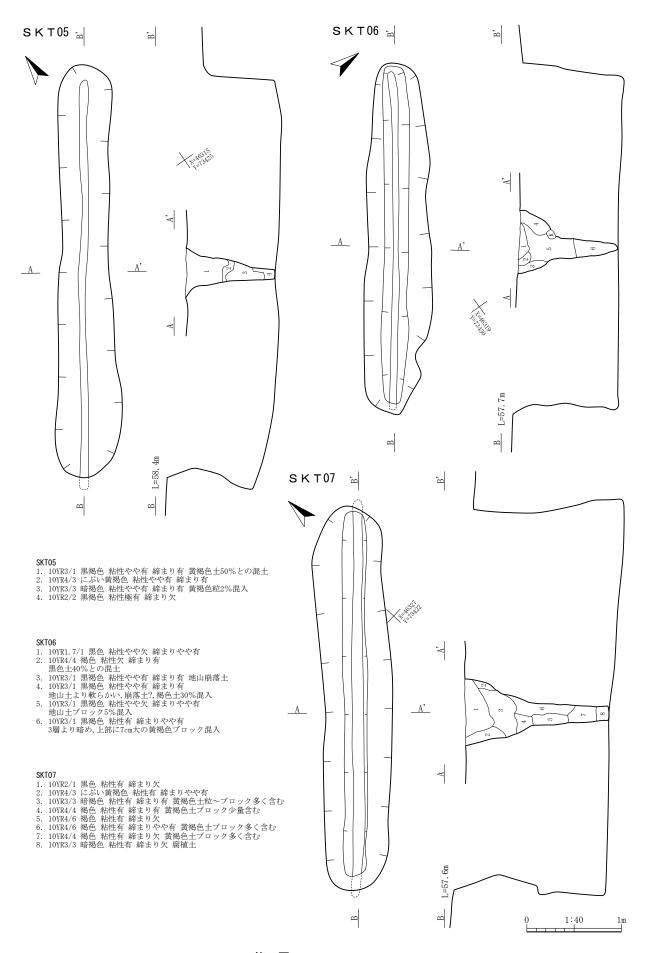
- 3004 1. 10YR2/3 黒褐色 粘性有 締まりやや有 黄褐土粒少量含む 2. 10YR4/6 褐色 粘性有 締まり有 3. 10YR7/3 にぶい黄橙色 粘性極有 締まり極有 粘質土、火山灰



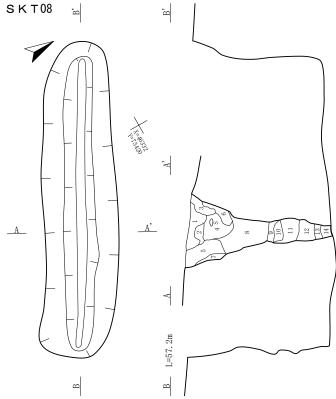




第5図 SKT01~04



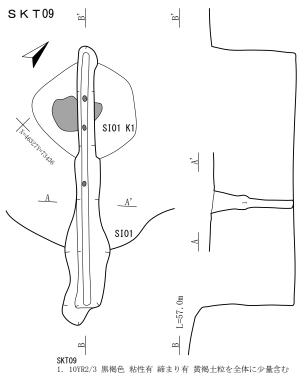
第6図 SKT 05~07

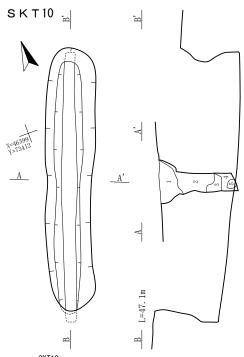


#### SKT08

- SKT08

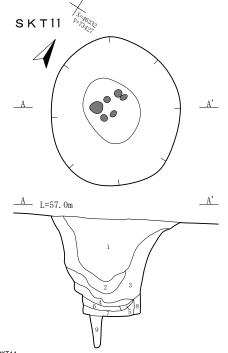
  1. 10VR1.7/1 黒色 粘性やや有 締まり有 黒褐色土40%との混土
  2. 10VR2/2 黒褐色 粘性やや有 締まり有 黒ブロック混入、にぶい黄褐色土50%との混土
  4. 10VR3/4 暗褐色 粘性やや有 締まりを有 石混入
  5. 10VR3/4 暗褐色 粘性やや有 締まりやや有 石混入
  6. 10VR3/4 暗褐色 粘性やや有 締まりやや有 4層より暗めの土
  6. 10VR3/1 黒褐色 粘性やや有 締まりやや有 砂粒混入、地山崩落土?
  7. 10VR5/8 黄褐色 粘性やや欠 締まりやや有 砂粒混入、地山崩落土?
  8. 10VR3/4 暗褐色 粘性やや方 締まりやや有 砂粒混入、地山崩落土?
  10. 10VR6/8 明黄褐色 粘性やや次 締まりやや有 砂粒混入、黒褐色土40%との混土
  11. 10VR6/8 明黄褐色 粘性や存 締まりやや有 砂粒混入、黒褐色土40%との混土
  12. 10VR6/8 明黄褐色 粘性極有 締まりやや有 黒色土50%との混土
  13. 10VR4/4 褐色 粘性極有 締まりやや有 果色土50%との混土
  14. 10VR4/4 褐色 粘性極有 締まりやや有 やや白みががっている,褐色土と黒褐色土混入
  14. 10VR3/1 黒褐色 粘性有 締まりやや有



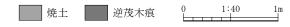


#### SKT10

- SK110 1. 10VR1.7/1 黒色 粘性有 締まり有 2. 10VR2/2 黒褐色 粘性有 締まりやや有 3. 10VR2/3 黒褐色 粘性有 締まりやや有 4. 10VR3/3 暗褐色 粘性有 締まり有 黄褐土粒多く含む 5. 10VR5/8 黄褐色 粘性有 締まり有 ブロック土



- SKT11
  1. 10YR2/2 黒褐色 粘性有 締まりやや有 黄褐色土粒を下位に多く含む 2. 10YR2/3 黒褐色 粘性有 締まり有 黄褐色土粒を全体に多く含む 3. 10YR3/3 暗褐色 粘性有 締まり有 黄褐色土粒を全体に多く含む 4. 10YR2/2 黒褐色 粘性有 締まり有 黄褐色土粒を全体に多く含む 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性有 締まりやや有 6. 10YR3/4 暗褐色 粘性有 締まりやや有 7. 10YR2/3 黒褐色 粘性有 締まり ウ 黄褐色土粒多く含む 8. 10YR5/8 黄褐色 粘性有 締まり 南 黄褐色土粒多く含む 8. 10YR5/8 黄褐色 粘性有 締まり有 壁上部からの崩落土 9. 暗褐〜黒褐色土, 逆茂木痕覆土



第7図 SKT08~11

第1表 陥し穴一覧表

油井 夕	区域・位置	検出面	規模	(cm)	形状 主軸方位	残存深度	111 1. 200.044	特記所見	図版	写真	
遺構名	区域・位直	快山山	開口部	底部	形仏	土粬刀仏	(cm)	出土遺物	特配所兒 	凶版	図版
S K T 01	A区·南西	V層	390以上×70	390以上×10	溝状	東-西	115	なし	西端は調査区外へ続く	5	5
S K T 02	A区·南西	V層	340×60	345×8	溝状	北北西 -南南東	90~100	なし		5	5
S K T 03	A区·南西	V層	320×60~70	280×5~8	溝状	東-西	110	なし		5	5
S K T 04	A区·中央西	V層	400×65~75	420×10	溝状	東-西	120~130	なし		5	5
S K T 05	A区·中央西	V層	430×50~70	430×7	溝状	北東 -南西	80~100	なし		6	6
S K T 06	A区·中央	V層	370×70	360×5~10	溝状	北西 -南東	105	なし		6	6
S K T07	A区·中央北	IV層	400×70	420×10	溝状	北東 -南西	160	土器280 g		6	6
S K T 08	A区·中央北	IV層	330×80	300×6~10	溝状	北西 -南東	150~190	土器90 g		7	6
S K T 09	A区·中央東	IV層	300×20~50	275×6	溝状	北西 -南東	85~100	なし	SI01と重複、切られる 逆茂木痕3個確認、深さ約 20cm	7	7
S K T 10	B区中央北	IV層	280×5	285×10~17	溝状	北北東 -南南西	60~85	なし		7	7
S K T11	A区中央北	IV層	160×135	70×55	楕円形	_	100	なし	逆茂木痕 6 個確認、 深さ20~35cm	7	7

#### (2)出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器は大コンテナ3箱(総量27.1kg)、石器は中コンテナ1箱(総量8.3kg)である。掲載したのは、土器は36点( $1\sim36$ )、石器は18点( $37\sim54$ )である。選択基準としては、土器はおよそ形状がわかるもの、時期を特定できる文様をもつものなどを抽出、石器は出土した全点を掲載した。

土器は大半が遺構外からの出土であり、遺構内としてはSI01からの出土が最も多い。時期的には、 36以外は縄文時代後期前葉と後期後葉の2時期におよそ含まれる。後期前葉とした土器は、SI02周 辺やA区遺構外からの出土が多い。特徴として、12・20・24のように沈線による幾何学的な文様が見 られるものがある。10・22は平行に引かれた沈線により文様帯が区画され、無文帯には丁寧なミガキ が認められる。22は口縁突起部に「ノ」字状の貼付が見られることから、他より一段階古い可能性もあ る。29は小径の底部をもつものである。形状から製塩土器の可能性も考えられる。後期後葉に含まれ る土器は全体で最も多く、約7割がこれに帰属する。全体的な特徴として、口縁部が山型突起をもつ ものや沈線間に刻みが施されるもの、無文のものなどがある。5・14・15・30~32は口縁部が山型 に突起するものである。いずれも口唇部に刻みが入り、下部には沈線が施される。17~19は並行する 沈線間に刻みが施されるものである。17はこれにボタン状の貼付が伴う。 3 ・4 ・6 ・7 ・11・13・ 31:33:34は無文の土器である。器種が椀となるものが多く、口縁部が残るものは口唇が角張ったり、 上端が平坦となるのが特徴である。内外面とも丁寧にナデ成形されるものが多いが、6・11のように 成形が粗いものも見受けられる。3は小型の注口土器である。この他、縄文のみのものがあるが、全 体的に節が細かいものが多く、1・2のように輪積み痕が顕著なものがある。36のみ上記の時期から 外れる。縄文のみのため可能性の示唆に止めるが、底部からの立ち上がりの形状から縄文時代晩期~ 弥生時代に属する可能性がある。

石器は遺構内からの出土は3点のみで、他はすべて遺構外からの出土である。器種としては、敲磨器や礫器、打製石斧といった礫石器がほとんどで、剥片石器は1点のみである。敲磨器としたのは37・48~54である。37は敲き痕と磨り痕の両方が見られ、縁辺を敲き、平坦面を磨りに使用している。48~52は敲き痕のみ見られるもので、稜の明確な側面に使用痕を残すものや全体に痕跡を残すものがある。53・54は磨り痕のみ見られるものである。縁辺の一部に鈍角な刃部を有するものを礫器としたが、38・45~47がこれにあたる。40~44は打製石斧である。礫器と異なり定形性をもつものをこれに含めた。40・42は刃部を側面にも有する。

#### 5 総括

今回の調査の結果、南川尻遺跡は縄文時代後期の集落と狩猟場を併せ持つ遺跡であることが明らかとなった。時期としては、出土土器から縄文時代後期前葉と後葉の大きく2時期に分かれるが、後葉のものが多数を占める。前者に帰属する可能性のある遺構はSIO2、後者ではSIO1・SKO1・SKO4・SNO1である。遺構は谷側のB区では水田による地形改変のため遺構は少数しか確認されず、尾根上のA区でその大半が確認できる。このA区においては、遺構の配置に一定の傾向が観取でき、西側に溝状の陥し穴が集中する。これらは長軸方向が等高線に平行するものが多いが、重複することがなく、概ね直線上に並ぶことからも、同時期に計画的に配置された可能性が高い。一方、竪穴住居跡や土坑類といった集落に関係する施設はA区の東側に多い傾向にある。陥し穴が集中する西側ではこれらの遺構が確認されないことから、同時期での居住域・狩猟域といった場の使い分けが行われていたことが推測される。また、配置的にも陥し穴は調査区外南西方向に、居住施設は東方向に続いて存在する可能性が考えられる。

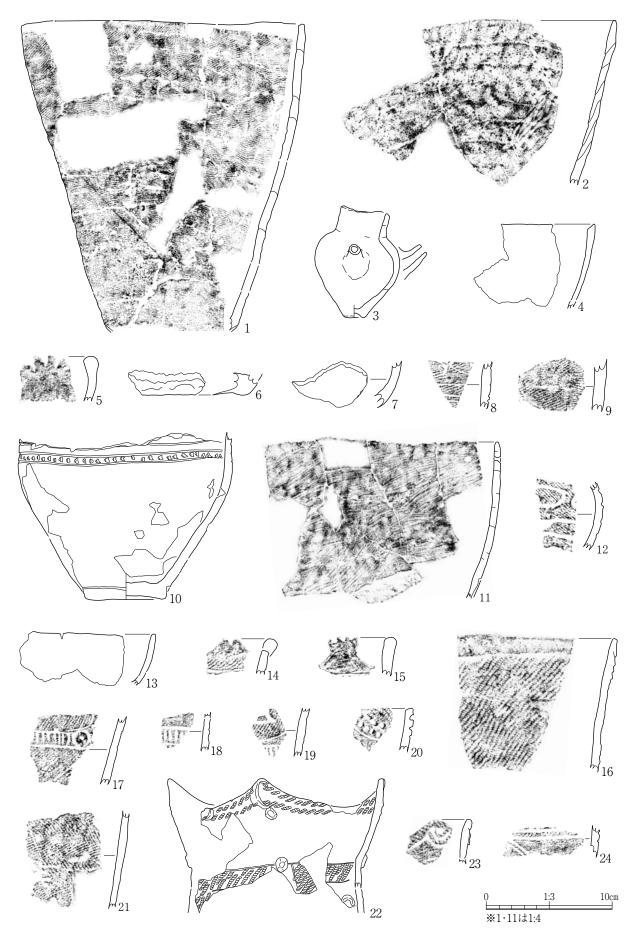
なお、南川尻遺跡に関わる報告はこれを以ってすべてとする。

#### <引用・参考文献>

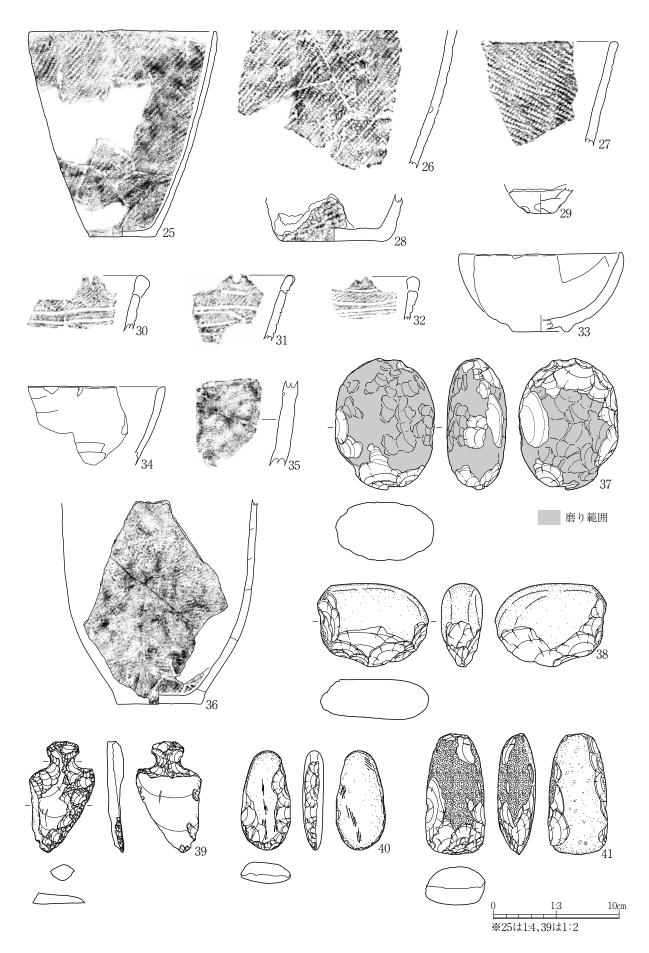
種市町教育委員会 2005 「種市町内遺跡詳細分布調査報告書 I 」 種市町埋蔵文化財調査報告書第2集 洋野町教育委員会 2013 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集

#### 第2表 土器観察表

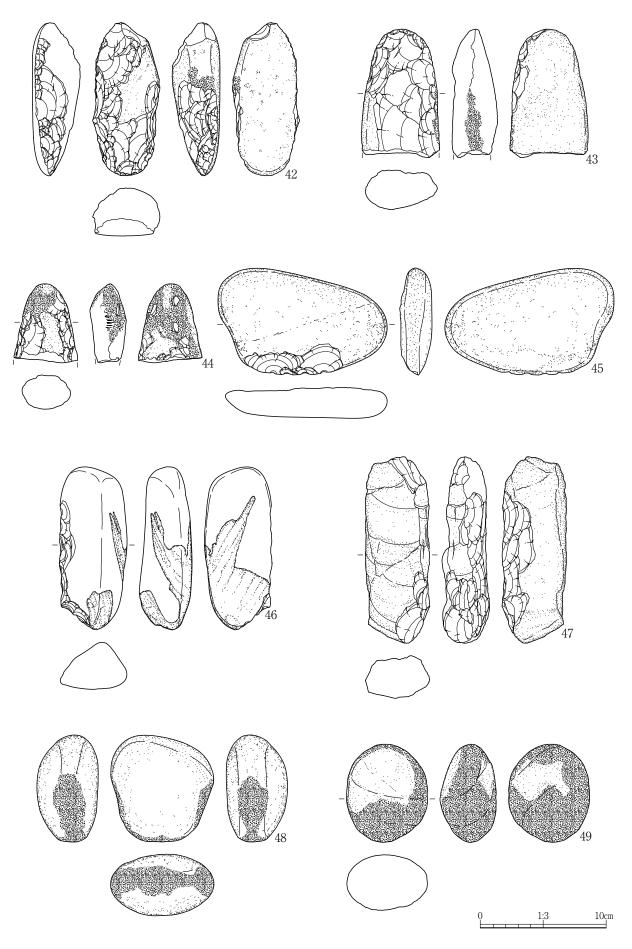
	of the factor	- u.	nn 44	der th	文様・特徴・その他	11-11-11-11	£***-	-tv.	
No.	出土地点	層 位	器種	部位	外 面	内 面	時期	備	考
1	SI01 RP1·6·7	床面	深鉢	口縁~胴	RL縦·斜	ナデ	後期後葉		
2	SI01 RP8	床面直上層	深鉢	口縁~胴	無文、輪積み痕顕著、ナデ	ナデ	後期後葉		
3	SI01 RP2	床面直上層	注口	完形	無文、ナデ	ナデ	後期後葉		
4	SI01	埋土	椀?	口縁	口唇平坦、無文、ミガキ	ナデ	後期後葉		
5	SI01 炉K1	埋土	深鉢	口縁	波状口縁(山型突起)、口唇に刻み	ナデ	後期後葉		
6	SI01 北西	埋土~床面	椀?	底	無文、ナデ	ナデ	後期後葉		
7	SI01 炉K1	埋土	椀?	底	無文、ナデ	ナデ	後期後葉		
8	SI01	床面	深鉢	胴	LR横→沈線	ナデ	後期後葉		
9	SI01 中央	床面	深鉢	胴	LR横	ナデ	後期後~末葉		
10	SI02 周辺		深鉢	胴~底	沈線(平行)+刺突、下半部無文、ミガキ	ナデ	後期前葉		
11	SI02 周辺		深鉢	口縁~胴	無文、斜方向へのナデ顕著、補修孔	ナデ	後期後葉?	SK01A埋土出:	
12	SI02	床面	深鉢	胴	L縦→沈線	ナデ	後期前葉	SK01A埋土出:	土と接
13	SK01A	埋土	椀	口縁~胴	無文、ミガキ	ミガキ	後期後葉		
14	SN01 周辺		深鉢	口縁	波状口縁(山型突起)、口唇に刻み、L横→沈線	ナデ	後期後葉		
15	SN01 周辺		深鉢	口縁	波状口縁(山型突起)、口唇に刻み、沈線、ミガキ	ナデ	後期後葉		
16	SN01 周辺		深鉢	口縁~胴	折返し口縁、RL縦	ナデ	後期	表面スス付着	
17	SN01 周辺		深鉢	胴	ヘソ状突起貼付、沈線+間刻み	ナデ	後期後葉		
18	SN01 周辺		深鉢	胴	沈線(平行)+間刻み	ナデ	後期後葉		
19	SN01 周辺		深鉢	胴	沈線、LR横	ナデ	後期後葉		
20	SN01 周辺		深鉢	口縁	RL横、刺突、沈線	ナデ	後期前葉?		
21	SN01 周辺		深鉢	胴	羽状様(LR横+RL横)	ナデ	後期後葉	破損後、被熱	
22	A区 北寄り西端	Ⅲ層	深鉢	口縁~胴	波状口縁(山型突起4対?)、L圧痕(2条)、ボタン状突起 貼付、「ノ」字状貼付、ミガキ、沈線(垂下)、RL縦	ミガキ	後期初頭~前葉		
23	A区 中央北寄り 東	Ⅲ層	深鉢	口縁	波状口縁(山型突起)、貼付→RL横、刺突	ナデ	後期前葉		
24	B区 北側	Ⅲ層	深鉢	胴	沈線(平行·斜)	ナデ	後期前葉		
25	A区 東斜面下側	黒色土層(Ⅲ層)	深鉢	口縁~底	RL縦→口縁付近一部RL横	ミガキ	後期前葉		
26	A区 北寄り西端	Ⅲ層	深鉢	口縁~胴	RL縦	ミガキ	後期前葉		
27	A区 北寄り西端	Ⅲ層	深鉢	口縁	口唇平坦、LR縦	ナデ	後期前葉		
28	A区 北寄り西端	Ⅲ層	深鉢	底	LR横	ナデ	後期前葉		
29	A区 中央南寄り		鉢?	底	無文、指頭圧痕	ナデ	後期前葉?	製塩土器?	
30	A区 北寄り東	Ⅲ層	深鉢	口縁	波状口縁(山型突起)、口唇刻み、L横?→沈線、 彩色(赤褐色)	ナデ、 彩色(赤褐色)	後期後葉		
31	B区	黒色土層(Ⅲ層)	深鉢	口縁	波状口縁(山型突起)、口唇刻み、RL縦→沈線	ナデ	後期後葉		
32	B区 北側	Ⅲ層	深鉢	口縁	波状口縁(山型突起)、口唇刻み、LR横→沈線	ナデ	後期後葉		
33	A区 中央	Ⅲ層	椀	口縁~底	無文、ナデ	ナデ	後期後葉		
34	A区 北寄り東	Ⅲ層	鉢?椀?	口縁	無文、ナデ	ナデ	後期後葉		
35	B区 北側	Ⅲ層	深鉢	胴	無文、ナデ	ナデ	後期後葉		
36	B区 T9	砂層	深鉢	口縁~底	RL縦	ミガキ	弥生?		



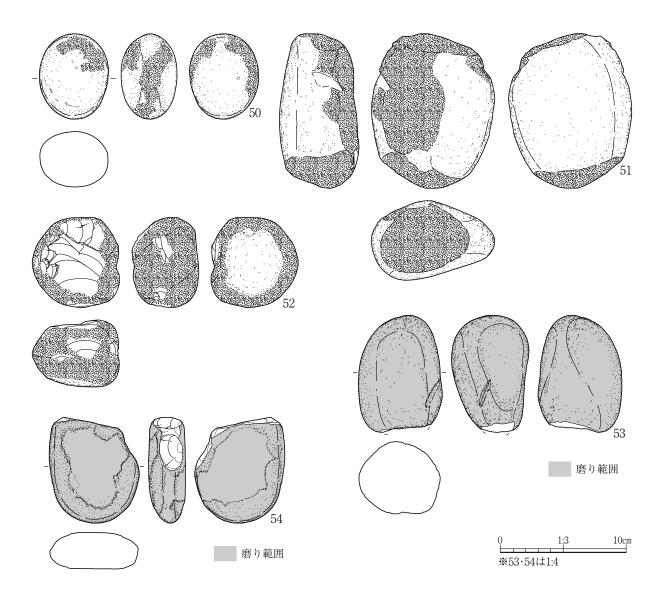
第8図 土器(1)



第9図 土器(2)、石器(1)



第10図 石器(2)



第11図 石器(3)

第3表 石器観察表

				計測	値 ※(	()は残る	存値			
No.	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	産地・時代	備考
37	SI01	床面直上層	敲磨器	10.6	7.9	4.7	560.8	花崗岩	中生代白亜紀·北上山地	
38	SI01 西	埋土下位	礫器	6.7	8.7	3.3	328.6	はんれい岩	中生代白亜紀・北上山地	
39	SI02 炉周辺		石匙	5.7	3.5	0.9	14.0	頁岩	中生代·北上山地	
40	A区 北東	Ⅱ~Ⅲ層	打製石斧	8.0	4.0	1.7	76.2	ヒン岩	中生代白亜紀・北上山地	
41	A区 中央	IV層	打製石斧	9.7	4.8	3.0	203.2	砂岩	中生代・北上山地	
42	A区 中央	Ⅲ層	打製石斧	12.2	5.3	3.8	334.4	細粒閃緑岩	中生代白亜紀・北上山地	
43	A区 南東	Ⅲ層	打製石斧	(9.9)	6.2	3.6	333.7	ヒン岩	中生代白亜紀・北上山地	下部欠損
44	A区 北東	Ⅱ~Ⅲ層	打製石斧	(6.2)	5.1	2.8	115.7	細粒閃緑岩	中生代白亜紀·北上山地	下部欠損
45	A区 中央北	Ⅱ~Ⅲ層	礫器	8.4	13.4	2.5	444.9	砂岩	中生代・北上山地	
46	A区 中央北	Ⅱ~Ⅲ層	礫器	13.0	5.4	4.1	436.3	はんれい岩	中生代白亜紀・北上山地	
47	A区 中央西	Ⅱ~Ⅲ層	礫器	14.9	5.2	3.8	386.9	半花崗岩 (アプライト)	中生代白亜紀・北上山地	
48	A区 中央東	Ⅱ~Ⅲ層	敲石	8.5	8.2	4.9	577.3	はんれい岩	中生代白亜紀・北上山地	
49	A区 中央北	Ⅱ~Ⅲ層	敲石	7.8	6.4	4.5	299.4	砂岩	中生代・北上山地	
50	A区 北西	Ⅱ~Ⅲ層	敲石	6.9	5.5	4.5	235.0	砂岩	中生代・北上山地	
51	A区 北西		敲石	12.3	9.7	6.2	982.6	砂岩	中生代・北上山地	
52	B区 T3	Ⅱ層	敲石	7.2	6.8	5.8	465.3	はんれい岩	中生代白亜紀・北上山地	
53	A区 中央北	Ⅱ~Ⅲ層	磨石	(12.4)	8.9	8.2	1181.8	(アフライト)	中生代白亜紀・北上山地	
54	A区 北西端	Ⅱ~Ⅲ層	磨石	(10.8)	9.5	3.9	649.6	砂岩	中生代・北上山地	

#### [分析鑑定報告1]

#### 南川尻遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

南川尻遺跡は、岩手県九戸郡洋野町種市第28地割内(北緯40°24′51″、東経141°41′54″)に所在する。 測定対象試料は、竪穴住居跡SI01の床面から出土した炭化物の合計1点である(表1)。

#### 2 測定の意義

遺跡内における竪穴住居跡の時期を特定する。

- 3 化学処理工程
- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1 \text{mol}/\ell$  (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001 Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には1 AAA、1 M未満の場合は1 AAA と表1 CLに記載する。
  - (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
  - (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
  - (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、 測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした $^{14}$ C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 $^{14}$ Cの計数、 $^{13}$ C濃度( $^{13}$ C/ $^{12}$ C)、 $^{14}$ C濃度( $^{14}$ C/ $^{12}$ C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta$  <sup>13</sup>Cは、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}$ C年代(Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 $^{14}$ C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}$ C年代は $\delta$   $^{13}$ Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}$ C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}$ C年代の誤差(±1 $\sigma$ )は、試料の $^{14}$ C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3)pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}$ C濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}$ Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが $^{100}$ 以上( $^{14}$ Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modernとする。この値も $\delta$   $^{13}$ Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}$ C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}$ C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}$ C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma=68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma=95.4\%$ )で表示

される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta$  <sup>13</sup>C補正を行い、下 1 桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCall3データベース (Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正 (calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

#### 6 測定結果測定

結果を表 $1\cdot 2$ に示す。試料 No. $10^{14}$ C年代は $2900\pm 30$ yrBP、暦年較正年代 $(1\sigma)$ は $1216\sim 1127$ calBCの範囲で示され、縄文時代晩期初頭に相当する(小林編2008)。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

#### 引用文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

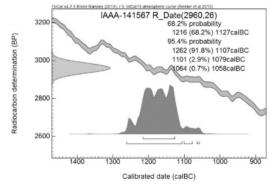
#### 表 1 放射性炭素年代測定結果(δ¹3C補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ <sup>13</sup> C (‰)	δ <sup>13</sup> C補正る	あり
側赴笛与	<b></b>	1本以场別	試件形態	处垤万佉	(AMS)	LibbyAge(yrBP)	pMC(%)
IAAA-141567	No.1	SI01 床面	炭化物	AAA	$-27.07 \pm 0.63$	$2,960 \pm 30$	$69.18 \pm 0.23$

#### 表2 放射性炭素年代測定結果(δ¹3C未補正値、暦年較正用¹4C年代、較正年代)

測定番号	8 <sup>13</sup> C補正なし		暦年較正用	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
侧足笛与	Age(yrBP)	pMC(%)	(yrBP)	10倍平气靶团	20)曾平代軋囲	
					1262calBC - 1107calBC (91.8%)	
IAAA-141567	$2,990\pm20$	$990 \pm 20$ $68.89 \pm 0.21$ $2,960 \pm 26$ $1216calBC - 1127calBC (68.2%)$	1101calBC - 1079calBC ( 2.9% )			
					1064calBC - 1058calBC ( 0.7% )	

#### [図版]暦年較正年代グラフ



#### [分析鑑定報告2]

#### 南川尻遺跡における火山灰分析

(株)パリノ・サーヴェイ

はじめに

九戸郡洋野町南川尻遺跡の発掘調査では、縄文時代後期〜晩期の竪穴住居、土坑等の遺構や縄文土器、土師器等の遺物が検出されている。今回の分析調査では、遺構覆土より採取した火山灰質試料を対象として、テフラの検出同定や屈折率測定により、既知の火山灰との対比を行い、遺構の年代指標を作成する。

#### 1 試料

試料は、竪穴住居 S I 01(試料名「MKJ-141027 SI01 南西 床面直上」)、土坑 S K 04(試料名「MKJ-141028 SK 04 埋土中位」)から各 1 点採取された。計 2 点である。

#### 2 分析方法

#### (1)テフラ検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

#### (2)火山ガラスの屈折率測定

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤 (1995)の MAIOTを使用した温度変化法を用いた。

#### 3 結果

#### (1)テフラ検出同定

結果を、表1に記す。両試料とも、軽石は検出されなかったが、無色透明の軽石型火山ガラス、バブル型火山ガラスが極めて微量~微量混在する。またいずれの試料も、バブル型火山ガラスが少なく、SK04埋土中位では、褐色のバブル型火山ガラスが極めて微量混在する。

#### 表1 テフラ分析結果

試料番号				火山ガラス			軽石		備考	
<b>八八四</b> 八八四 八八四 八八四 八八四 八八四 八八四 八八四 八 八 八 八			量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	加考		
MKJ-141027	SI01 南西	床面直上	1	(+)	cl·pm>cl·bw	_	_	_	石英、斜長石の斑晶 + +	
MKJ-141028	SK04	埋土中位	2	+	cl·pm>cl·bw,br·bw	_	_	_	石英、斜長石の斑晶 + +	

凡例 -: 含まれない,(+): きわめて微量,+: 微量

cl:無色透明,br:褐色,bw:バブル型,pm:軽石型

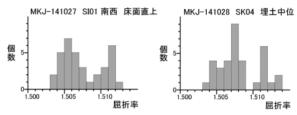
#### (2)火山ガラスの屈折率測定

試料の火山ガラスの屈折率測定結果を図1に記す。

S I 01 南西 床面直上で検出された火山ガラスの屈折率のレンジは、n1.503-1.512であり、n1.505、n1.511の集中度が高い。

SK04 埋土中位で検出された火山ガラスの屈折率のレンジは、n1.503-1.513であり、n1.507、n1.511 の集中度が高い。

#### 火山灰ガラスの屈折率



#### 4 考察

今回分析試料とした火山灰の可能性があるとされた2試料からは、わずかながら火山ガラスが検出 されている。本遺跡の地理的位置を考慮すれば、これらは十和田カルデラからの噴出物である可能性 が高い。

町田・新井(2003)による十和田カルデラの完新世テフラの火山ガラスの屈折率をみると、今回の試 料のような比較的広い屈折率を示すテフラとしては、十和田八戸テフラ (To-H:町田・新井,2003;青木・ 新井,2000)がある。To-Hの噴出年代は、暦年較正年代で14,500-15,300年前との年代が得られている(青 木・新井 2001)。

両試料で火山ガラスと共に含まれる石英、斜長石、黒雲母は、洋野町周辺に分布する前期白亜紀の 黒雲母角閃石花崗閃緑岩に由来する鉱物であり、本遺跡付近の土壌に元々含まれていたと考えられる。 北東北地域における発掘調査例をみると、旧石器時代終末期、縄文時代草創期の遺物包含層は、To-H の火砕流が埋めていることがある(町田ほか,1984)。しかし、今回のテフラは微量の検出であることと、 花崗閃緑岩に由来する鉱物片が混在していることから二次堆積物であると考えられ、直接遺構の年代 に関わる資料としては、評価できないとみられる。

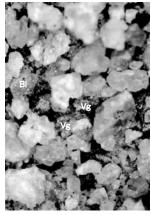
#### 引用文献

青木かおり・新井房夫,2000,三陸沖海底コア KH943,LM-8の後期更新世テフラ層序, 第四紀研究,39,107-120.

古澤明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133. 町田洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

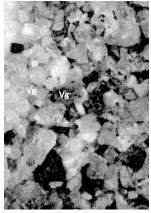
町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学 - 考古学研究と関連するテフラのカタログ - . 渡辺直経編 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学,865-928.

図版1 テフラ

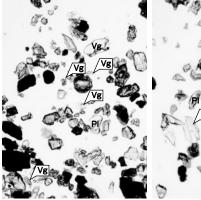


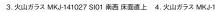
1. MKJ-141027 SI01 南西 床面直 L

N.例 Vg:火山ガラス.PI:斜長石.Bi:黒雲母



2. MKJ-141028 SK04 埋十中位







2.0mm



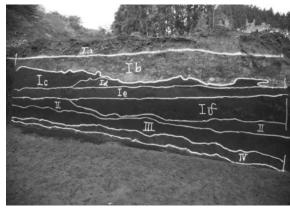
調査区 全景 (上空→)



調査区 遠景(上空→)



調査前風景 (S→)

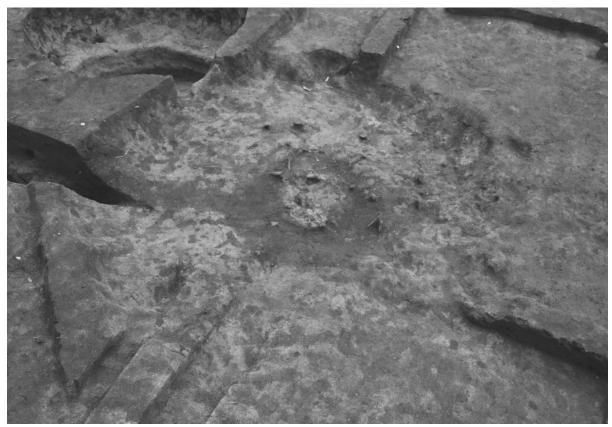


基本層序(B区)

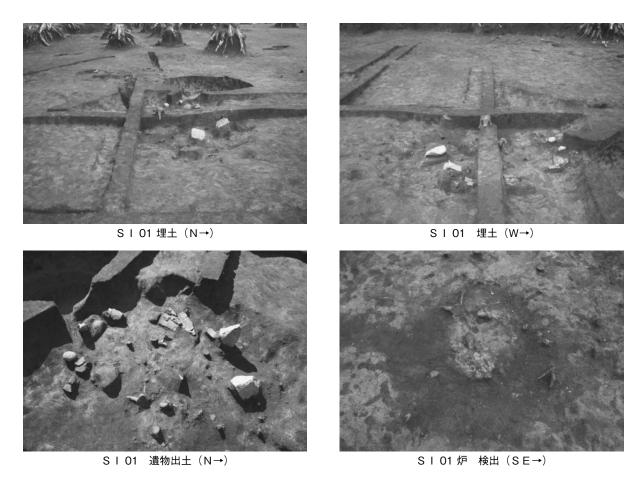


作業風景

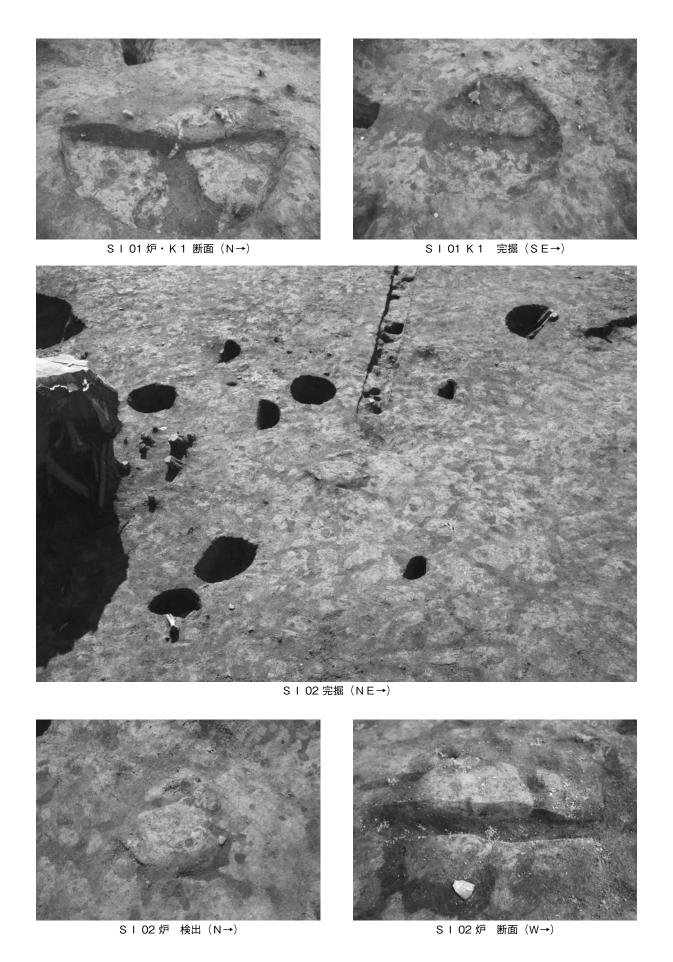
写真図版1 航空写真、その他



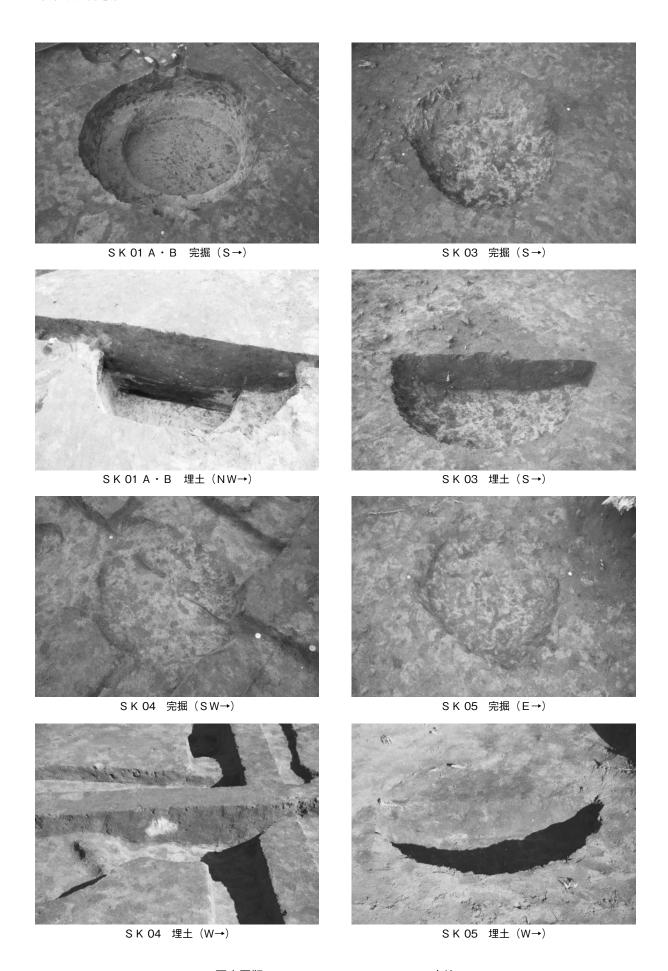
S I 01 完掘 (S E →)



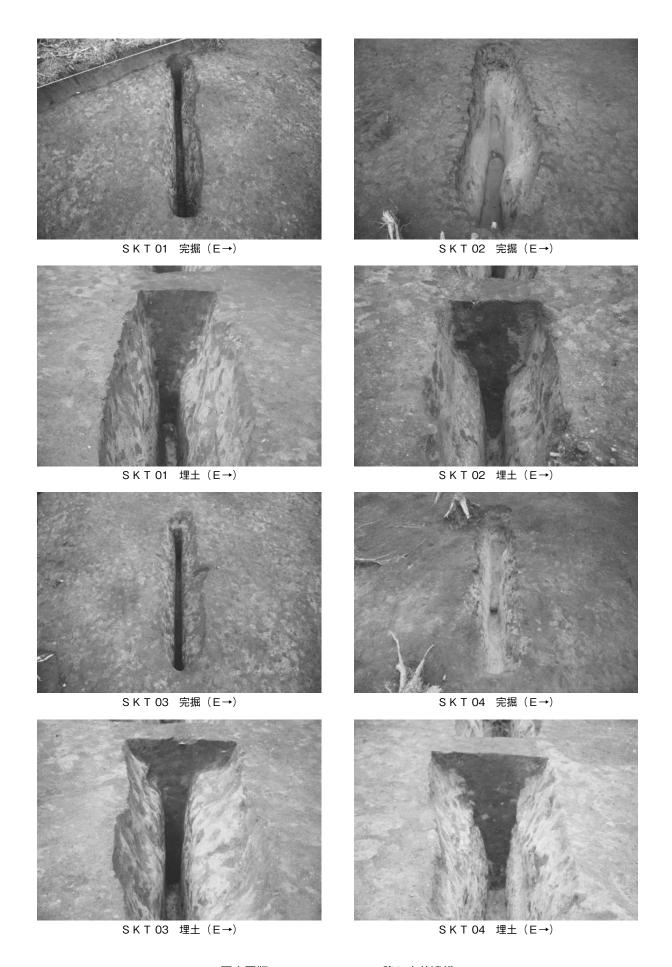
写真図版2 SI 01 竪穴住居跡(1)



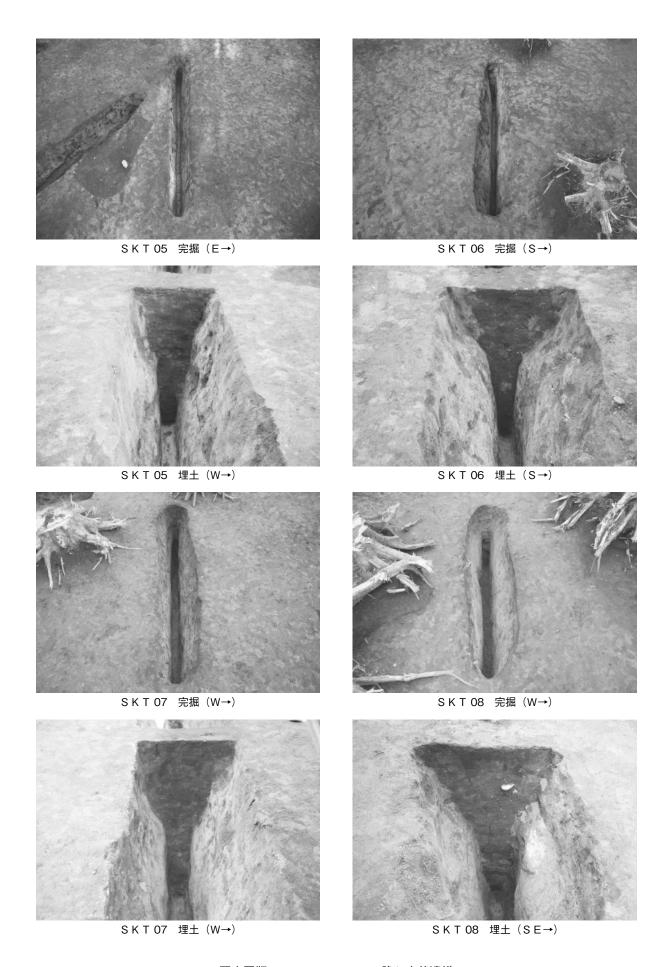
写真図版3 SI 01 (2)・02 竪穴住居跡



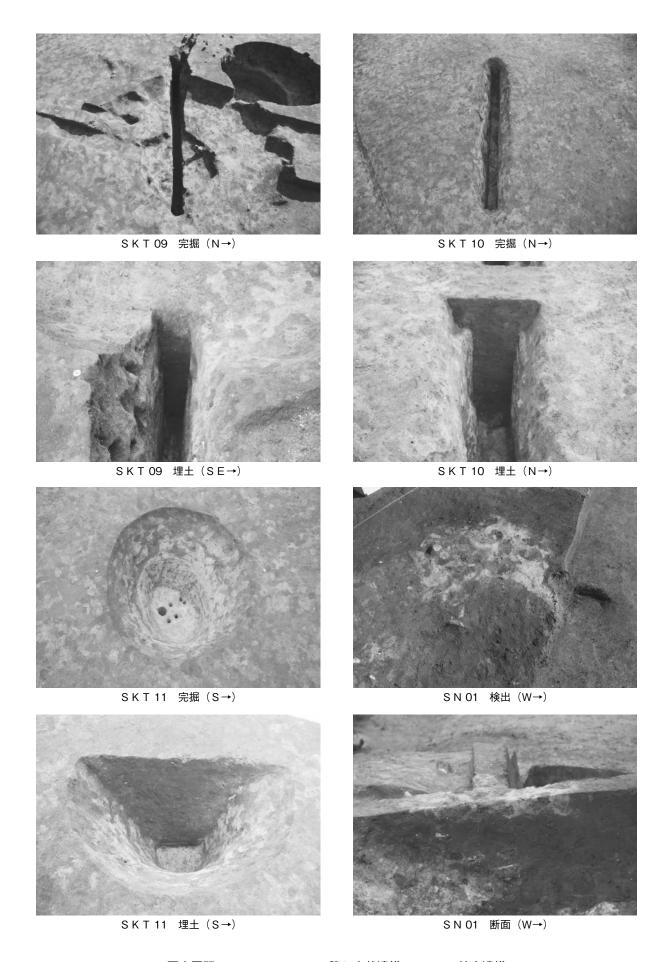
写真図版4 SK 01 A・B・03 ~ 05 土坑



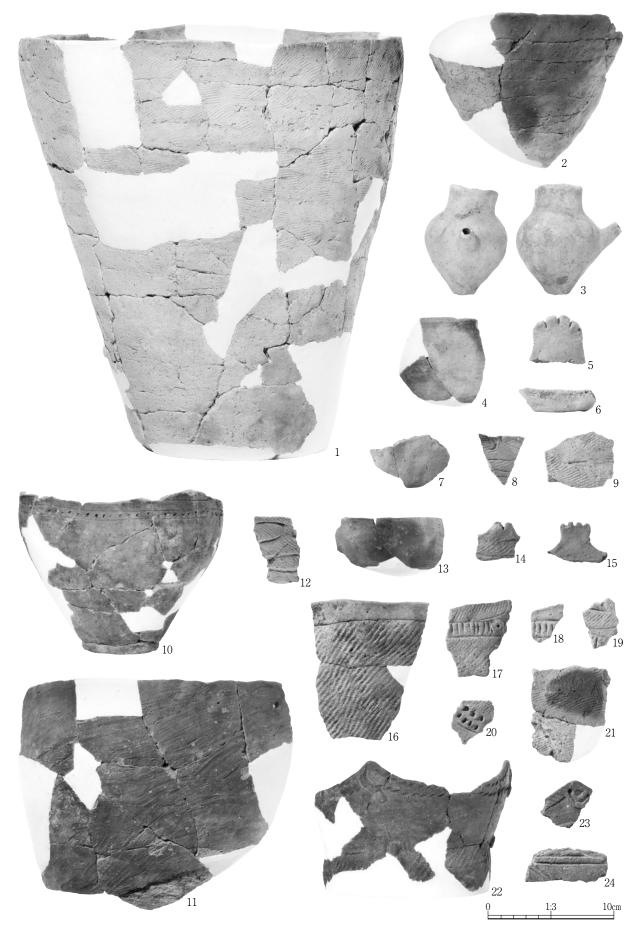
写真図版 5 SKT 01 ~ 04 陥し穴状遺構



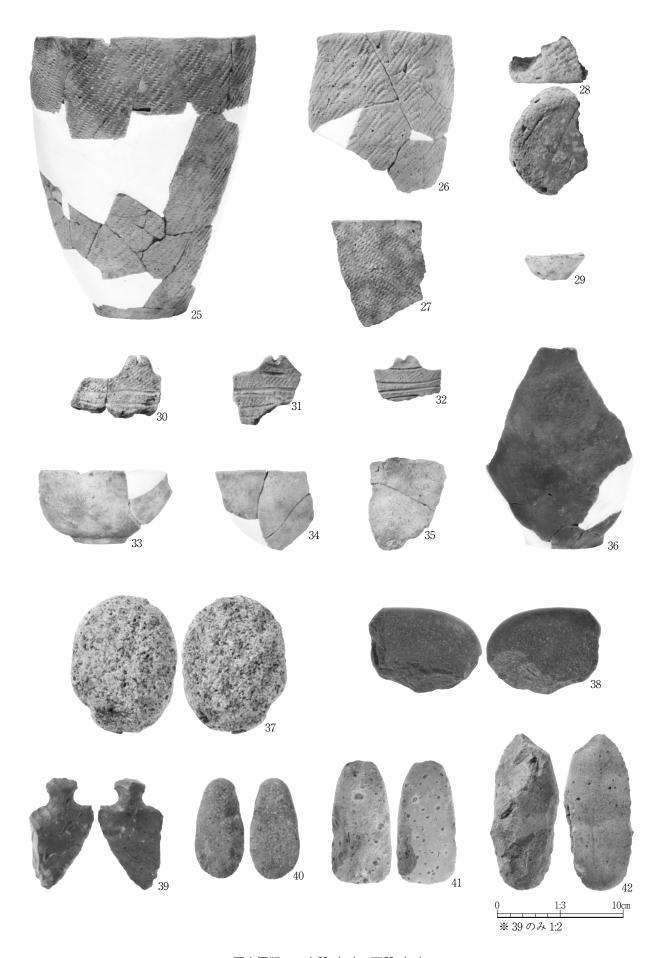
写真図版 6 SKT 05~08 陥し穴状遺構



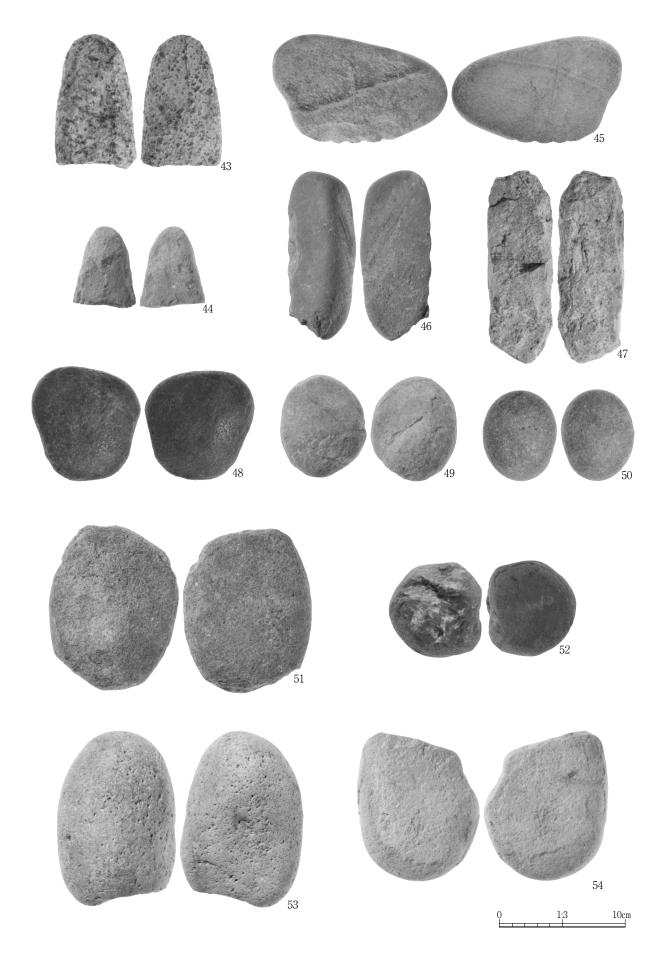
写真図版7 SKT09  $\sim$  11 陥し穴状遺構、SN01 焼土遺構



写真図版8 土器(1)



写真図版9 土器(2)、石器(1)



写真図版10 石器(2)

# (2) 下向遺跡

所 在 地 九戸郡洋野町中野第1地割地内

**委 託 者** 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 9 日 ~ 5 月 12 日

遺跡コード・略号 IF 89-1394・SM-14

調査対象面積 2,400 m<sup>2</sup>

調査終了面積 2,400㎡

調査担当者 濱田 宏・宮内勝巳・

藤田崇志

### 1 調査に至る経過

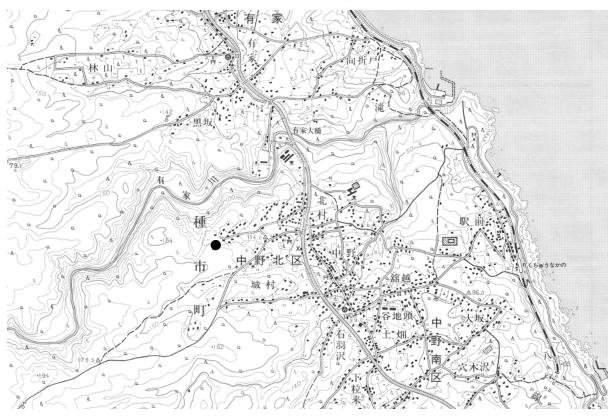
下向遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業 (洋野~階上)の事業区域内に存在することから発掘 調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間を含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては平成24年9月5日付け国東整陸二調第30号により三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年10月24日から10月25日にわたり試掘調査を行い、平成24年10月26日付け教生第1326号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手 県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



1:25,000 陸中中野

第1図 遺跡の位置

#### 2 遺跡の位置と立地

下向遺跡はJR八戸線陸中中野駅から北西約2kmに位置し、海岸からも約2km離れている。遺跡の立地する台地は標高136m~138mと高位にあり、北東方向に穏やかに傾斜している。また、北側は有家川、南側を有家川の支流である本木川が流れ、深く浸食され急崖となっている。

#### 3 基本層序

基本層序は試掘調査の結果も踏まえて第Ⅰ層から第Ⅴ層に分層している。遺構は第Ⅲ層内で確認されているが、攪乱等も見られ不明瞭な遺構もみられる。基本層序の特徴は調査区の北側と南側では様相が幾分相違していることである。特に第Ⅲ層は標高の高くなる南側では薄く北側が厚く堆積している。

第 I 層 10YR3/2 黒褐色 シルト しまりなし 粘性なし 表土 (森林腐植土)

第Ⅱ層 10YR3/3 暗褐色 シルト しまりなし 粘性なし 草木根を多く含む

第Ⅲ層 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりやや有り 粘性やや有り 黄褐色土の小ブロックを全体に含む

第IV層 10YR4/4 褐色 シルト しまりやや有り 粘性やや有り 漸移層で火山灰の粒子 (1~5mm大)を全体に含む

第V層 10YR5/6 黄褐色 粘質シルト しまり有り 粘性やや有り 地山 (八戸火山灰) 浮石を含む

#### 4 調査の概要

遺構の検出は重機で表土を除去した後、第Ⅱ層下位での遺構検出を行ったが第Ⅲ層の黒褐色土と遺構埋土の差異が不明瞭であることから、第Ⅲ層下位まで掘り下げている。一部では第Ⅳ層上面まで掘り下げて遺構の精査を実施している。

# (1)遺構

調査区内で検出された遺構は、陥し穴状遺構6基と土坑1基である(第2図)。各遺構の検出は表土を除去し、徐々に掘り下げ基本層序第Ⅲ層下位での検出である。また、調査区の北西端で弥生時代の土器片が出土し、土器集中箇所としたが竪穴住居跡等は確認できなかった。

#### SKT01陥し穴状遺構(第3図、写真図版2)

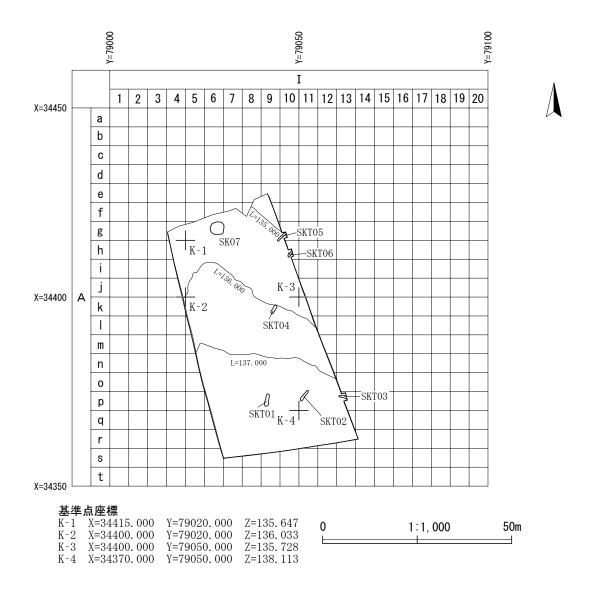
調査区南側のほぼ中央部に位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は溝状を呈し、開口部は長軸3.30m ×短軸0.75m、深さは検出面から90~115cmである。埋土は6層に分かれ、底面には黒褐色土が10cm~20cmほど堆積している。底面はほぼ平坦で幅は0.20~0.25mを測るが、両端は0.30m前後と広くなっている。壁は垂直気味に立ち上がり、中位から上位は外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

# SKT02陥し穴状遺構(第4図、写真図版2)

調査区南側のほぼ中央部に位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は溝状を呈し、開口部は長軸3.35m×短軸0.52m、深さは検出面から92~98cmである。埋土は6層に分かれ、中位から底面まで暗褐色土が堆積している。底面はほぼ平坦で幅は0.05~0.15mを測る。壁は垂直に立ち上がり、中位から上位は外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

# SKT03陥し穴状遺構(第4図、写真図版2)

調査区の東縁中央側に位置し、重複はなく単独で検出した。遺構は調査区外に大半が延びている。 平面形態は溝状を呈し、開口部は検出部分で長軸2.25m×短軸0.95m、深さはⅡ層下位から150cm前後 を測る。埋土は7層に分かれ、底面には黒褐色土が約10cm堆積している。底面は中央部にむかい傾斜 して深くなり、端部の幅は狭いが中央部にむかって広くなり0.15mを測る。壁は底面からほぼ垂直に



第2図 下向遺跡遺構配置図

120cmほど立ち上がり、上位は幾分外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

# SKT04陥し穴状遺構(第5図、写真図版2)

調査区の南側東寄りに位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は溝状を呈し、開口部は長軸 2.65m×短軸0.71m、深さは検出面から120~125cmである。埋土は7層に分かれ、底面には黒褐色土が15cm前後堆積している。底面はほぼ平坦だが北東方向に傾斜し、幅は0.10m前後と狭いが両端はやや広くなっている。壁は幾分外傾しながら立ち上がり、中位から上位は広くなっている。遺構内から遺物は出土していない。

#### SKT05陥し穴状遺構(第5図、写真図版2)

調査区の中央東端に位置し、重複はなく単独で検出した。遺構の一部は調査区外に延びている。平面形態は溝状を呈し、開口部は検出部分で長軸2.85m×短軸0.40m、深さは第Ⅲ層下位から約110cmを測る。埋土は7層に分かれ、底面には黒褐色土と暗褐色土が15cm前後堆積している。底面は調査区外方向に傾斜して深くなり、幅は5~10cmと狭い。壁は外傾気味に立ち上がり、そのまま上位まで外傾している。遺構内から遺物は出土していない。

# SKT06陥し穴状遺構(第6図、写真図版2)

調査区の中央東端に位置し、重複はなく単独で検出した。調査区の東縁側で検出され、遺構の大半は調査区外に延びている。平面形態は溝状を呈し、開口部は検出部分で長軸1.95m×短軸0.47m、深さは第Ⅲ層下位から110cm前後を測る。埋土は5層に分かれ、底面には黒褐色土が約10cm堆積している。底面は中央部にむかい高くなり、浅くなっている。幅は0.10~0.15mを測り、端部でやや広くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが上半部は崩落が著しく広くなっている。遺構内から遺物は出土していない。SK07土坑(第6図、写真図版2)

調査区の北端中央に位置し、重複はなく単独で検出した。平面形態は不整円形を呈し、検出面での規模は東西3.55m×南北3.50m、深さは85~95cmを測る。埋土は10層に分かれ、堆積状況からは人為堆積と判断される。底面の凹凸は少なく中央部が窪み、低くなっている。西壁側は傾斜した底面から緩やかに立ち上がり、東壁側は幾分屈曲して立ち上がる。遺構内からは陥し穴状遺構と同様に遺物は出土していない。

#### 遺物集中箇所

IA4iグリッドに位置し、調査区の北西端のトレンチ調査で検出された土器の集中箇所である。 第Ⅱ層上位から土器片が出土し始めたことから、第Ⅲ層上位まで掘り下げている。しかし、笹の根が 深く明確な層序は捉えられなかった。出土した土器片は小破片ながら30数片出土したが、竪穴住居跡 等の存在は考えにくく、遺物集中箇所一括として取り上げている。

# (2)出土遺物(第7図)

今回の調査で出土した遺物は礫及び石器 3 点と土器片30数点であり、石器 2 点と土器片17点を図示した。1 は磨石で幾分扁平ながら全体に擦痕がみられる。2 は磨石で角錐状を呈し、平坦な擦痕が4 面みられる。3 は口縁部片。単節 LR。4 は胴部片。単節 RL。5 は口縁部片。端部は指頭による連続する押捺。単節 LR。6 は脚部の接合部分。接合部は粘土帯が貼り付けられている。7 は胴部片で外面に煤付が付着している。単節 LR。8 は胴部片。単節 LR。9 は胴部片。単節 LR。10は胴部片。単節 LR。11は胴部片。単節 LR。12は底部片。底部の周縁部は高くなる。13は頸部片。2 条と3 条の二段平行沈線。単節 LR。14は頸部片。2 条の平行沈線。二段。単節 LR。15は頸部片。2 条の平行沈線。地紋不明。16は頸部片。2 条の平行沈線。単節 RL。18は頸部片で5 条の平行沈線と1 条の鋸歯文。地紋不明。19は胴部片。2 条の平行沈線と1 条の鋸歯文。

以上の遺物は遺構に伴うものではないが、2の磨石は遺構検出の拡張時に出土したもので、陥し穴 状遺構に近接しているが時期については不明。1は土器集中箇所に近接していることから弥生時代中 期から後期の可能性が考えられる。土器については、僅かながら縄文時代中期に属するものもみられ るが、弥生時代中期から後期のものが多く出土している。

# 5 まとめ

6基の陥し穴状遺構は北東方向に緩やかに向かう傾斜面で検出され、各遺構の分布からみるとその 配列は散在的であり、当然ながら調査区外に広がる状況である。出土遺物がないことから時期を決め るには躊躇するが、形態などの特徴から縄文時代後期に属するものが大半であろうか。

これら陥し穴状遺構の町内での検出例は増加しており、やや離れるが約12km北に所在する平内Ⅱ遺跡が挙げられる。平内Ⅱ遺跡は2度の発掘調査が行われ、56基の溝状の陥し穴状遺構が発見されている。遺構の時期は縄文時代後期を中心として捉えられているが、縄文時代中期末の土器片が出土した溝状の陥し穴状遺構も数基確認されており、時間的な継続性と時期的な変遷も指摘されている。

土器集中箇所として取り上げた土器類は、弥生時代中期から後期に属するもので、調査区外に同時期の竪穴住居跡を含めた遺構の存在を窺わせる。

なお、下向遺跡平成26年度に関わる報告はこれをもって全てとする。

# 第1表 出土石器一覧

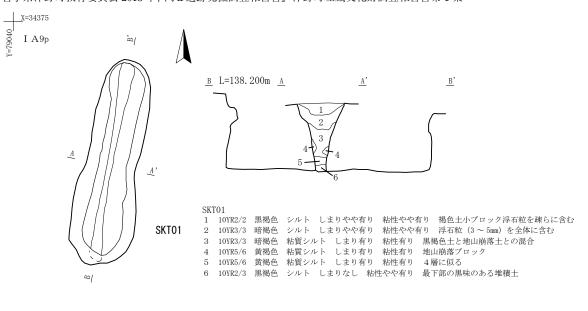
No	出土地点・層位	器種	最大	計測値	(mm)	重 量	T:	庁	(山地)	母方	TV-414
INO	山上地点 管位	1 6 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	長さ	巾	厚さ	(g)	口 口	質(山地)		残存状況	
1	I A4g·Ⅱ層~Ⅲ層	磨石	80	69	48	384.06	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	完	存
2	SK05拡張区	磨石	65	50	40	135.90	花崗閃緑岩	北上山地	中生代白亜紀	一部	欠損

#### 第2表 出土土器一覧

No	出土地点	層位	器種	部 位	文様・装飾(口縁部・胴部・底部)	時期
3	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	浅鉢	口縁部片	LR。横	縄文中期~後期
4	西側トレンチ	Ⅱ~Ⅲ層	深鉢	胴部片	RL。縦	縄文中期~後期
5	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	口縁部片	LR。横+斜め。指頭による押捺。外面 に煤付着	縄文晩期
6	東壁1トレンチ南側	表土-20cm	鉢	脚部片	脚接合部は粘土帯が貼り付けられる。	縄文晩期~弥生
7	I A5h	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	胴部片	LR。横+斜め。外面に煤付着	弥生中期~後期
8	西側トレンチ	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	胴部片	LR。縦+斜め。	弥生中期~後期
9	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	胴部片	LR。横	弥生中期~後期
10	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	胴部片	LR。縦	弥生中期~後期
11	I A5i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	胴部片	LR。斜め。外面に煤付着	弥生中期~後期
12	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	底部片	底部外面の周縁は台状	縄文晩期~弥生
13	I A5h	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	頸部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期~後期
14	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	頸部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期~後期
15	I A4iトレンチ	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	頸部片	平行沈線のみ	弥生中期~後期
16	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	頸部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期~後期
17	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	頸部片	LR施文後、平行沈線。外面に煤付着	弥生中期~後期
18	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	頸部片	LR施文後、平行沈線+鋸歯文	弥生中期~後期
19	I A4i	Ⅱ~Ⅲ層	鉢	頸部片	平行沈線+鋸歯文	弥生中期~後期

# <引用・参考文献>

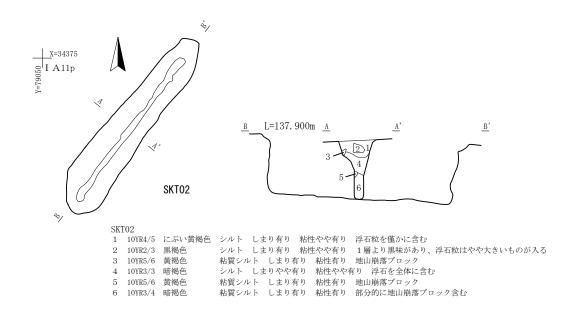
(財) 岩手県文化振興事業団 1996『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第 238 集岩手県種市町教育委員会 2004『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』種市町埋蔵文化財調査報告書第 1 集岩手県洋野町教育委員会 2013『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第 1 集

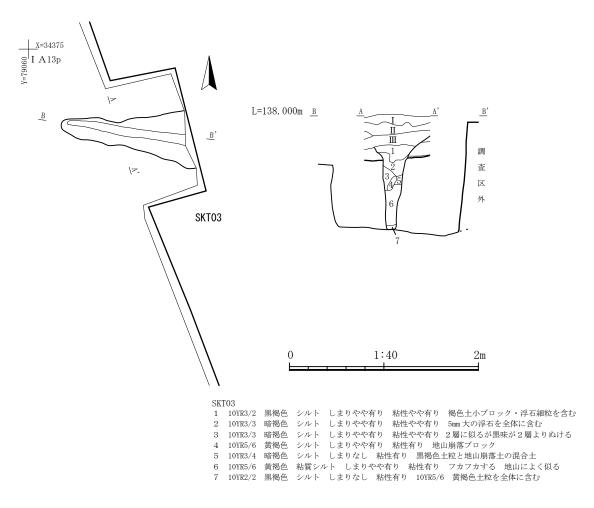


第3図 SKT01陥し穴状遺構

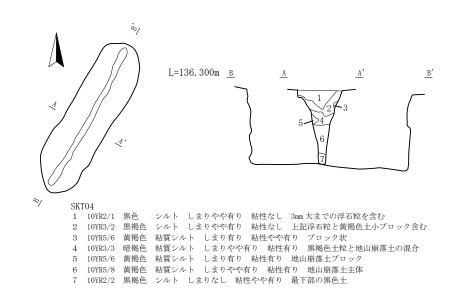
 $2 \mathrm{m}$ 

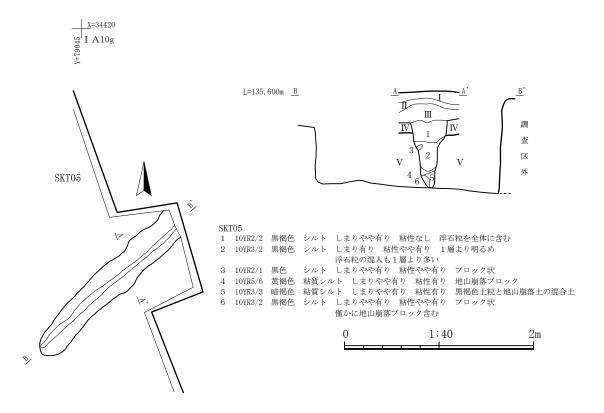
1:40





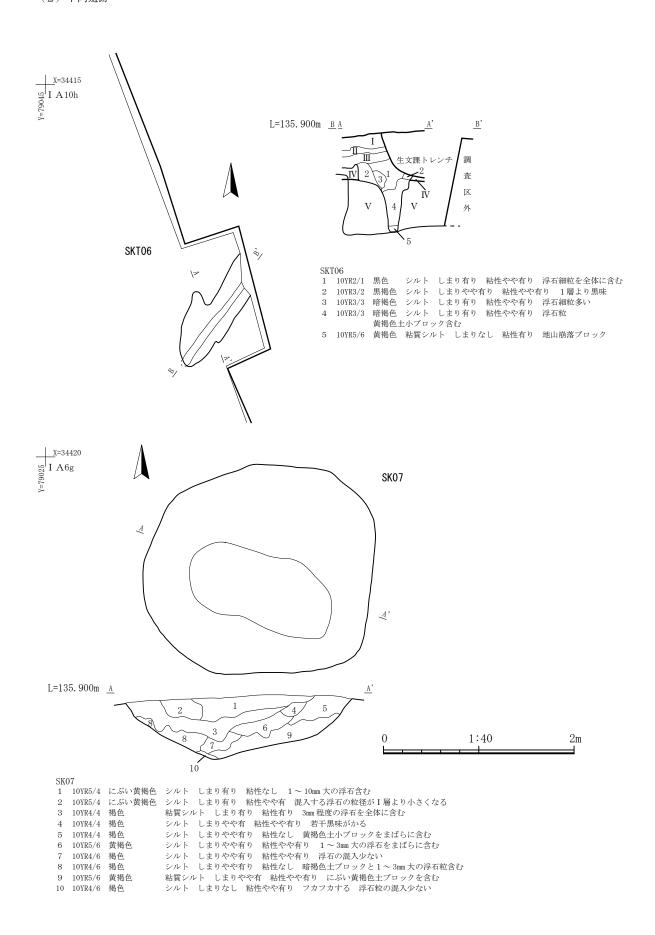




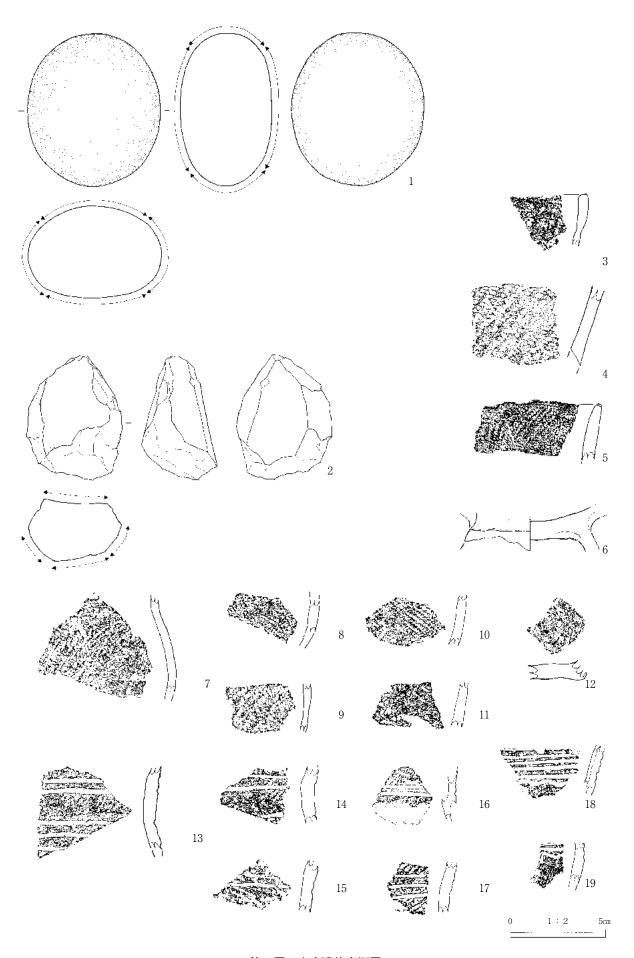


第5図 SKT04・05陥し穴状遺構

## (2) 下向遺跡



第6図 SKT06陥し穴状遺構、SK07土坑



第7図 出土遺物実測図

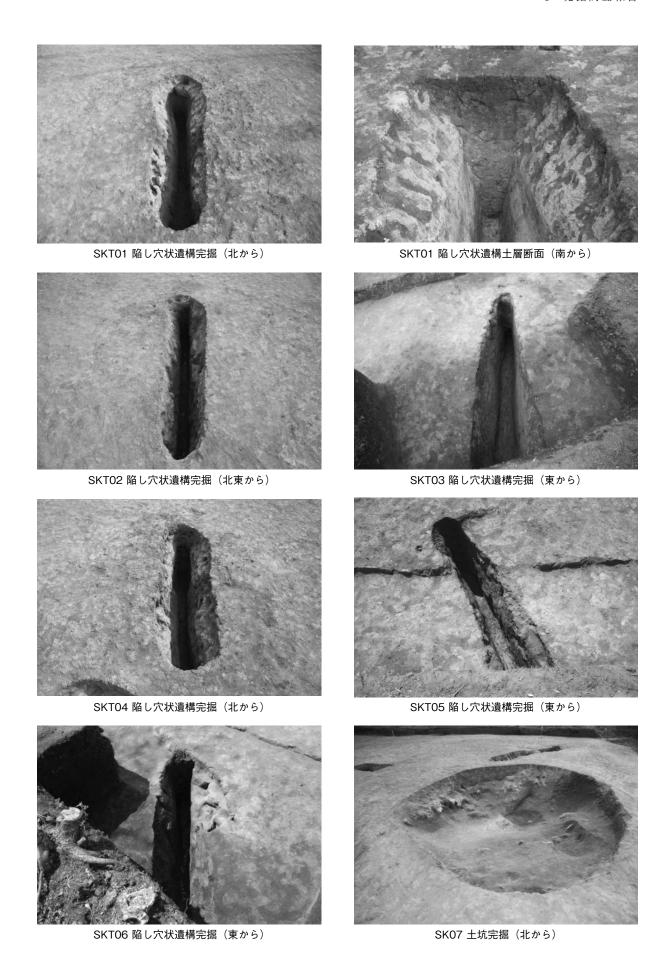


下向遺跡近景(北から)

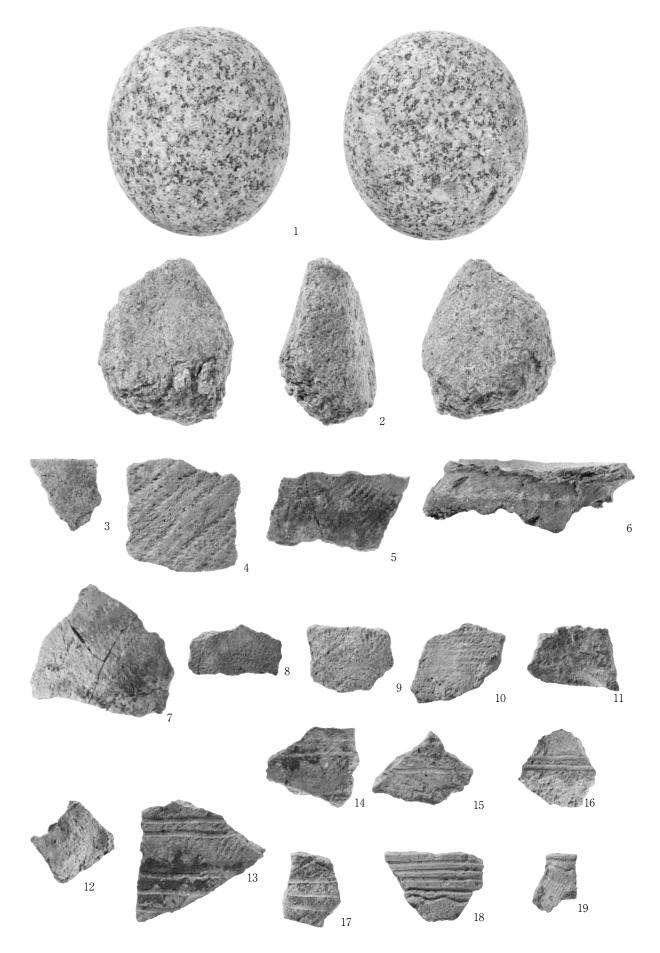


下向遺跡近景(西から)

写真図版1 遺跡全景



写真図版 2 SKT01 ~ 06 陥し穴状遺構、SK07 土坑



写真図版3 出土遺物

# (3) 沼袋Ⅱ遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畑村尾肝要 46-1ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成 26 年 7 月 7 日 ~ 9 月 5 日

遺跡コード・略号 KG 11-2263・NB II-14

調査対象面積 3,695 m<sup>2</sup>

調査終了面積 3,695 m<sup>2</sup>

調査担当者 藤本玲子・小林弘卓・宇部めぐみ

# 1 調査に至る経過

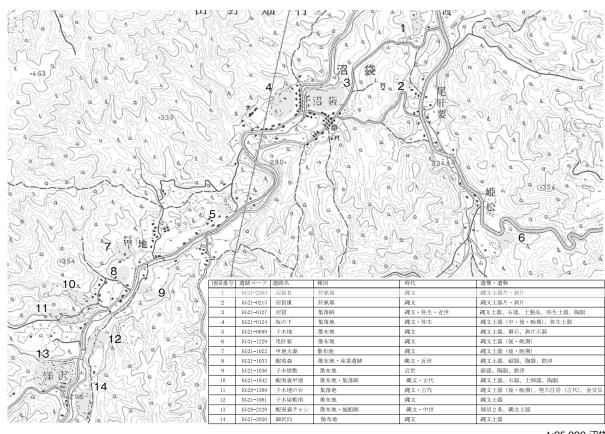
沼袋Ⅱ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(尾肝要~普代)の事業区域内に存在することから発 掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東 日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化 されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月2日付け国東整陸二調第703号に より、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年 12月4日~12月6日にわたり試掘調査を行い、平成25年1月30日付け教生第1543号により、工事に先 立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手 県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



1:25.000 沼袋

第1図 遺跡位置図

# 2 遺跡の位置と立地

沼袋Ⅱ遺跡の所在する田野畑村は岩手県沿岸北部に位置し、北は普代村、南西に岩泉町、東は太平 洋に接する。東西約17km、南北約14km、人口約3.534人(2014年11月1日現在)、面積156.19k㎡である。 西部、中央部は北上山系のなだらかな起伏が広がり、東部は名勝北山崎、鵜の巣断崖にみられるよう に200m前後の隆起海岸が太平洋に延びる谷を深く刻んでいる。平地は約16%でほとんどが山林である。 遺跡は高位段丘面に位置し、海岸との距離は約10km、標高は約230~240mである。遺跡は国土交通省 田野畑防災除雪センターから北西約300mの距離に所在し、微視的には調査区北側に位置する2級河川 普代川の蛇行・洪水などを成因とする河岸段丘上に立地する。西側に支流であるツジベシ沢、大平沢、 田代沢が、東側に尾肝要川、マギノ沢が流れる。比高5~10mの低位面を中心とした範囲で、調査区 中央には現在も上流から沢が流れ、豊富な湧水もみられる。立地から調査区東側は沼地が広がっていた。 1889(明治22)年4月1日に村政が施行され、旧田野畑村、浜岩泉村、沼袋村が合併し、北閉伊郡田 野畑村が成立した。その後、1896(明治29)年3月29日に北閉伊郡、中閉伊郡、東閉伊郡が合併し、下 閉伊郡となり、田野畑村は下閉伊郡となった。三陸沿岸は869(貞観11)年7月9日に三陸沖で発生し た貞観地震によって大きな被害を出し、1611(慶長16)年12月2日には同じく三陸沖で慶長三陸地震が 発生し大きな被害を出した。1896(明治29)年6月15日には三陸沖で明治三陸地震が発生し、これに伴っ て起きた明治三陸大津波に襲われ、三陸沿岸一帯は甚大な被害をうけた。海抜約25m、海岸から約 360mには2トンの堆積岩が2個存在しており、明治三陸大津波によって運ばれてきたと言い伝えら れ「津波石」と呼ばれている。国土地理院によって海抜約25mまで海水が駆け上がってきたことが確認 されている。2011(平成23)年3月11日にはマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)

遺跡の所在する沼袋地区には、集落遺跡と確認された沼袋遺跡(図1-3)、坂の下遺跡(図1-4)が現在の沼袋集落とほぼ同位置に存在する。両遺跡とも沼袋Ⅱ遺跡南西標高約230~240mに位置し、本遺跡と同じ標高に立地する。

# 〈参考文献〉

田野畑村史編さん委員会 1985 『田野畑村史1』 田野畑村教育委員会 2001 『田野畑村内遺跡詳細分布調査報告書 I 』 田野畑村文化財調査報告書第6集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 『沼袋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第483集

#### 3 基本層序

調査区内における基本層序は第4図の通りである。

が発生し、津波による大きな被害を出した。

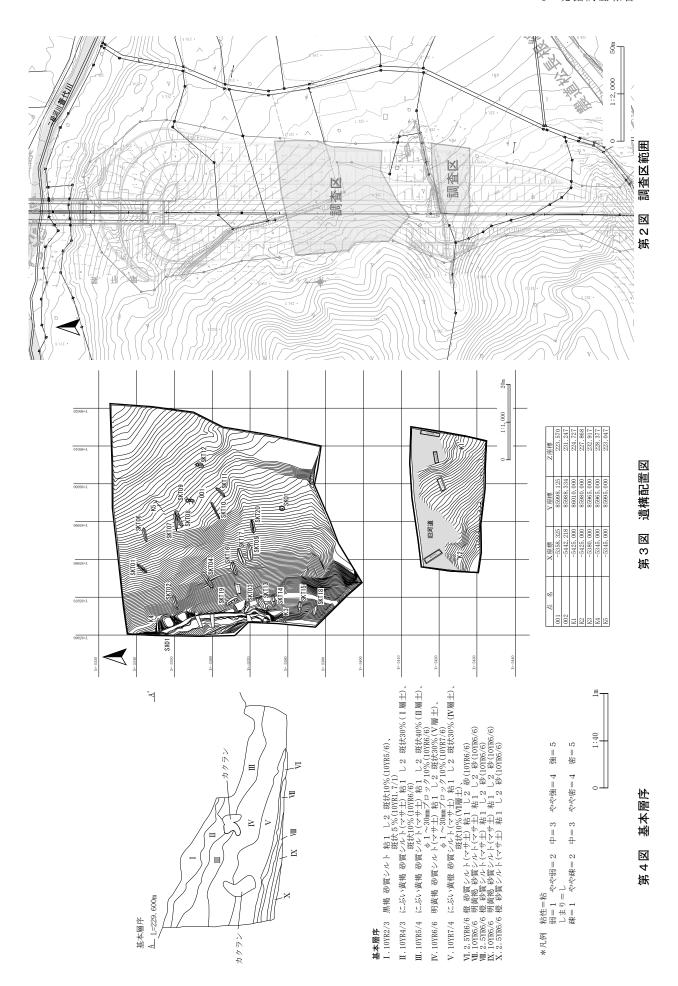
#### 4 調査の概要

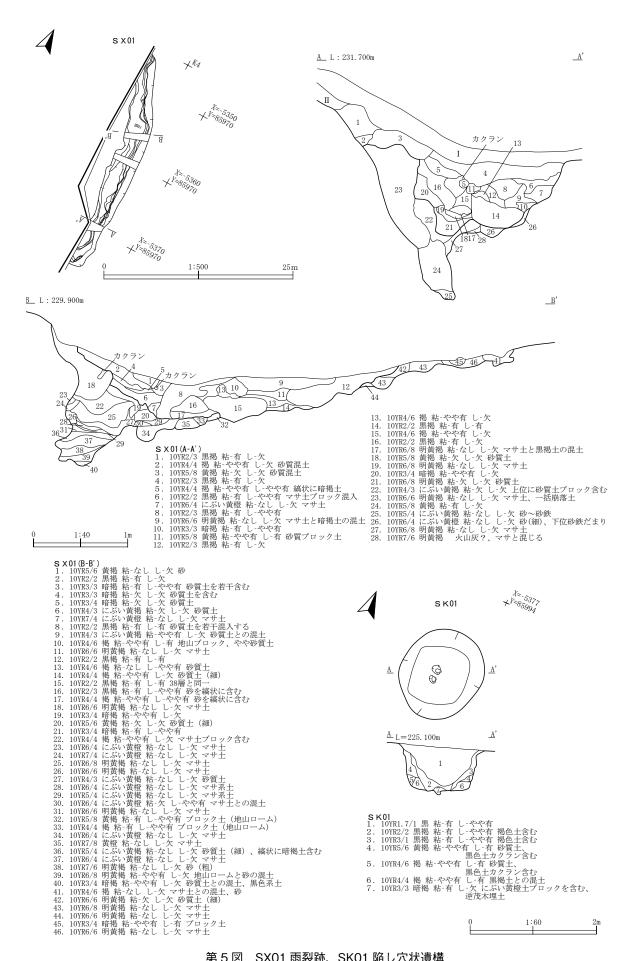
# (1)遺構

沼袋Ⅱ遺跡は尾肝要峠北麗に位置し、今回の調査で東向き緩斜面中腹部と裾部付近に縄文時代の陥し穴状遺構21基、旧河道1条、雨裂跡1条を確認した。陥し穴状遺構は、溝状18基、楕円形2基、円形1基で、なかには逆茂木痕を有するものがある。調査区西側中央部付近から谷川が形成されており、検出された旧河道から調査区東側に広がる沼地に集まる動物を狙ったものと想定される。遺構については第1表に記載した。

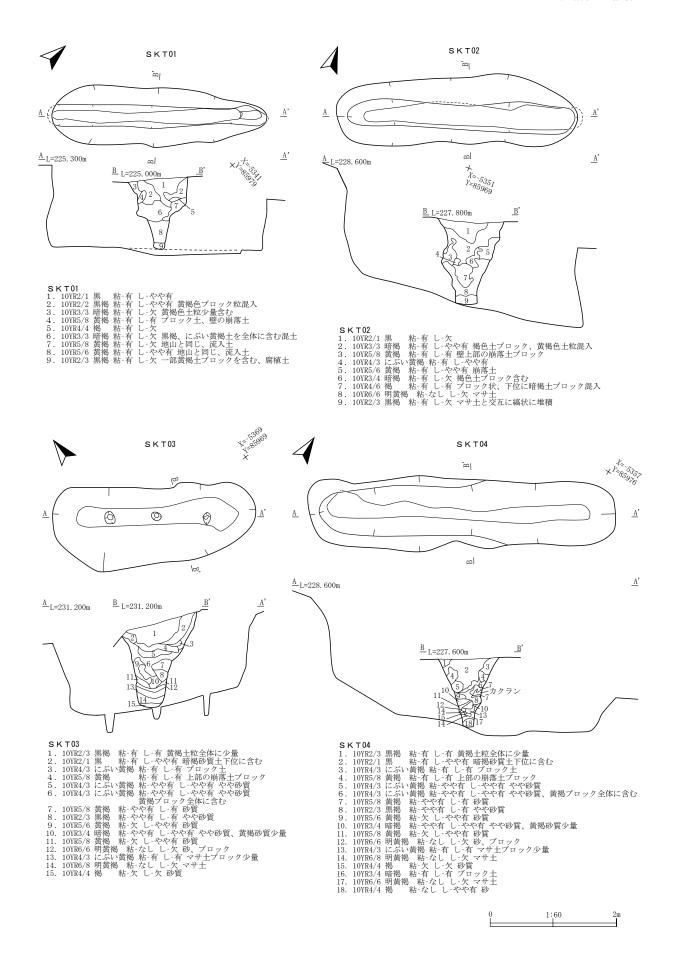
#### (2)遺物

調査区遺構外北東端から縄文土器片が2点(1・2)出土した(写真図版8)。他に不掲載とした剥片2点が出土している。

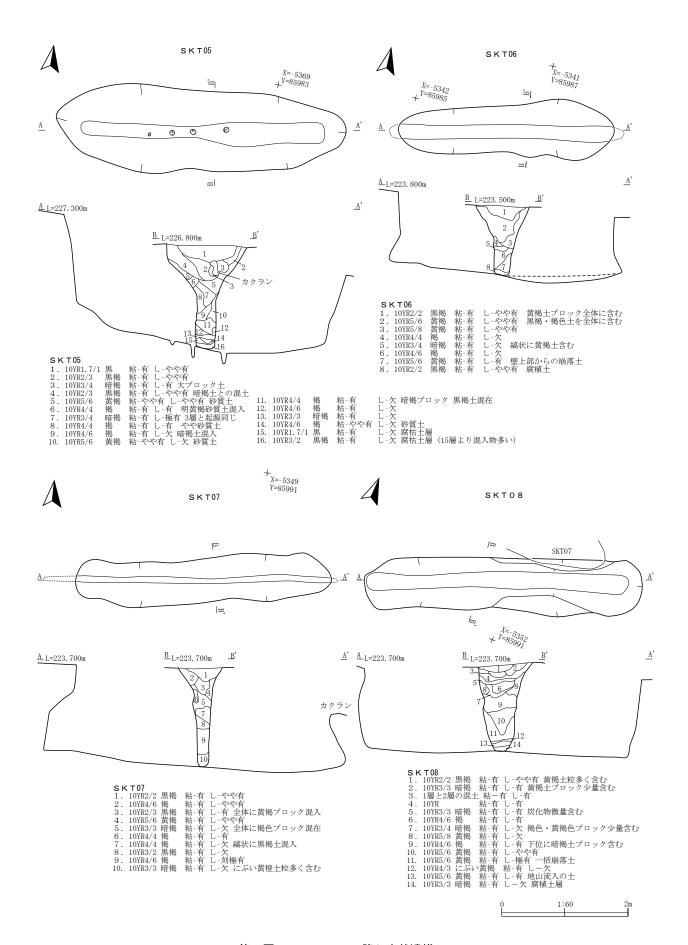




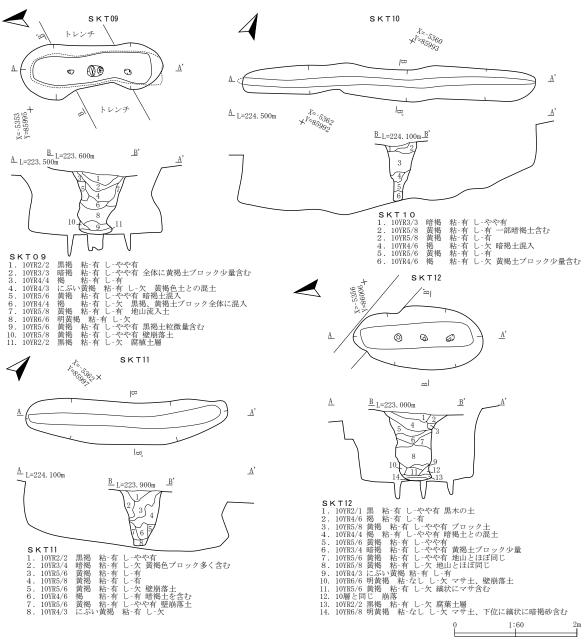
第5図 SX01 雨裂跡、SK01 陥し穴状遺構



第6図 SKT01~04陥し穴状遺構



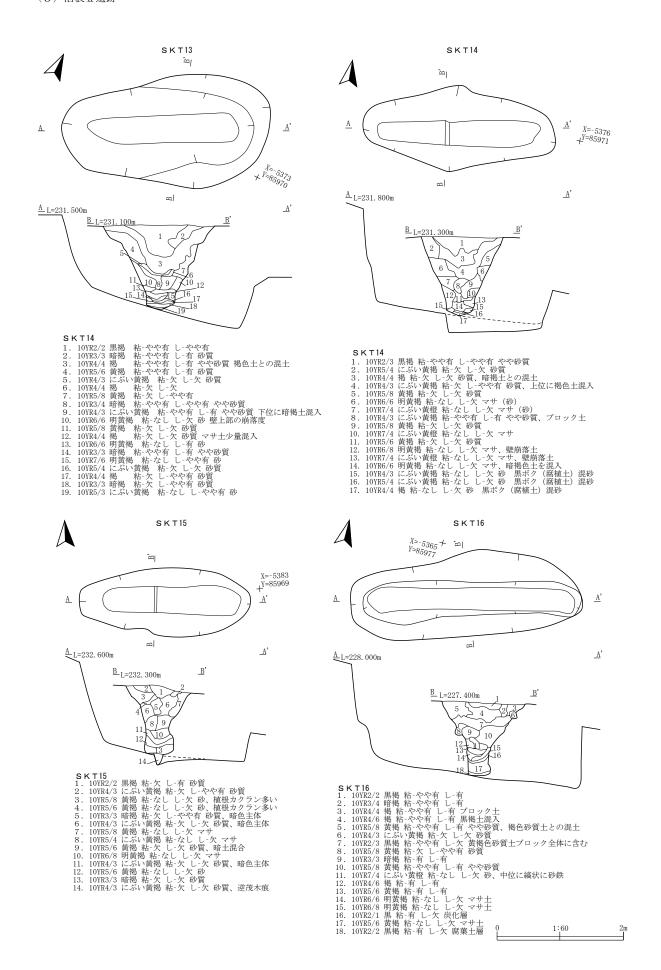
第7図 SKT05~08 陥し穴状遺構



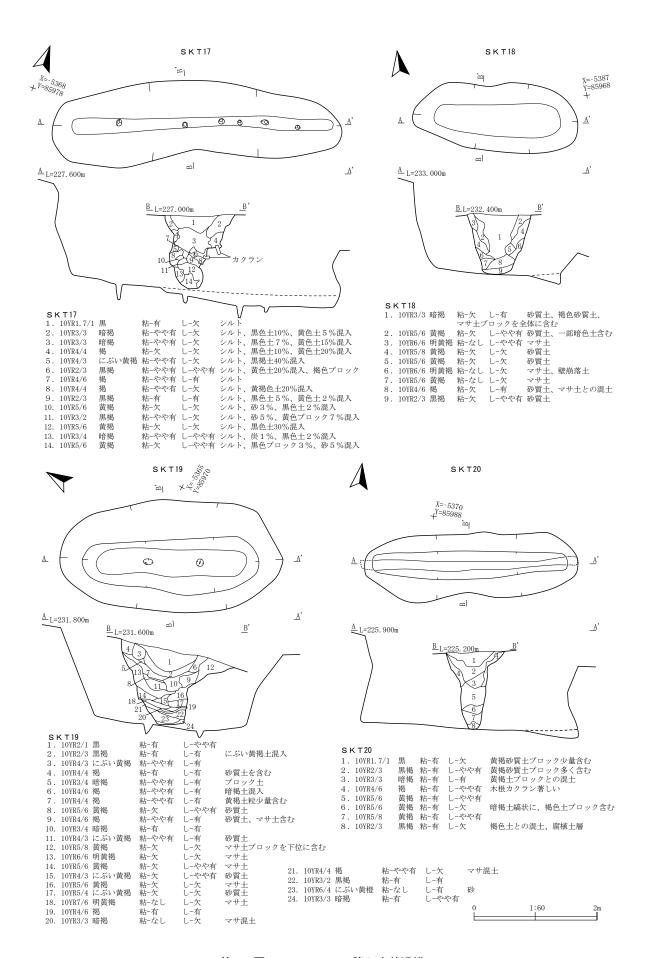
# 第8図 SKTO9~12陥し穴状遺構

# 第1表 遺構観察表

<b>韦</b> I 衣	退佣制									
遺構名	図版	写真 図版	検出 層位	重複関係	長軸方向	平面形	開口部 (cm)	深さ (cm)	付属施設	備考
SK01	第5図	2	IV	-	N-69° -E	円	140 × 120	70		
SKT01	第6図	2	III	-	N=44° =E	溝状	340 × 95	135		
SKT02	第6図	2	III	-	N-72° -E	溝状	380 × 105	250		
SKT03	第6図	3	III	-	N-58° -W	楕円	320 × 135	160	逆茂木 3	
SKT04	第6図	3	III	-	N-54° -E	溝状	485 × 120	220		
SKT05	第7図	3	IV	-	N-84° -E	溝状	450 × 140	220	逆茂木 4	
SKT06	第7図	3	IV	-	N-77° -E	溝状	340 × 95	135		
SKT07	第7図	4	IV	SKT07 > SKT08	N-87° -E	溝状	405 × 75	180		AMS 測定:縄文晩期後業~未築
SKT08	第7図	4	IV	SKT08 < SKT07	N=62° -E	溝状	440 × 9 0	145		
SKT09	第8図	4	IV	-	N-2° -E	楕円	230 × 9 0	110	逆茂木 3	
SKT10	第8図	4	IV	-	N=61° =E	溝状	480 × 55	150		
SKT11	第8図	5	IV	-	N-44° -E	溝状	330 × 70	125		
SKT12	第8図	5	IV	-	N-10° -E	楕円	320 × 155	185	逆茂木3	
SKT13	第9図	5	IV	-	N-62° -E	楕円	330 × 180	180		
SKT14	第9図	5	IV	-	N-84° -E	楕円	300 × 135	180		
SKT15	第9図	6	IV	-	N-88° -W	楕円	270 × 110	160	逆茂木 1	
SKT16	第9図	6	IV	-	N-76° -E	楕円	365 × 135	200		縄文時代中期前薬
SKT17	第 10 図	6	IV	-	N=69° -E	溝状	472 × 135	(185)	逆茂木 6	
SKT18	第10図	6	IV	-	N-77° -W	楕円	265 × 115	155		
SKT19	第10図	7	IV	-	N-28° -W	楕円	362 × 182	170	逆茂木 2	
SKT20	第 10 図	7	IV	-	N-84° -E	溝状	348 × 108	160		



第9図 SKT13~16 陥し穴状遺構



第 10 図 SKT17 ~ 20 陥し穴状遺構

# [分析鑑定報告1]

沼袋Ⅱ遺跡出土テフラの検出同定及び火山ガラスの屈折率測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

岩手県田野畑村に所在する沼袋Ⅱ遺跡は、尾肝要峠北麓の普代川に面する緩斜面上に立地する。同 遺跡からは、縄文時代の遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、検出された遺構のうち 旧河道より採取された火山灰質試料を対象として、テフラの検出同定および火山ガラスの屈折率測定 を行い、既知の火山灰との対比することにより、それらの年代指標に関わる資料を作成する。

#### 1. 試料

試料は、沼袋Ⅱ遺跡の旧河道より採取された火山灰質試料(試料名:旧河道 火山灰)である。層相 は、褐~黒褐色の砂まじりシルトである。

#### 2. 分析方法

### (1)テフラ検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄 みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察 する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量 の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、 バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラス であり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

#### (2)火山ガラスの屈折率測定

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスを対象として、古澤(1995)の MAIOTを使用した温度変化法を用いる。

# 3. 結果

# (1)テフラ検出同定

結果を表1に記す。試料中 には白色を呈し、発泡がや

表1. テフラ分析結果

	軽石				山ガラス		
試料名			最大 粒径	量	色調·形態	備考	
旧河道 火山灰	++	W·sg>W·g(opx)	0.8	+	cl·pm		

や良好で、斜方輝石斑晶を R.M. (+)きわめて微量. +:微量. ++少量. W.白色. g.良好. sg:やや良好. 最大粒径はmm. cl:無色透明. bw:パブル型. pm:軽石型. (opx)斜方輝石斑晶包有

含む軽石が少量、無色透明の軽石型火山ガラスが微量混在する。

### (2)火山ガラスの屈折率測定

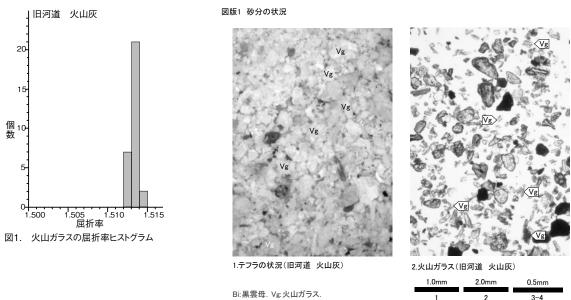
火山ガラスの屈折率測定結果を図1に記す。屈折率はn1.512-1.514という狭いレンジであり、 n1.513での集中度が高い。

#### 4. 考察

今回分析調査対象とした試料からは、軽石および火山ガラスが検出された。沼袋Ⅱ遺跡の地理的位 置を考慮すれば、十和田カルデラからの噴出物である可能性が高い。

今回分析対象とした試料のように、比較的高い屈折率を示す火山ガラスは、町田・新井(2003)に 示された十和田カルデラ起源完新世テフラのうち、十和田中掫テフラ(To-Cu:町田・新井2003; Havakawa 1985) と十和田南部テフラ(To-Nb:町田・新井2003; Havakawa 1985) が該当する。

これらの噴出年代について To- Cuは暦年較正年代で約6.200年前(工藤・佐々木 2007)、To- Nb は約9,400年前(工藤・佐々木 2007)という年代値が得られている。このことから、分析対象試料が採 された旧河道堆積層は、前述した年代のいずれか以降に形成された可能性がある。



# 引用文献

古澤 明1995 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌 ,101,123-133. Hayakawa,Y. 1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60 ,507-592.

工藤 崇・佐々木 寿2007 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年 .地学雑誌 .116.653-663.

町田 洋・新井房夫2003 新編 火山灰アトラス 東京大学出版会 ,336p.

町田 洋・新井房夫・森脇広1981 日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.

町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学 - 考古学研究と関連するテフラのカタログー、渡辺直経編

# [分析鑑定報告2]

# 沼袋Ⅱ遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

沼袋Ⅱ遺跡は、岩手県下閉伊郡田野畑村沼袋地内他に所在する。測定対象試料は、陥し穴状遺構と考えられる土坑から出土した炭化物2点である(表 1)。

# 2 測定の意義

この遺跡は陥し穴状遺構を主体とする狩猟場と考えられ、時期を特定する根拠となる出土遺物が少ない。このため、年代測定により試料が出土した遺構の年代を明らかにする。

### 3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超 純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1 \text{mol}/\ell$  (1M)の塩酸(HCI)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001 Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には1 AAA、1 M未満の場合は1 AAA と表1 C記載する。

- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

# 4 測定方法

加速器をベースとした $^{14}$ C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し $^{14}$ Cの計数、 $^{13}$ C濃度( $^{13}$ C/ $^{12}$ C)、 $^{14}$ C濃度( $^{14}$ C/ $^{12}$ C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta$  <sup>13</sup>Cは、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}$ C年代(Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 $^{14}$ C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}$ C年代は $\delta$   $^{13}$ Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}$ C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}$ C年代の誤差( $\pm$ 1 $\sigma$ )は、試料の $^{14}$ C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3)pMC(percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}$ C濃度の割合である。pMCが小さい( $^{14}$ Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが $^{100}$ 以上( $^{14}$ Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modernとする。この値も $\delta$   $^{13}$ Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}$ C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}$ C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}$ C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 $(1\sigma=68.2\%)$ あるいは2標準偏差 $(2\sigma=95.4\%)$ で表示される。グラフの縦軸が $^{14}$ C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta$   $^{13}$ C補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}$ C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCall3データベース (Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、1C年代に基づいて較正 (calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

表 1 放射性炭素年代測定結果( δ <sup>13</sup> C 補正値)

測定番号	計201万	校的相記	試料	処理	δ <sup>13</sup> C (‰)	δ¹³C 補正あり		
例 任 田 万	試料名	採取場所	形態	方法	(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)	
IAAA-141601	No.1	SKT07 埋土下層	炭化物	AAA	$-26.09 \pm 0.52$	2,450 ± 30	$73.67 \pm 0.25$	
IAAA-141602	No.2	SKT16 最下層	炭化物	AAA	-13.39 ± 0.64	4,500 ± 30	57.14 ± 0.20	

[#6890]

### 6 測定結果

測定結果を表 1、2に示す。試料の $^{14}$ C年代は、No. 1 が $^{2450}$  ± 30yrBP、No 2 が $^{4500}$  ± 30yrBPである。暦年較正年代 $(1\sigma)$ は、No. 1 が $^{2697}$  ~  $^{2434}$ cal BP、No. 2 が $^{5281}$  ~  $^{5054}$ cal BPのの間に各々4つの範囲で示され、No. 1 が縄文時代晩期後葉から末葉頃、No. 2 が縄文時代中期前葉頃に相当する(小林編2008)。試料の炭素含有率はいずれも60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

	表 2	放射性炭素年代測定結果	(δ 13C 未補正値、	曆年較正用	1℃年代、	較正年代)	
--	-----	-------------	--------------	-------	-------	-------	--

測定番号	δ <sup>13</sup> C 補	前正なし	暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
侧足钳 与	Age (yrBP)	pMC (%)	眉牛蚁正用(yrBP)	16 倍平10吨四	26 百千八吨四	
IAAA-141601	2,470 ± 30	73.51 ± 0.24	2,454 ± 27	2697calBP - 2634calBP (28.2%) 2616calBP - 2590calBP (10.5%) 2537calBP - 2529calBP (2.1%) 2508calBP - 2434calBP (27.5%)	2703calBP - 2630calBP (29.0%) 2619calBP - 2558calBP (16.9%) 2544calBP - 2363calBP (49.5%)	
IAAA-141602	4,310 ± 30	58.51 ± 0.19	4,495 ± 27	5281calBP - 5214calBP (30.0%) 5190calBP - 5163calBP (13.0%) 5136calBP - 5105calBP (14.4%) 5078calBP - 5054calBP (10.9%)	5291calBP - 5046calBP (95.4%)	

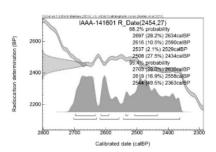
[参考値]

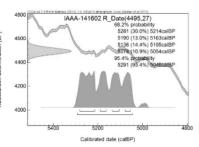
# 引用文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCall3 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\mathrm{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363





[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

#### まとめ

今回の調査では、東向き緩斜面中腹部と裾部付近に縄文時代の陥し穴状遺構21基、旧河道1条、雨裂跡1条を確認した。陥し穴状遺構の内訳は、溝状18基、楕円形2基、円形1基で、逆茂木痕を有するものもある。調査区西側中央部付近から東西方向に谷川が形成されており、検出された旧河道から調査区東側に広がる沼地に集まる動物を狙った狩猟場であったことが明らかとなった。溝状陥し穴状遺構は、埋土にクロボク土が堆積する場合が多く、縄文時代中期以降に東北北部で主流になると指摘されている(坂本・杉野森1997)。そのため、今回の調査で確認された溝状の陥し穴状遺構も縄文時代中期以降のものである可能性が高い。沼袋Ⅱ遺跡の陥し穴状遺構を形成した主体者がいずれに住んでいたかは今回の調査では決定的な根拠は見つからなかったが、遺跡から南西へ3kmに位置する集落遺跡の沼袋遺跡(第1図-3)、坂の下遺跡(第1図-4)と同時期に包括されるものであることは確かである。

なお、沼袋Ⅱ遺跡平成26年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

# 参考文献

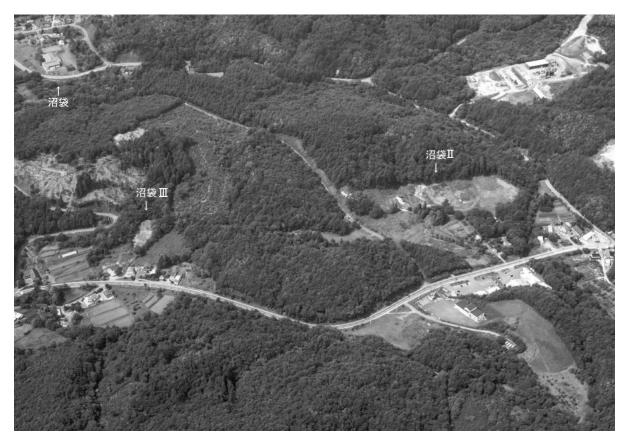
佐藤宏之 2007「縄文時代の狩猟・漁撈技術」『縄文時代の考古学5 なりわい―食料生産の技術―』同成社

桜井秀雄 2000「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』第52巻 第10号

坂本真弓・杉野森淳子 1997 「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター

田村壮一 1987「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

平野祐 2007「東北地方南部における縄文時代陥し穴の形態と地域色」『紀要』 X X VI (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

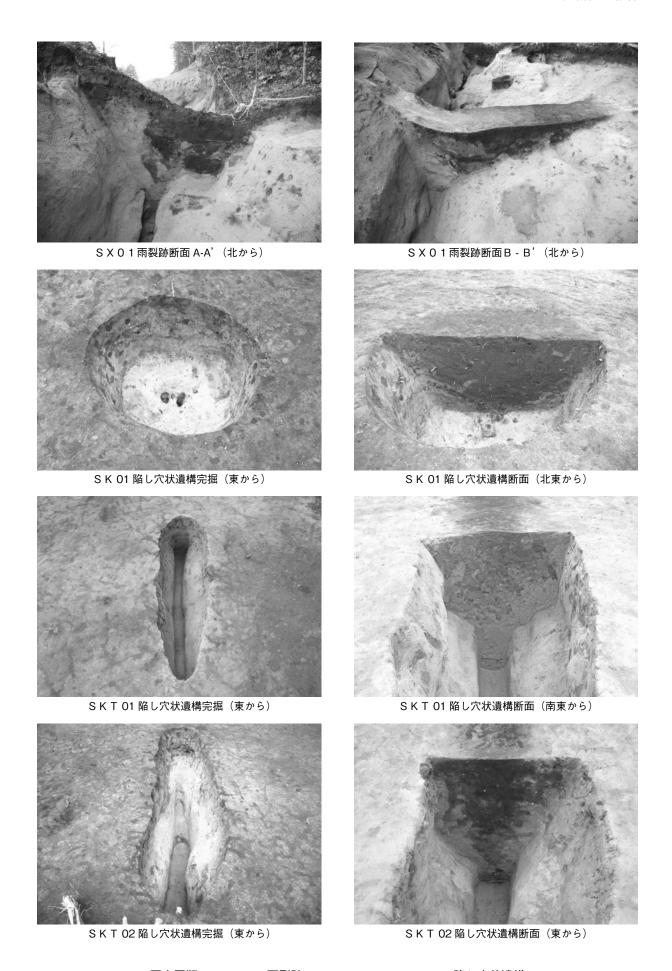


沼袋Ⅱ、沼袋Ⅲ遺跡遠景(南東から)

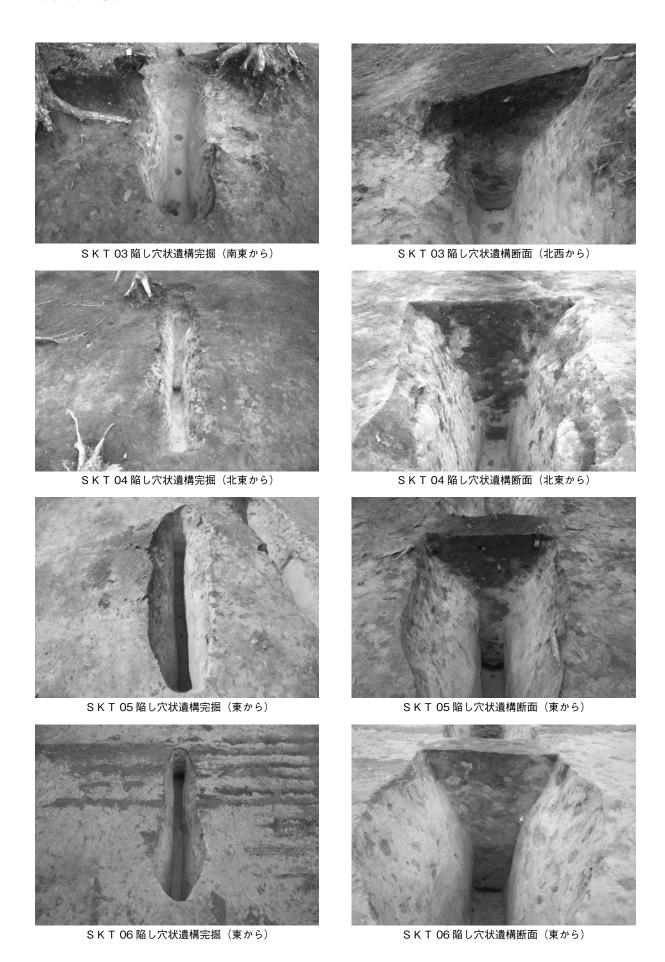


調査区近景(東から)

写真図版 1 調査区全景



写真図版2 SX 01 雨裂跡、SK 01、SKT 01・02 陥し穴状遺構



写真図版 3 SKT03 ~ 06 陥し穴状遺構







SKT 09 陥し穴状遺構完掘(南から)



SKT 10 陥し穴状遺構完掘(東から)



SKT 07 陥し穴状遺構断面(西から)



旧河道トレンチ断面(北西から)

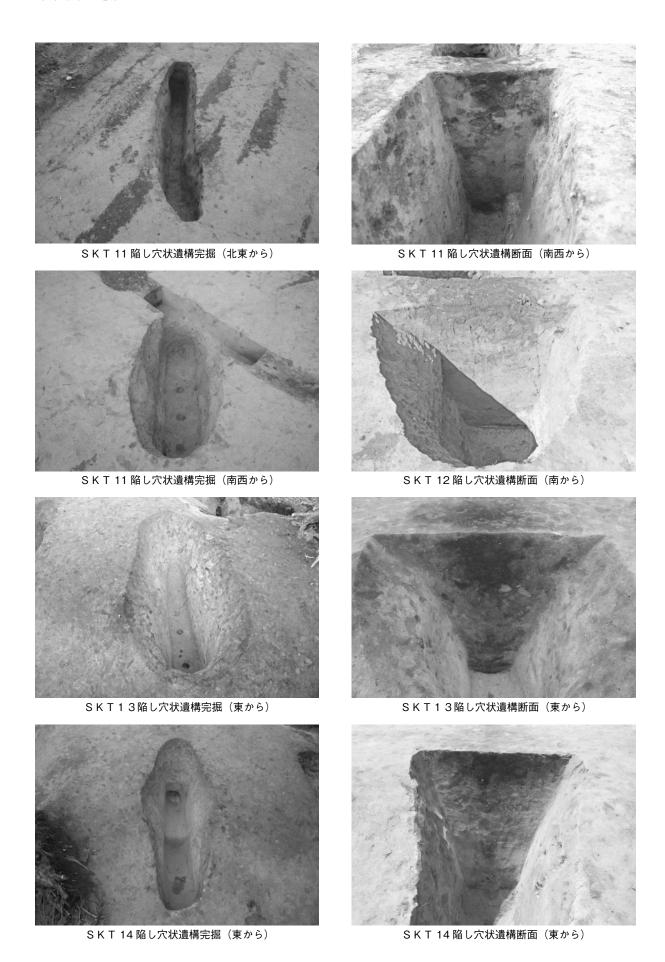


SKT 09 陥し穴状遺構断面(南から)

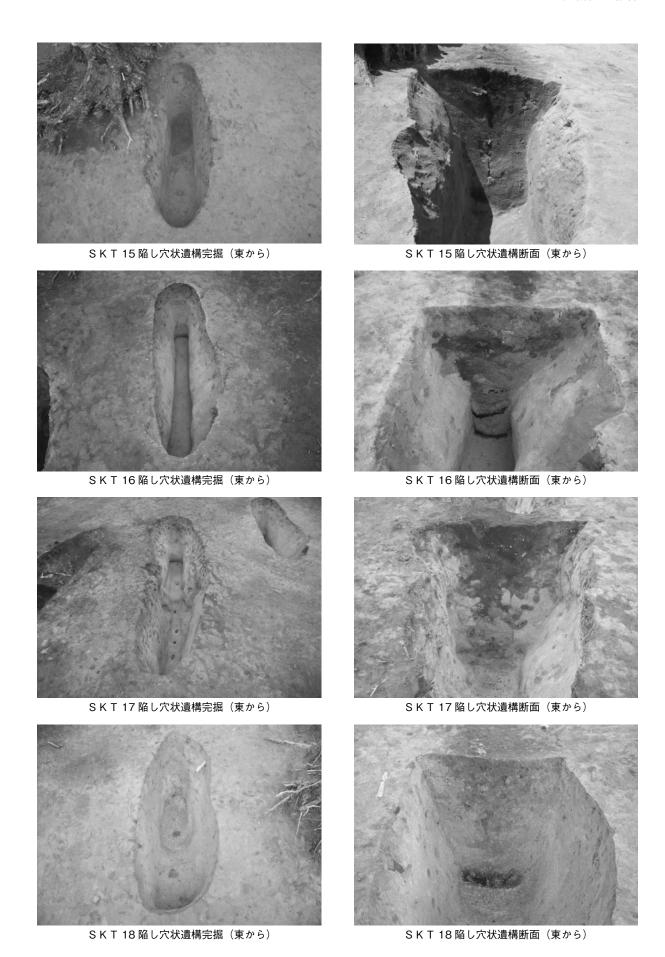


SKT 10 陥し穴状遺構断面(西から)

写真図版4 SKT 07~10 陥し穴状遺構



写真図版5 SKT11~14 陥し穴状遺構



写真図版6 SKT15~18 陥し穴状遺構



SKT 19 陥し穴状遺構完掘(南東から)



SKT 19 陥し穴状遺構断面(南東から)

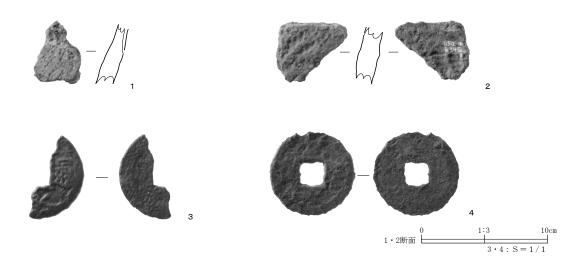


SKT 20 陥し穴状遺構完掘(東から)



SKT 20 陥し穴状遺構断面(東から)

写真図版7 SKT19・20 陥し穴状遺構



写真図版 8 出土遺物

第4表 遺物観察表

遺物番号	出土地点	層位	器種	残存部位	口径	底径	器高	文様(外面)	内面	時期	備考
1	SKO1	埋土上位	深鉢	胴部	-	-	-	LR・RLR 縦	-	縄文時代後期?	
2	斜面中央	IV層	深鉢	胴部	-	-	-	LR 縦	LR 縦	縄文時代後期?	
3	調査区東側	撹乱	古銭	-	-	-	-	寛永通宝		江戸時代以降	銅製
4	不明	撹乱	古銭	-	-	-	-	寛永通宝		江戸時代以降	鉄製

# (4) 沼袋Ⅲ遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畑村尾肝要 73 ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成 26 年 7 月 7 日 ~ 9 月 5 日

遺跡コード・略号 KG 21-0213・NBⅢ-14

調査対象面積 950m²

調査終了面積 950㎡

調査担当者 藤本玲子・小林弘卓・宇部めぐみ

# 1 調査に至る経過

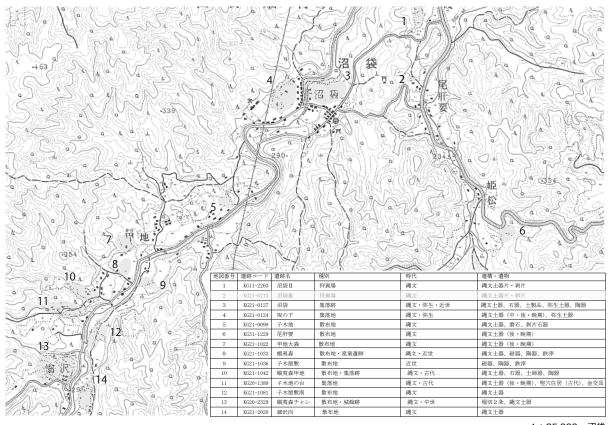
沼袋Ⅲ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業(尾肝要~普代)の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成24年11月2日付け国東整陸二調第703号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成24年12月4日~12月6日にわたり試掘調査を行い、平成25年1月30日付け教生第1543号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

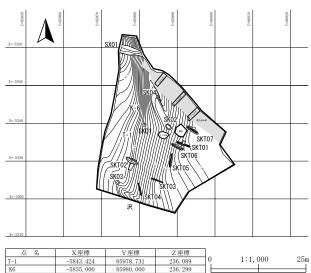
その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手 県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。」

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)

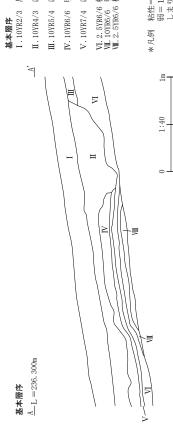


1:25,000 沼袋

第1図 遺跡位置図



第3図 遺構配置図



. 2. 5YR6/6 権 .. 10YR6/6 明 .. 2. 5YR6/6 権 III. 10YR5/4 IV. 10YR6/6 V. 10YR7/4

橋 砂質シルト(レサナ 明黄褐 砂質シルト(マ 髄 砂質シルト(マサ土

粘性=粘 弱=1 やや弱=2 「 しまり=し 棘=1 やや辣=2 「

黒褐 砂質シルト 粘1 し2 斑状10%(10VR5/6)、 斑状5%(10VR1.7/1)

基本層序 × 4

# 2 遺跡の立地と環境

沼袋Ⅲ遺跡の所在する田野畑村は岩手県沿岸北部三陸海岸に位置する。以下、沼袋Ⅱ遺跡参照(p.p.48)。

# 3 基本層序

調査区内における基本層序は第4図の通りである。

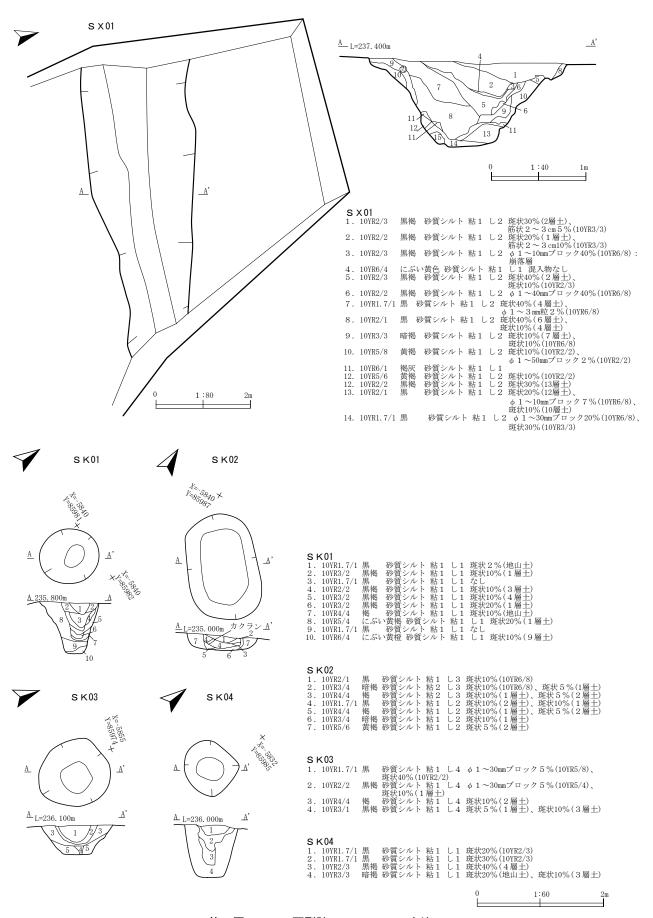
# 4 調査の概要

# (1)遺構

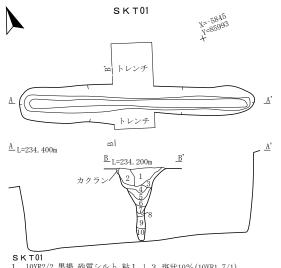
縄文時代の陥し穴状遺構7基、雨裂跡1条、時期不明土坑4基を確認した。詳細は第1表遺構観察 表に記載した。

# (2)遺物

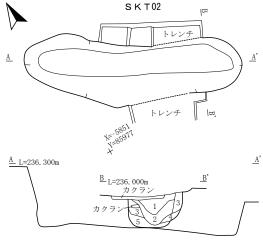
調査区北東端から縄文土器片が1点(第8図1)が出土した。

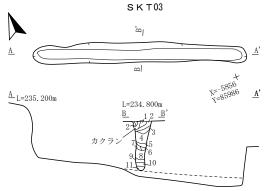


第5図 SD01 雨裂跡、SK01 ~ 04 土坑

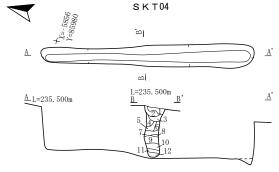


- 1. 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘1 し3 斑状10%(10YR1.7/1)、





#### **SKT03**



#### **SKT04**

- SKT04

  1. 10YR3/2 黒褐 砂質シルト 粘2し3 φ1~2mm砂状斑5%(10YR6/6)、 班状30%(10YR3/1)

  2. 10YR4/2 灰黄褐 砂質シルト 粘4し4 φ1~10mmプロック3%(10YR3/1)、 班状30%(1層上)

  3. 10YR4/4 褐 砂質シルト 粘1し4 班状40%(2層上)

  4. 10YR5/4 にぶい黄褐 砂 粘1し4 班状10%(3層上)

  5. 10YR4/6 褐 砂 粘1し4 班状10%(6層上)、 班状10%(6層上)

  6. 10YR3/3 暗褐 砂 粘1し4 班状10%(6層上)

  7. 10YR4/6 褐 砂 粘1し4 班状40%(8層上)

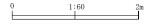
  8. 10YR4/2 灰黄褐 砂質シルト 粘2し1 班状10%(9層上)

  9. 10YR5/3 にぶい黄褐 砂 粘1し4 班状40%(8層上)

  10. 10YR6/4 にぶい黄褐 砂 粘1し4 班状10%(6層上)

  11. 10YR5/2 灰黄褐 砂 粘1し4 斑状20%(6層上)

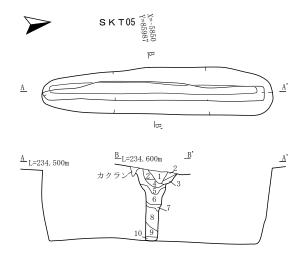
  12. 10YR3/3 暗褐 砂 粘1し4 斑状30%(6層上)



# 第6図 SKT01~04陥し穴状遺構

### 

另一次										
遺構名	図版	写真図版	検出層位	重複関係	長軸方向	平面形	開口部 (cm)	深さ (cm)	付属施設	備考
SX01	第5図	4	IV		N-78° -₩	-	224×(-)	172	-	
SK01	第5図	2	IV	-	N-55° -W	Н	95×85	85	-	
SK02	第5図	2	IV	-	N-43° -W	楕円	165×115	25	-	
SK03	第5図	2	IV	-	N-72° -W	不整形	115×110	45	-	
SK04	第5図	2	IV	-	N-51° -W	不整形	90×85	85	-	
SKT01	第6図	3	IV	-	N-71° -W	溝状	370×65	160	-	
SKT02	第6図	3	IV	-	N-62° -W	溝状	345×100	110	-	
SKT03	第6図	3	IV	-	N-58° -W	溝状	340×35	115	-	
SKT04	第6図	3	IV	-	N-14° -W	溝状	335×40	84	-	
SKT05	第7図	4	IV	-	N-7° −E	溝状	365×75	120	-	
SKT06	第7図	4	IV	-	N-63° -W	溝状	340×85	170	-	
SKT07	第7図	4	IV	-	N-56° -W	溝状	335×95	170	逆茂木4	

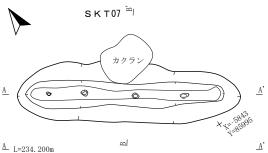


# **SKT06** lœ, <u>A</u> + X= 5847 V=85990 \_A' A L=234, 600m L=234. 300m

#### **SKT05**

- S K T 05
  1. 10YR1.7/1 黒 砂質シルト 粘1し4 斑状30%(10YR2/2)、斑状10%(10YR5/6)
  2. 10YR2/2 黒褐 砂質シルト 粘1し2 斑状5%(1層土)、斑状10%(10YR5/6)
  3. 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘1し4 斑状10%(10YR5/6)、斑状10%(2層土)
  4. 10YR1.7/1 黒 砂質シルト 粘1し4 ェポ10%(10YR5/6)、斑状10%(2層土)
  5. 10YR4/3 にぶい黄褐 砂質シルト 粘1し4 ・ 1~30mmブロック 30%(10YR5/8)、斑状10%(1層土)
  6. 10YR3/2 黒褐 砂質シルト 粘1し4 斑状40%(10YR5/8)、斑状10%(1層土)
  6. 10YR3/2 黒褐 砂質シルト 粘1し4 斑状40%(10YR5/8)、 ・ 1~10mmブロック 5 %(1層土)
  7. 10YR4/3 にぶい黄褐 砂質シルト 粘1し4 斑状40%(2層土)、斑状10%(10YR5/6)

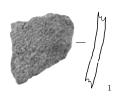
- イ・10184/3 にぶい頃物 お見シルト 布 1 C 4 班状20% 斑状10% (10785/6) 8・10785/3 にぶい黄褐 砂 粘 1 L 4 斑状10% (7層土) 9・10784/2 灰黄褐 砂 粘 1 L 4 斑状10% (8層土) 10・10783/2 黒褐 砂 粘 1 L 4 斑状10% (1層上)





- 斑状20%(9層土)
  11. 10YR3/4 暗褐 砂質シルト 粘1し4 斑状40%(1層土): 崩落土、 斑状5%(10層土)
  12. 10YR3/3 暗褐 砂質シルト 粘1し4 斑状30%(1層土)、斑状10%(2層土)
  13. 10YR7/8 黄橙 砂 粘1 し4 斑状20%(12層土)
  14. 10YR3/3 暗褐 砂質シルト 粘1し4 斑状10%(13層土)
  15. 10YR4/3 にぶい黄褐 砂質シルト 粘1し4 斑状10%(13層土)、斑状10%(14層土)
  16. 10YR5/6 黄褐 砂 粘1し1 斑状10%(15層土)
  17. 10YR7/6 明黄褐 砂質シルト 粘1し1 斑状20%(15層土)
  18. 10YR7/4 にぶい黄樹 砂質シルト 粘1し1 斑状10%(15層土)
  19. 10YR4/2 灰 黄褐 砂質シルト 粘1し1 斑状10%(15層土)

- 10YR4/2 灰黄褐 砂質シルト 粘1し1 斑状20%(15層土)



# SKT07

- 黒褐 砂質シルト 粘1し2 斑状30%(10YR3/4)、斑状10%(10YR3/3)、斑状10%(10YR4/6) 黒褐 砂質シルト 粘1し3 斑状30%(5層土)、皮 1~20mm10%(10YR3/4) 県 砂質シルト 粘1し3 斑状40%(5層土)、斑状10%(10YR5/8) にぶい黄褐 砂質シルト 粘1し3 斑状40%(10YR6/6)、斑状10%(10YR1.7/1) 暗褐 砂質シルト 粘1し4 斑状10%(7層土)、斑状20%(10YR5/8) にぶい黄褐 砂質シルト 粘1し4 斑状10%(8層上)、斑状10%(10YR5/8) にぶい黄褐 砂質シルト 粘1し4 斑状40%(10YR6/6) 明黄褐 砂 粘1し4 斑状10%(10YR4/3) 黄褐 砂 粘1し4 斑状10%(10YR4/3) 黄褐 砂 粘1し4 斑状10%(10YR4/3) 黒褐 砂 粘1し4 斑状20%(16層上)、斑状30%(15層土)にぶい黄褐 砂 粘1し4 斑状30%(15層土)、灰黄褐 砂 粘1し4 斑状30%(18層土)、斑状10%(17層土) にぶい黄褐 砂 粘1し3 斑状10%(19階4/3) 黒褐 和砂 粘1し4 斑状30%(21層土) 10YR2/2
- 10YR3/2 10YR1.7/1 10YR4/3
- 10YR4/3
- 10YR5/4
- 10YR5/4 10YR4/3 10YR6/6 10YR5/6 10YR4/3 10YR4/4

- 10YR5/4
- 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 10YR4/2 10YR5/3 10YR4/2 10YR3/2





第8図 出土遺物

### 第2表 遺物観察表

| NEX ZINDON X |      |           |        |         |      |    |    |    |  |  |  |
|--------------|------|-----------|--------|---------|------|----|----|----|--|--|--|
| ŀ            | 遺物番号 | 出土地点      | 層位     | 器種      | 残存部位 | 口径 | 底径 | 器高 |  |  |  |
|              |      | SX01      | 最下層 深鉢 |         | 胴部   | -  | -  | -  |  |  |  |
|              | 1    | 文様(外面) 内面 |        | 時期      |      | 備考 |    |    |  |  |  |
|              |      | -         | -      | 縄文時代後期? |      |    |    |    |  |  |  |

#### 5 まとめ

#### (1) 沼袋Ⅲ遺跡

今回の調査では、東向き緩斜面中腹部に縄文時代の陥し穴状遺構(以下、陥し穴と略す)7基、雨裂跡1条、時期不明土坑4基を確認した。陥し穴は全て溝状で、なかには逆茂木痕を有するものがある。調査区南北にそれぞれ西から東へ向かって沢が形成され、調査区は沢間に位置する。本遺跡は、こうした水辺に集まる、または逃げ込んだ動物を狙った狩猟場と判明した。

溝状陥し穴は、埋土にクロボクが堆積する場合が多く、縄文時代中期以降に東北北部で主流になることが指摘されている(坂本・杉野森 1997)。今回の調査で確認された溝状陥し穴も縄文時代中期以降の可能性が高い。沼袋Ⅲ遺跡に形成された罠施設の管理・運営者の居住域は、今回の調査では確認できなかったが、遺跡から南西へ3kmに位置する集落遺跡の沼袋遺跡、坂の下遺跡がその候補となろう。

### (2) 沼袋Ⅱ、Ⅲ遺跡についての考察

沼袋Ⅱ、Ⅲ遺跡双方で今回みつかった急・緩斜面上の等高線に直行する陥し穴底面はすべて傾斜し ている。類例は同条件に立地する他遺跡の陥し穴にもみられ(桜井2000他)、地形によって掘りやす さが異なるなど、形状については遺構の立地環境からの検討が必要(大泰2007)である。陥し穴の配 列について、田村(1987他)は「丘陵の裾」、「尾根地形」、「沢状地形」、「川」への意識が考えられ、「等 高線にそって |、「緩斜面を横断 |、「尾根を横断 |、「比較的平坦な地形面への縁に数箇所まとまる | 等の 条件を提示している。沼袋Ⅲ遺跡から北へ約 2.5kmに位置する沼袋Ⅱ遺跡は、これらの条件を備えてい る。SKT 02 · 04 · 17、SKT 05 · 16、SKT 14 · 15 · 18、SKT 06 · 08 · 10、SKT 09 · 12、S KT 01・11 は既に指摘(田村 1987、岩文埋 2007) しているように、2・3基が等高線に沿って、もし くは等高線に直行するように配置されているのが確認できる。沼袋Ⅱ遺跡では上記6セットが確認さ れ、沼袋Ⅲ遺跡ではSKT 01·03、SKT 06·07 の2セットが同じく等高線に沿って配置されている ことが確認できた。また、県内で出土している狩猟文土器(岩文埋1988)には溝状陥し穴がセット関 係を持って描かれている。こうしたことから両遺跡の陥し穴はその配置に明確な意図があると理解さ れる。また、この地域の縄文人が狩猟の対象としていた獲物として有力なのがシカとイノシシである。 シカは河川に逃げる習性をもち(大泰 2007)、平坦部が丘に移行する斜面の下端や台地の縁辺を通るこ とが多い。そのため陥し穴はテラス部分に構築(磯村1990)される傾向がある。沼袋Ⅱ遺跡のテラス 範囲は、人為的削平のため前述の特徴を有するか不明であるが、陥し穴が傾斜の始まる平坦部際に集 中することは確かである。

なお、沼袋Ⅲ遺跡平成26年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

# 参考文献

磯村 亨 1990 「第5章まとめ 陥し穴状遺構について」『石神遺跡発掘調査報告書』p.p.51-52 秋田県文化財報告書第 191 集

大泰司統・佐藤宏之 2007 「縄文時代の狩猟・漁撈技術」『縄文時代の考古学5 なりわい―食料生産の技術―』同成社

桜井秀雄 2000 「原村、南平遺跡にみられる陥し穴の年代」『信濃』第52巻第10号

坂本真弓・杉野森淳子 1997 「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター

田村壮一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』 Ⅷ(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 『馬立Ⅱ遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第 122 集
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006 『沼袋遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 483 集
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007 『野古遺跡』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集

### [分析鑑定報告1]

沼袋Ⅲ遺跡出土テフラの検出同定及び火山ガラスの屈折率測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

岩手県田野畑村に所在する沼袋Ⅲ遺跡は、尾肝要峠北麓の普代川に面する緩斜面上に立地する。同遺跡からは、縄文時代の遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、検出された遺構のうち溝跡より採取された火山灰質試料を対象として、テフラの検出同定および火山ガラスの屈折率測定を行い、既知の火山灰と対比することにより、それらの年代指標に関わる資料を作成する。

#### 1. 試料

試料は、沼袋Ⅲ遺跡のSX01 雨裂跡より採取された火山灰質試料(試料名:SX01 11)である。 層相は、にぶい黄褐色を呈す砂まじりシルトである。

#### 2. 分析方法

# (1) テフラ検出同定

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上 澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観 察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有 量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

#### (2) 火山ガラスの屈折率測定

屈折率の測定は、処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスを対象として、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

# 3. 結果

# (1) テフラ検出同定

結果を表1に記す。試料からは軽石が検出されず、無色透明の軽石型火山ガラス、無色透明のバブル型火山ガラスが極めて微量が含まれ、さらに微量の黒雲母斑晶が混在する。

|         | 軽石 |        |          | 火   | 山ガラス        |        |  |
|---------|----|--------|----------|-----|-------------|--------|--|
| 試料名     | 量  | 色調・発泡度 | 最大<br>粒径 | 量   | 色調・形態       | 備考     |  |
| SX01 11 | -  | -      | -        | (+) | cl∙pm,cl∙bw | 黒雲母斑晶+ |  |

R例 -: 含まれない. (+): きわめて微量. +: 微量. ++: 少量. W: 白色g: 良好. sg: やや良好. 最大粒径は mm. cl: 無色透明. bw: パブル型. pm: 軽石型. (opx): 斜方輝石斑晶包有.

# (2) 火山ガラスの屈折率測定

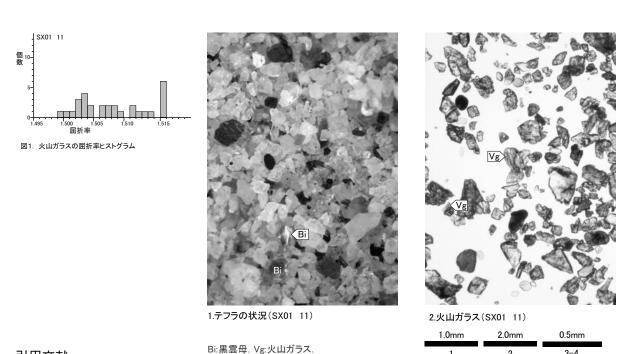
火山ガラスの屈折率測定結果を図 1 に記す。屈折率は n1.499-1.515 という広いレンジを示し、モードは不明瞭であるが n1.503、1.515 付近にある。

#### 4. 考察

今回分析調査対象とした試料からは火山ガラスが検出された。沼袋Ⅲ遺跡の地理的位置を考慮すれば、 これらはいずれも十和田カルデラからの噴出物である可能性が高い。分析対象試料では、火山ガラスの 屈折率のレンジが広く、モードは n1.503、n1.515 付近にあった。分析対象試料のように比較的低い屈折 率を示す火山ガラスを含む十和田カルデラ起源のテフラは、十和田 a テフラ(To-a: 町田ほか 1981; 町田・新井 2003) と十和田八戸テフラ (To-H: 町田・新井 2003; Havakawa 1985) がある。そのうち To-aは屈折率のレンジが 1.500 - 1.508 を示し、西暦 915 年に噴出したとさ れる。また To-Hは、 屈折率のレンジが 1.505 - 1.509 のレンジを示し、約 15,000 年前に噴出したとされる(町田・新井 2003)。 一方、分析対象試料の最高値である屈折率 n1.515 の火山ガラスを含むテフラとしては、白頭山苫

小牧テフラ(B-Tm: 町田ほか 1981; 町田・新井 2003)、To-Cu、To-Nb が知られる。B-Tm の分布 範囲は、町田・新井(2003)によれば、岩手県北部以北が南限にあたるとされており、本遺跡周辺に も降灰があった可能性がある。なお、その噴出年代については、10世紀頃とされている。

今回の分析調査の結果、上述したテフラが SX01 雨裂跡内で混在し、埋積したことが示唆される。 したがって本試料が採取された11層は、To-aやB-Tmが降灰したとされる10世紀ごろ以降に形成 されたと考えられる。なお、混在する黒雲母斑晶は、十和田カルデラや白頭山の噴出物に由来するも のではなく、田野畑村付近に分布する白亜紀前期の田野畑花崗岩体に由来するものと考えられる。



#### 引用文献

古澤 明 1995 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌 101 123 - 133.

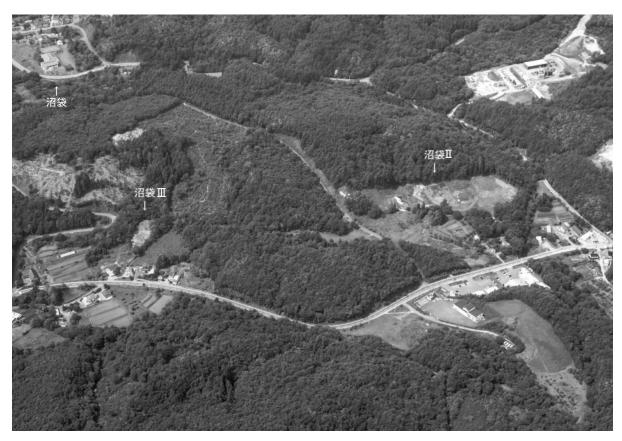
Hayakawa Y. 1985 Pyroclastic Geology of Towada Volcano, Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo vol.60 507 - 592.

工藤 崇・佐々木 寿 2007 十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年. 地学雑誌 116 653 - 663.

町田 洋・新井房夫 2003 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会 336p.

町田 洋・新井房夫・森脇広 1981 日本海を渡ってきたテフラ. 科学 51 562 - 569.

町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984 テフラと日本考古学 - 考古学研究と関連するテフラのカタログ - . 渡辺直経編 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学 865 - 928.

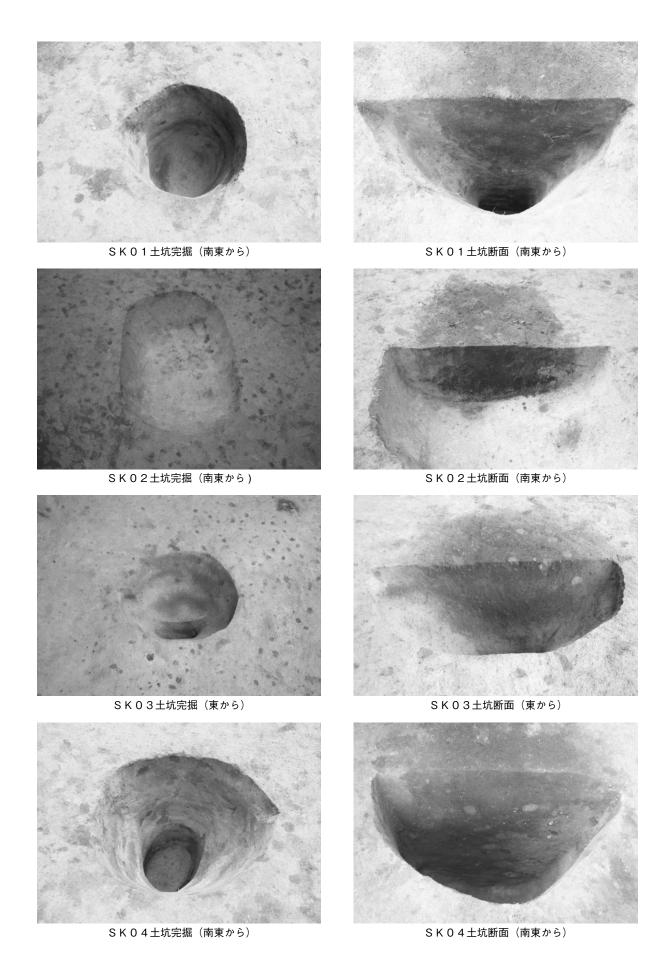


沼袋Ⅱ、沼袋Ⅲ遺跡遠景(東から)



調査区近景(西から)

写真図版 1 調査区全景



写真図版2 SK01~04土坑



SKT01陥し穴状遺構完掘(南東から)



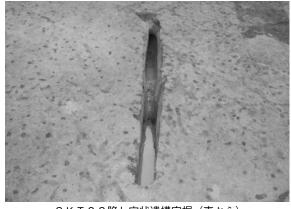
SKT01陥し穴状遺構断面(南東から)



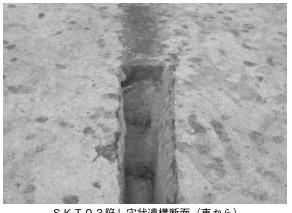
SKT02陥し穴状遺構完掘(南東から)



SKT02陥し穴状遺構断面(南東から)



SKT03陥し穴状遺構完掘(東から)



SKT03陥し穴状遺構断面(東から)

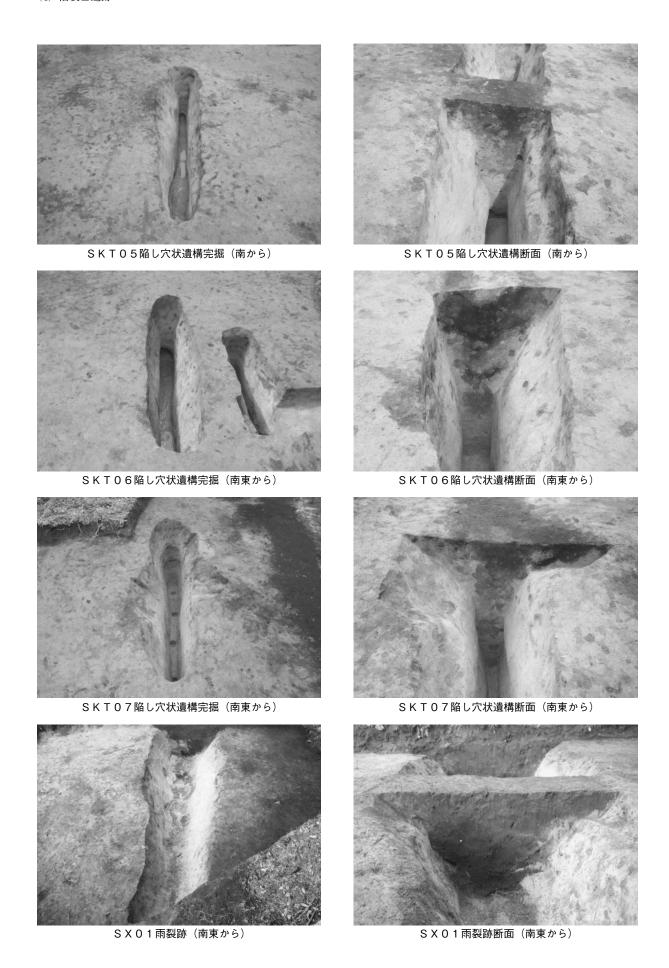


SKT04陥し穴状遺構完掘(南東から)



SKT04陥し穴状遺構断面(南東から)

写真図版3 SKT01~04陥し穴状遺構



写真図版4 SKT05~07陥し穴状遺構、SX01雨裂跡

# (5) 八幡沖遺跡

所 在 地 一関市室根町折壁字 41-3

委 託 者 一関市

事 業 名 市道千刈田向山線道路改良事業

発掘調査期間 平成 26 年 10 月 16 日~ 12 月 19 日

遺跡コード・略号 NF 93-1069・HO-14

調査対象面積 1,000 m<sup>2</sup>

調査終了面積 1,000㎡

調査担当者 杉沢昭太郎・中川重紀・鈴木

貞行・白戸このみ

### 1 調査に至る経過

八幡沖遺跡は、「市道千刈田向山線」の建設事業に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

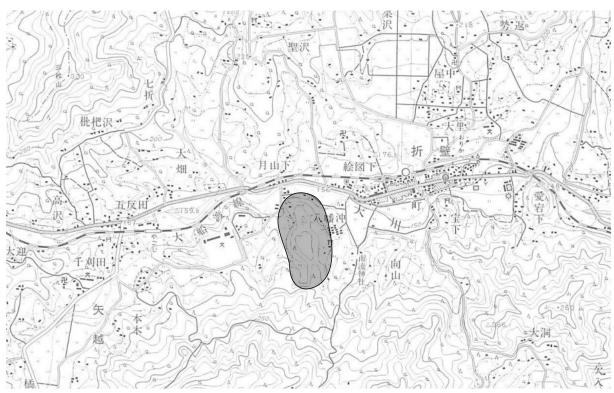
本路線は、一関市室根町矢越字千刈田地内の主要地方道本吉室根線を起点とし、室根町折壁字向山地内で国道284号室根バイパスに接続するアクセス道路として計画した路線であり、室根町矢越・津谷川地区とバイパスを繋ぐ生活道のほか、市立室根中学校への通学路としても重要な路線である。

本路線の整備により、安全で円滑な交通体系の確保とバイパスへのアクセス向上を図り、住民生活の利便性向上を目的に事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、接続する国道284号室根バイパス事業にて 事前に岩手県教育委員会による分布調査及び試掘調査が行われ、埋蔵文化財が確認されていたことか ら、発掘調査を一関市教育委員会を経て岩手県教育委員会へ依頼した。

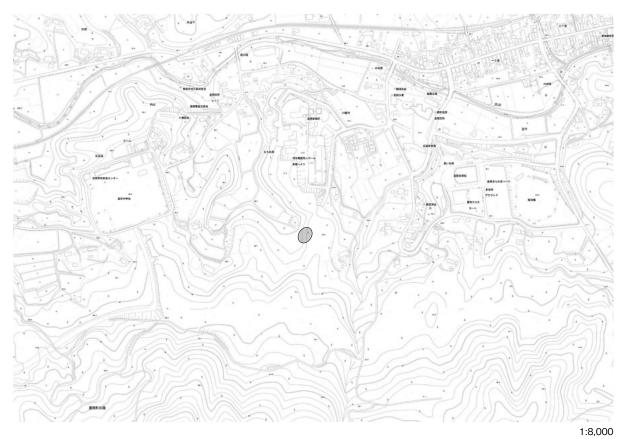
当建設整備課は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成26年10月15日付けで公益財団法人岩手県 文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(一関市建設部建設整備課)



1:25,000 折壁

第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡調査範囲

# 2 遺跡の位置と立地(第2図)

遺跡はJR東日本大船渡線折壁駅から約1km南西に位置し、矢越山と新館山から北に延びる細長い尾根上に立地している。この尾根は町内で最も大きな河川である大川のすぐ近くまで張り出しており、折壁地区の多くを見わたすことが出来る。調査区の標高は190~198mで大川からの比高差は約45mである。調査区は尾根南部付近であった。

# 3 基本層序(第4図)

調査区の殆どは尾根の斜面部分にあたる。

- I層 10YR3/3暗褐色土 粘性と締まりは共に弱い。植物根や雑物の多い表土。10~20cm。
- Ⅱ層 10YR2/1黒色土 粘性と締まりは共にやや有り。旧表土。10~40cm。
- Ⅲ層 10YR4/3にぶい黄褐色土 粘性と締まりは共にやや有り。部分的にみられる。0~10cm。
- Ⅳ層 10YR6/8明黄褐色土 粘性と締まりは共にやや有り。遺構検出面。20~60cm。
- V層 10YR7/8黄橙色風化花崗岩 粘性弱い。締まっている。基盤層。30cm以上。

#### 4 調査の概要

調査区内にあった樹木を伐採後、人力による試掘を複数箇所で行った。その後で重機による表土除去を調査区の北半部で実施した。遺構・遺物が少ないことが明かとなったため協議の結果、調査区の南半部は試掘のみで終了扱いとなった。なお、遺構名については同時期に調査した県事業からの連番となっている。

# (1)遺構

3号土坑 標高188m付近の斜面で検出した。開口部1.6×1.3m、深さ0.8mの平面形が小判形をしている。埋土は地山ブロックを不規則に含む黒褐色土で人為堆積である。平坦な底面の直上から銭貨が7枚、

重なって出土した。底面のほぼ中央付近である。銭貨の多くは洪武通宝で判読できないものもあるが 寛永通宝は含まない。骨片やその他の遺物は見られなかった。出土した銭貨の流通していた時期から 15~16世紀の墓壙といえる。

4号土坑 3号土坑のすぐ西側、標高187m付近の斜面で検出した。平面形は径2.1mの円形を基調とし、底面は楕円形である。深さは1.2m程ある。埋土上位には旧表土が入り込んでいるため遺構の規模はほぼ原形に近い状態と判断される。埋土は自然堆積であった。出土遺物は無く遺構の所属時期は不明である。

1号道路遺構 斜面の中腹より少し下、標高183~185m付近に位置している。高い部分を切り土し、低い方へ盛って平坦な面を造りだしているのが現況からでも確認ができていた。その範囲は東西約5.2m、南北は約12.2mあり、北から南へと下るように延びている。地山面まで下げて他の遺構も探したが無かった。遺構の規模や形状から堀跡に沿って造られた道路跡の可能性があるが、門跡になるような柱穴や礎石は確認できず、出土遺物もないことから時期も判然としない。

# (2)遺物

3号土坑に伴って7枚の銭貨が底面直上から出土している。この内、6枚の種類が分かっている。何れも洪武通宝で残る1枚も渡来銭の可能性が高い。個々の銭貨の特徴については観察表にまとめた。なお調査区からは銭貨の他に近現代も含め遺物は出土していない。

#### 5 まとめ

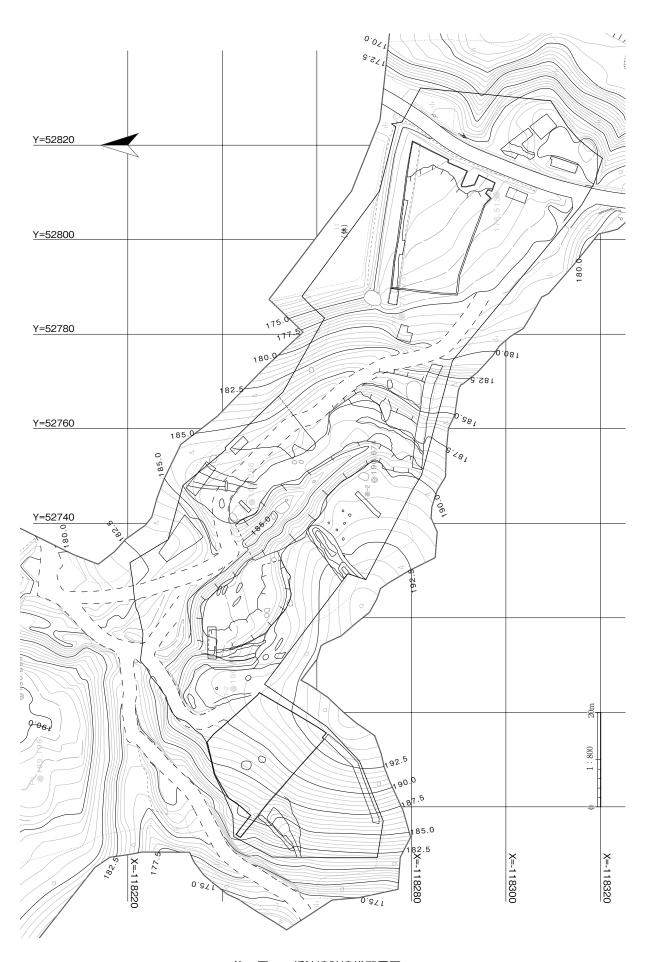
遺跡は折壁地区を広く見下ろすように北に張り出した細長い尾根を、堀で大きく2つの曲輪に分け、それぞれの曲輪に小規模な平場を複数造りだして城館としている。調査区は南側の曲輪の西辺部にあたる。

隣接する南側の曲輪にある各平場を同年に調査しているが、殆ど遺構・遺物が見られないため恒常的に使われてはいないようである。墓壙が見られるのもこのような場であったからと推察される。発掘調査はまだ行われていないが、より折壁の集落に近い北側の曲輪のほうが城館としては頻繁に利用されている可能性が高い。

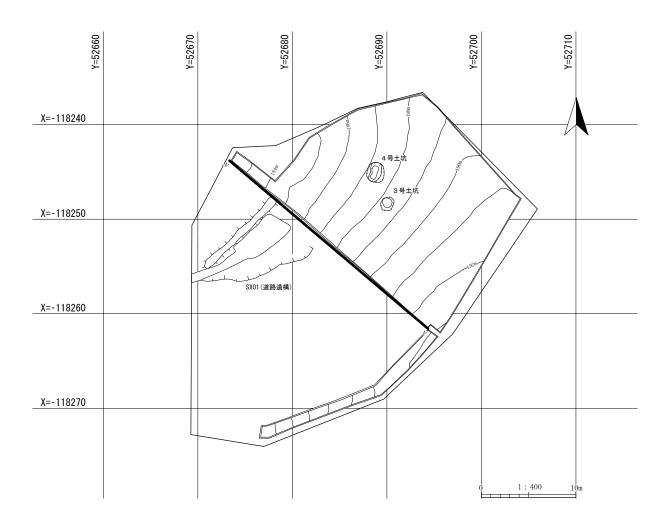
なお、八幡沖遺跡の市道千苅田向山線道路改良事業に関わる報告はこれをもって全てとする。

| 笙  | 1 | 表   | 銭貨観察表   | į |
|----|---|-----|---------|---|
| 70 |   | 2.0 | ᄣᄱᄝᄣᄺᅑᅅ | ٠ |

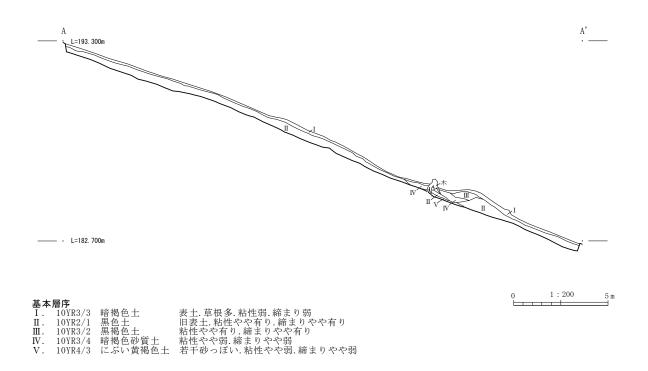
| 番号 | 銭名   | 出土地点・層位・状況                  | 産地 | 初鋳<br>年代 | 重量<br>(g) | 備考  |
|----|------|-----------------------------|----|----------|-----------|-----|
| 1  | 洪武通宝 | 3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土 | 明  | 1368     | 1.1       | 欠損  |
| 2  | 洪武通宝 | 3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土 | 明  | 1368     | 2.8       |     |
| 3  | 洪武通宝 | 3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土 | 明  | 1368     | 2.5       |     |
| 4  | 洪武通宝 | 3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土 | 明  | 1368     | 3.0       |     |
| 5  | 不明   | 3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土 |    | _        | 2.5       | 渡来銭 |
| 6  | 洪武通宝 | 3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土 | 明  | 1368     | 2.3       |     |
| 7  | 洪武通宝 | 3号土坑の中央部付近、底面直上で全てが接した状態で出土 | 明  | 1368     | 2.8       |     |



第3図 八幡沖遺跡遺構配置図

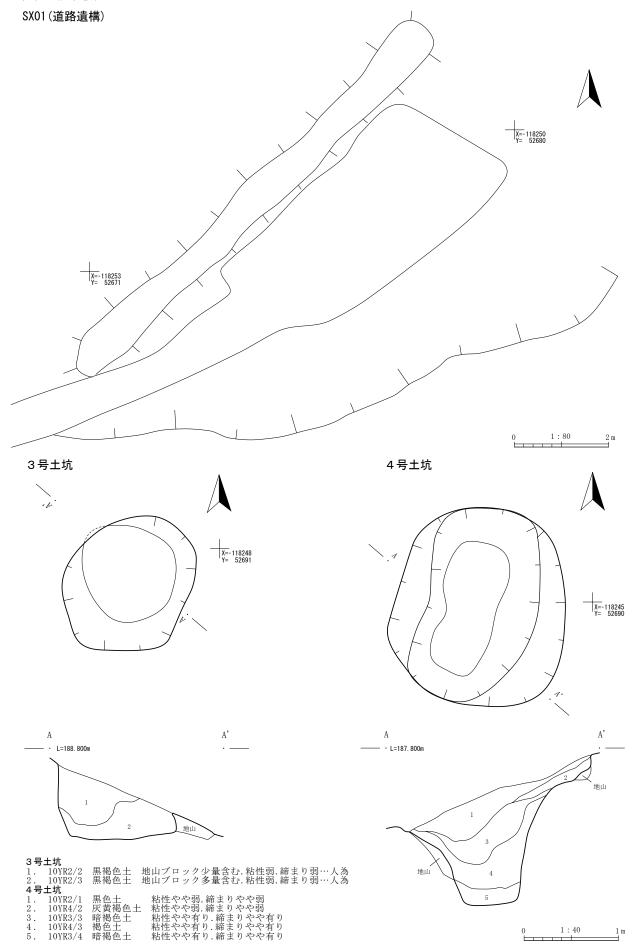


# 基本層序

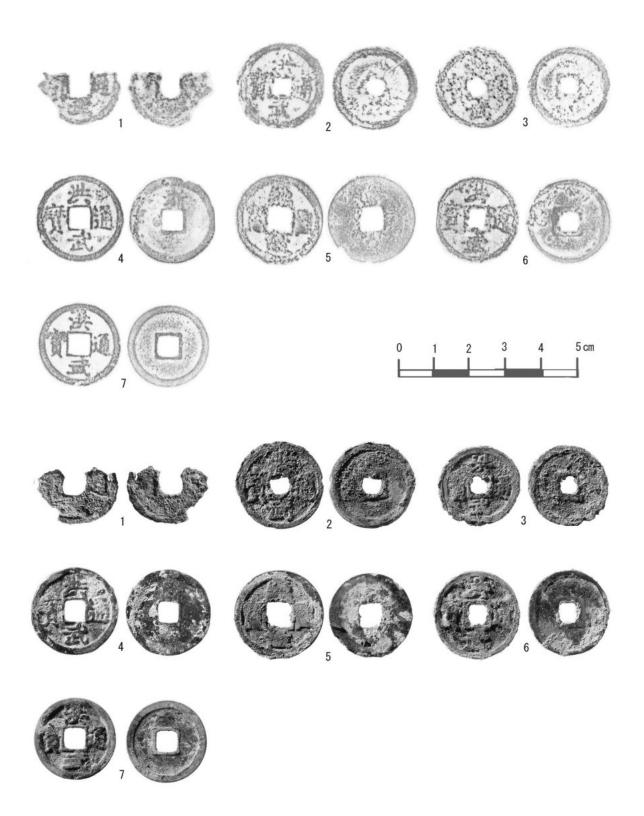


第4図 遺構配置図・基本層序

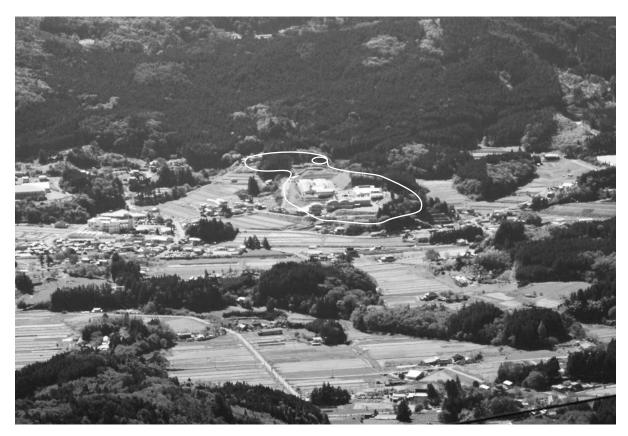
# (5)八幡沖遺跡



第5図 土坑・その他の遺構



第6図 八幡沖遺跡出土遺物



遺跡遠景(北から)



遺跡直上から(写真上が南)

写真図版1 遺跡遠景



調査区全景(北から)



基本土層 1 (北から)



基本土層2(東から)

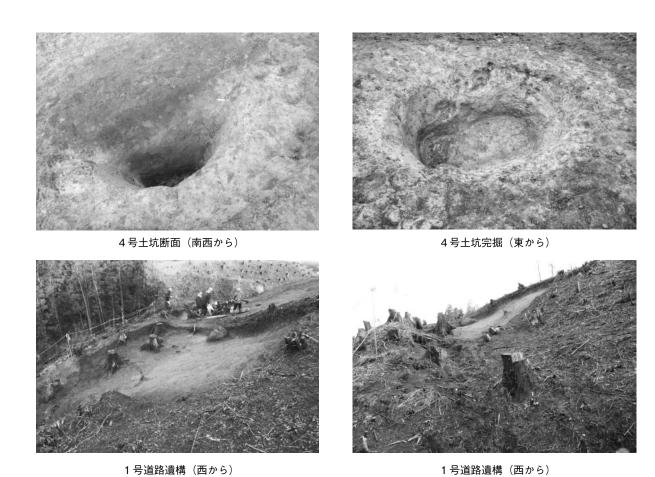


3号土坑断面(北から)



3号土坑平面(北から)

写真図版2 調査区全景、3号土坑ほか





調査区全景(北から)

写真図版 3 調査区全景、4号土坑ほか

# Ⅱ 発掘調査概報

# 凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ: 42 × 32 × 30cm 中コンテナ: 42 × 32 × 20cm 小コンテナ: 42 × 32 × 10cm

# (6) 中村遺跡

所 在 地 北上市二子町字中村地内

託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 委

業 名 北上川中流域河川改修事業

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 7 日 ~ 12 月 22 日

調査終了面積 18,290m²

調査担当者 丸山直美・高木晃・高橋義介・村木敬・川村均・ 伊東 格・清水 彩・藤原雅仁・佐藤奈津季

主要な時代奈良・平安



#### 1:50,000 北上

# 遺跡の立地

遺跡は、南流する北上川の西岸に形成された自然堤防上に立地し、標高は約60mを測る。調査対象 範囲は北上川に沿って南北に 600 mと細長く、南側には昨年まで調査された千苅遺跡が隣接している。

# 調査の概要

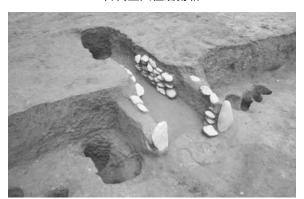
検出遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡 109 棟、掘立柱建物跡 3 棟、土坑 125 基、焼成土坑 69 基、 溝跡 25 条、畝間状遺構 8 箇所、焼土 17 基、柱穴状土坑 477 個である。調査の結果、全域にわたって 古代の竪穴住居跡を主体とする遺構群が検出され、千苅遺跡からつづく一大集落が形成されているこ とが判明した。出土遺物は弥生時代後期の土器・石器が大コンテナで3箱(旧河道出土)、奈良~平 安時代の土師器・須恵器、土製品、金属製品、鉄滓類が大コンテナで約100箱である。



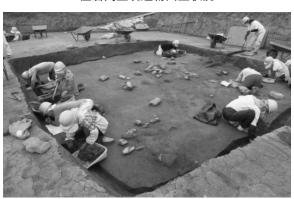
古代竪穴住居跡群



住居内土坑遺物出土状況



石組みの構造を持つカマド



作業風景

# (7)新里愛宕裏遺跡

所 在 地 遠野市綾織町新里30地割ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事 業 名 東北横断自動車道路釜石秋田線

発掘調査期間 平成26年5月21日~9月3日

調査終了面積 3,000㎡

調査担当者 小野寺純也・高橋義介・巴 亜子

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR遠野駅から南西に約1.8kmに位置し、猿ヶ石川を北に望む標高280m前後の中位段丘上に立地する。調査前の状況は雑木林である。北側調査区東側は、鉄塔建設に伴う攪乱を大きく受けているため、遺構の大半が削平されている。

### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期~後期の竪穴住居跡 3 棟、土坑 13 基、陥し穴状遺構 5 基、フラスコ状 土坑 20 基、焼土 4 基、柱穴状土坑 11 個である。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ7箱、石器類大コンテナ4箱、動物形土製品等である。縄文時代 中期の竪穴住居跡からは、複式炉を確認している。道路を挟んだ南側調査区から北側調査区斜面地上 にかけて、複数の土坑、フラスコ状土坑を検出した。この地点周辺のフラスコ状土坑内には、土器を

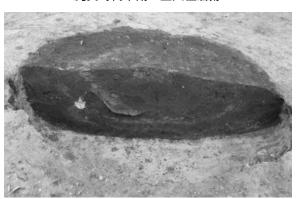
多く含む黒色土と、焼土が堆積しており、土器と ともに遺棄、もしくは斜面地上より流れ込んだと 想定される。北側調査区西側には、陥し穴状遺構 が集中しており、土器等はほとんど確認できな かった。また、調査区を南北に走る自然流路も確 認した。



縄文時代中期の竪穴住居跡



検出した複式炉



埋土中に焼土を伴う土坑

# (8) 九重沢Ⅲ遺跡

所 在 地 遠野市遠野町第29地割15-5ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線

発掘調査期間 平成26年4月9日~6月6日

調査終了面積 1,550m<sup>2</sup>

調查担当者 巴 亜子・高橋義介・小野寺純也・川村 均

主要な時代 縄文



# 遺跡の立地

遺跡は、JR遠野駅より南東へ約 1.6kmの地点に位置する。遺跡は猿ヶ石川の支流来内川へ向かって注ぐ丘陵に位置する。標高は  $310\sim320$  mで、現状は山林であった。

# 調査の概要

検出遺構は縄文時代後期の竪穴住居跡 5 棟、竪穴住居状遺構 2 棟、フラスコ状土坑 1 基、土坑 6 基、 埋設土器 1 基、焼土 6 箇所、柱穴状土坑 7 個、遺物包含層 1 箇所である。

出土遺物は、縄文土器が中コンテナ7箱、石器類小コンテナ1箱、土偶頭部や土鈴などの土製品が 小コンテナ1箱である。



遺跡遠景(直上から)



竪穴住居跡(南東から)



フラスコ状土坑遺物出土状況 (東から)



出土土偶頭部

# (9) 栃洞Ⅲ遺跡

所 在 地 遠野市遠野町第31地割ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

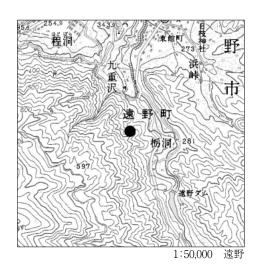
事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線

**発掘調査期間** 平成 26 年 10 月 6 日 ~ 11 月 27 日

調査終了面積 2,330m²

調査担当者 巴 亜子・高橋義介

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR遠野駅より南へ約2.1kmの地点に位置する。遺跡は猿ヶ石川支流の来内川沿いの丘陵に位置する。標高は310~320 mで、現状は山林であった。

#### 調査の概要

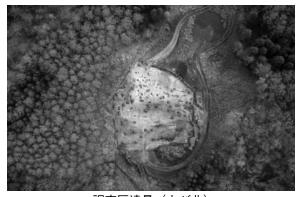
検出遺構は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 1 棟、フラスコ状土坑 12 基、土坑 36 基、陥し穴状遺構 17 基、近世墓 7 基である。調査区は大きく南斜面・東斜面・北斜面・尾根上の平坦面に分けられ、尾根上の平坦面には竪穴住居跡や近世墓が見つかった。

出土遺物は、縄文土器中コンテナ2箱、石器類小コンテナ1箱、銭貨64枚である。

南斜面にはフラスコ状土坑や土坑が集中していることが確認できた。調査区西側には陥し穴状遺構が 多く見つかっている。竪穴住居跡は複式炉を伴い尾根上の平坦面から東斜面にかけて位置しており、

斜面下部は確認できなかった。中〜近世墓はいずれも人骨が残存しており埋土中から永楽通寳・宣徳通寳などが出土している。

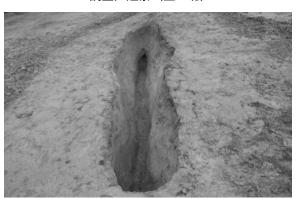
これらのことから縄文時代には尾根上の平坦面 を集落・食料保存の場、西側を狩猟の場、南北の 斜面を食料保存の場として利用していたことが明 らかとなった。



調査区遠景(上が北)



竪穴住居跡(西から)



陥し穴状遺構完掘(西から)

# (10) 平野原Ⅲ遺跡

所 在 地 遠野市上郷町平倉第38地割ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線

発掘調査期間 平成26年9月1日~9月30日

調査終了面積 1,120m²

調查担当者 巴 亜子・高橋義介

主要な時代 縄文



# 遺跡の立地

遺跡は、JR岩手上郷駅より南西へ約1.9kmの地点に位置する。遺跡は猿ヶ石川支流の早瀬川沿いの低地に面した丘陵中腹に立地する。標高は約400mで、現状は山林であった。

# 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構 17 基、時期不明の土坑 1 基である。遺構の残存状態が良く、最も深いもので確認面から 2.2 mほどである。また、陥し穴状遺構も平面形が楕円形状を呈するものと、細長い溝状を呈するものがある。

出土遺物は縄文土器小コンテナ 0.5 箱、石器小コンテナ 0.5 箱である。



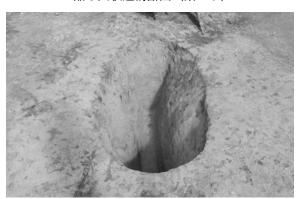
遺跡近景(東から)



陥し穴状遺構断面(東から)



陥し穴状土坑完掘(北から)



陥し穴状遺構完掘(南から)

# (11) 館岡Ⅱ遺跡

所 在 地 西磐井郡平泉町長島字館岡 23-1 ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事 業 名 一関遊水地事業

発掘調査期間 平成26年4月7日~5月17日

調査終了面積 600m<sup>2</sup>

調査担当者 杉沢昭太郎・白戸このみ

主要な時代 16世紀・18世紀



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR東日本平泉駅から約2.4km東に位置し、北上川左岸の河岸段丘縁辺部に立地している。本遺跡の北側には館岡I遺跡、南東には小島館跡、南側には猪岡館跡などがある。調査前は住宅が建ち、標高32mと30m程の二つの平坦面からなる地形であった。

### 調査の概要

中世の遺構には堀跡1条、竪穴建物跡1棟、平場2箇所がある。近世では、掘立柱建物跡4棟、土坑20基、井戸跡1基、溝跡9条があり、中近世の遺構としては柱穴状土坑266個が検出されている。中世の遺構が確認されたことにより本遺跡は城館の一部であることが明らかになり、城域は更に南へと延びることも分かってきた。館岡I遺跡と一体となって機能していた大規模な城館であった可能性が高い。中世末で調査区付近は一旦廃絶するが、18世紀以降には規模の大きな近世民家の立つ屋敷地となる。

中世の遺物では竪穴建物跡から銭貨が約30枚出土した他、瀬戸美濃産陶器2点が出土している。 近世陶磁器は中コンテナ2箱出土した。



堀跡近景 (東から)

# (12) 西平内 I 遺跡

在 地 九戸郡洋野町種市第37地割地内 所

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

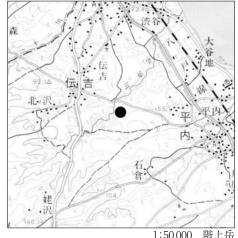
業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 6 月 2 日 ~ 11 月 28 日

調査終了面積 3,250㎡

調査担当者 濱田 宏・宮内勝巳・藤田崇志

主要な時代 縄文



1:50,000 階上岳

### 遺跡の立地

遺跡は、JR八戸線平内駅の西方約1km、洋野町役場から西北西4kmほどに位置し、北流する渋谷 川南岸の丘陵上に立地する。遺跡の標高は62.2 ~ 63.5 mで、調査区周辺には雑木や植林された木々 の生い茂る山林が広がっている。

### 調査の概要

今回の調査では、縄文時代後期初頭から前葉にかけての配石遺構群と、それに囲まれたように存在 する整地層を確認した。この配石遺構は、二つの石列からなる内帯と配石墓と呼ばれる46基の墓の 集合体である外帯から構成され、周辺の状況から前者は直径 25 m前後、後者は 40 ~ 50 mほどの弧 状をなすものと考えられる。一方、整地層は上位が黄褐色土、下位が黒色土という異なる二種の土か らなり、内帯の構成礫のほとんどは上の黄褐色土を除去した後に検出された。この二つの整地土はと もに厚さ 15cm ほど、面積約 700㎡に広がるが、作業時には相当の労力と時間が費やされたことであ ろう。この他の検出遺構には、陥し穴状遺構17基、土壙墓1基、土坑11基、炉3基、焼土6基、埋 設土器1基などがある。

出土遺物は、当該期の土器片や鐸形・円盤状の土製品、ミニチュア土器、焼けた粘土の塊、各種剥 片石器など、祭祀に関わるものが目立ち、未製品を含む石斧の出土点数が極めて多い。また、土偶や 岩偶、動物形土製品などの遺物がまったく出土していないことも特徴のひとつとして挙げられる。

縄文時代後期、日本列島は冷涼な気候に見舞われ、このことが豊穣祈願や祖先崇拝に深く結びつい たとされるが、この大きな環境の変化が配石遺構を生み出したとも言えよう。次年度は、縄文世界の 精神文化の解明を目指し、配石墓群の精査を中心とした調査を継続する予定である。



配石遺構と整地層



西側から見た配石墓群

# (13) 北ノ越遺跡

所 在 地 久慈市宇部町第3地割地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

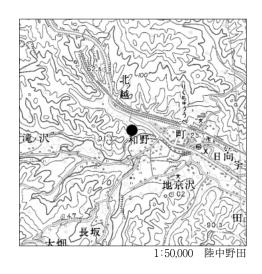
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年5月7日~9月19日

調査終了面積 7,550m<sup>2</sup>

調査担当者 米田 寛・近藤行仁・佐藤直紀

主要な時代 縄文・古代・中世・近世



# 遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線陸中宇部駅から西へ約 600 mの丘陵地に位置する。調査区現況は造成林であった。今回の調査区は、東側を宇部館跡と隣接し、標高 60 ~ 80 mを測る。

# 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡 2 棟(縄文 1・古代 1)、竪穴建物跡 5 棟、掘立柱建物跡 2 棟、陥し穴状 遺構 16 基、墓壙 4 基、カマド状遺構 1 基、土坑 2 基、柱穴状土坑 104 個である。竪穴建物跡、掘立 柱建物跡、墓壙は中世である。

出土遺物は、縄文土器小コンテナ 0.1 箱、土師器小コンテナ 1 箱、尖頭器 1 点、石鏃 2 点、石匙 1 点、 鉄滓 2 点、古銭 14 枚、青磁 2 点である。



陥し穴状遺構近景



竪穴建物跡近景



カマド状遺構近景



中世墓壙遺物出土状況

# (14) 字部館跡

所 在 地 久慈市宇部町第3地割地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

業 名 三陸沿岸道路

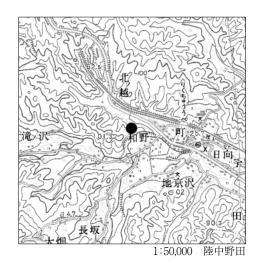
発掘調査期間 平成26年5月7日~9月19日

調査終了面積 1,950m<sup>2</sup>

調査担当者 米田 寛・濱田 宏・宮内勝巳・

佐藤直紀・藤田崇志

主要な時代縄文・中世・近世



# 遺跡の立地

宇部館跡は、三陸鉄道北リアス線陸中宇部駅から西へ約550mの丘陵地に位置する。北ノ越川と宇 部川に挟まれた丘陵部に普請され、背後の山地(野月山)とは堀切によって分断される。今回の調査 区は、西側を北ノ越遺跡と隣接し、標高 50 ~ 65 mを測る。別称で八幡館、野月館などがある。

### 調査の概要

検出遺構は、堀跡2条、土塁2基、切岸2箇所である。主郭には宇部八幡社が鎮座し、二重の堀・ 土塁・切岸で防御されている。

出土遺物は、縄文土器小コンテナ 0.1 箱、坩堝1点、古銭2枚、中世輸入陶磁器1点、コハク塊1 点である。



宇部館跡遠景

# (15) 伏津館跡

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第21地割79-1ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

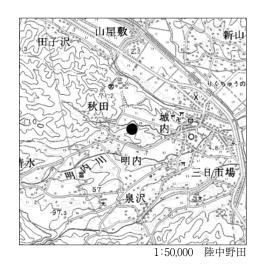
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成 26 年 4 月 10 日 ~ 8 月 18 日

調査終了面積 7,000㎡

調査担当者 北田 勲・伊藤 武・佐々木あゆみ

主要な時代 縄文・中世



#### 遺跡の立地

伏津館跡は、野田村北部に位置しており、野田村役場の西約800mの独立丘陵に立地している。現 況は山林で、標高は27~53mである。

#### 調査の概要

昨年度に続き、2ヵ年目の調査である。2ヵ年で確認された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構 10 基、古代の炭窯跡 2 基、中世の堀跡 1 条・土塁 1 箇所・曲輪 7 箇所・切岸 1 箇所・武者走り 状遺構 2 箇所・掘立柱建物跡 4 棟・焼土 11 基・土坑 25 基・溝跡 13 条・柱穴状土坑 143 個、出土した遺物は、縄文土器中 1 箱・石器小コンテナ 0.2 箱、中世の陶磁器大コンテナ 2 箱(輸入・国産)・銭貨 31 枚・茶臼 4 点・硯 1 点・石鉢 1 点・金属製品 6 点(青銅製花瓶・鍍金された青銅製目貫各 1 点含む)である。

今回の調査から、伏津館跡は 15 世紀に造営された城館で、その後短期間で廃絶したことが確認された。掘立柱建物跡 4 棟は、最高所の曲輪 1 とその下の曲輪 2 から検出している。これらはいずれも重複関係を持たず、小規模な改築の痕跡のみが認められた。建物は、 $2\times5$  間に三もしくは四面に庇を有し今調査で最大の規模を持つものと、 $2\times7$  間の二面に庇を有する切妻の建物があり、それぞれに付属屋を伴う。曲輪 1 は、西から南にかけて 1 と下の土塁に囲まれており、防御をより強固にしている。南側には腰曲輪が配置され、これから続く武者走り状の通路が東側を巡る。南端の尾根筋は、堀切で分断されており、城館の縄張り範囲を示している。また、調査区外であるが北側には数段の曲輪を確認している。

建物周辺からは遺物がまとまって出土しており、いずれも15世紀の狭い範疇に収まる。これらの遺物には、茶・香・書・花などに用いる道具が揃っており、財力を持った有力者の居館であった可能性が高い。



調査区全景 (左が北)



掘立柱建物跡全景

# (16) 中平遺跡

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第13地割

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 10 月 1 日~ 11 月 21 日

調査終了面積 2,600 m<sup>2</sup>

調査担当者 北田 勲・佐々木あゆみ

主要な時代縄文・古墳・奈良



# 遺跡の立地

遺跡は、野田村役場から南西約 400 mに位置しており、明内川と泉沢川によって形成された河岸段 丘上に立地している。現況は畑地・宅地で、標高は 21.5 ~ 24.5 mである。これまでの数回の調査で、 古代を中心とする大規模な集落が確認されている。

### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構 13 基、古墳~奈良時代の竪穴住居跡 3 棟・焼土 7 基、出土 遺物は縄文前期の土器・石器各小コンテナ 0.5 箱、古墳~奈良時代の土師器大コンテナ 2 箱・紡錘車 1 点・石器小コンテナ 0.5 箱、コハク 2 点である。

調査地点は遺跡範囲の最東端となり、古代の集落と縄文時代の狩り場の広がりが確認された。次年 度も調査を継続する予定である。



調査区全景 (右が北)

# (17) 上泉沢遺跡

所 在 地 九戸郡野田村大字野田第12地割4-1ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年8月18日~9月30日

調査終了面積 1,540m²

調査担当者 北田 勲・伊藤 武・佐々木あゆみ

主要な時代縄文・古墳・奈良



### 遺跡の立地

遺跡は、野田小学校から南西約 500 mに位置しており、泉沢川によって形成された河岸段丘上に立地している。現況は畑地で、標高は  $22.0\sim24.5~\mathrm{m}$ である。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構 60 基、古墳~奈良時代の竪穴住居跡 7 棟・土坑 5 基・焼土 2 基、時期不明の柱穴状土坑 5 個、出土遺物は縄文土器・石器小コンテナ各 0.5 箱、古墳~奈良時代の土師器大コンテナ 1 箱・石器 5 点・鉄製品 2 点・コハク 2 点である。

縄文時代の陥し穴状遺構は円形と溝状があり、前期中葉を境に2時期が想定される。これらはいずれも遺跡北側を流れる泉沢川に下る獲物を捕らえるために並列して配置されたと考えられる。

また、古墳~奈良時代の竪穴住居跡は一辺5m前後の隅丸方形を呈し、北西もしくは北東にカマドを有する。7世紀代と考えられる土師器を多く出土しており、該期の集落の広がりが確認された。調査は次年度も継続する予定である。



調査区全景 (上が北)

# (18) 力持遺跡

在 地 下閉伊郡普代村第16地割字天拝坂地内 所

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 6 月 2 日 ~ 11 月 28 日

調査終了面積 768㎡

調查担当者 星 雅之・川村 均・佐々木隆英

主要な時代 縄文



#### 1:50,000

# 遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線普代駅の北約2km、力持海岸から西に約1.5kmに位置する。調査地は 扇状地性斜面地の東向き緩斜面にあり、標高は約58m、調査前の現況は畑地である。今回の調査地は、 平成13~15年度の調査地東側に隣接する。

#### 調査の概要

検出遺構は、全て縄文時代で、竪穴住居跡 68 棟、土坑 14 基、粘土採掘坑 3 基、焼土 3 基、柱穴状 土坑 75 個、捨て場1箇所を検出した。検出した竪穴住居跡を時期別で示すと、前期 24 棟、中期 43 棟、後期1棟である。前期は前葉、中期は中葉が主体である。出土遺物は、土器大コンテナ180箱、 土製品小コンテナ1箱弱、石器類大コンテナ35箱、石製品3.5箱、コハク小コンテナ3箱が出土した。 土器は、縄文時代前期初頭~後期前葉まで認められる。



力持遺跡全景

## (19) 菅窪長屋構Ⅱ遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畑村菅窪 210-1ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年4月9日~7月11日

調査終了面積 1,200㎡

調査担当者 小林弘卓・藤本玲子・宇部めぐみ

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、田野畑村役場より南へ約2kmの地点に位置し、標高240~250m台の丘陵地上に立地している。今回の調査区は、東へ延びる狭い尾根とその両側の斜面を含む地点で、調査前の現況は山林である。

#### 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡 3 棟、土坑 14 基、陥し穴状遺構 2 基、焼土 2 基である。竪穴住居跡はいずれも円形を基調とするもので、床面に石囲炉・地床炉が確認された。これらのうち 3 棟は、出土遺物から縄文時代中期のものと推測され、いずれも尾根頂部付近に構築されている。土坑は調査区全域に見られるが、尾根上平坦部から南側斜面にかかる肩口部分に同規模・同形状のものがまとまって確認された。竪穴住居跡と同じく縄文時代中期のものと考えられる。

出土遺物は、縄文時代早期・中期のものが出土している。主体を占めるのは中期中葉~後葉の土器であるが、尖底土器や貝殻文が施文された早期中葉の土器も少数見られる。この他、有孔石製品や磨製石斧、剥片石器などが出土している。



航空写真(上空から)

## (20) 菅窪長屋構Ⅲ遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畑村菅窪 216-1ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

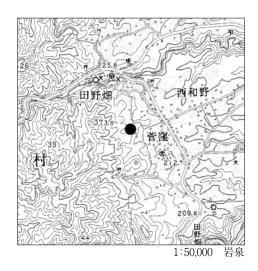
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年4月9日~7月11日

調査終了面積 2,900㎡

調査担当者 小林弘卓・藤本玲子・宇部めぐみ

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、田野畑村役場より南へ約2 kmの地点に位置し、標高 $260 \sim 270 \text{ m}$ 台の丘陵地上に立地している。今回の調査区は、東へ延びる尾根の頂部とこれを挟む南北の傾斜地を含む地点で、調査前の現況は山林である。

#### 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡 5 棟、土坑 17 基、陥し穴状遺構 2 基、炉 2 基である。竪穴住居跡は尾根頂部に構築されており、時期は出土遺物から 4 棟が縄文時代中期中葉~後葉、 1 棟が後期前葉に属するものと考えられる。土坑は南側斜面のほぼ同一等高線上に複数検出されている。規模・形状とも同様のものが多く、フラスコ状を呈することから、貯蔵施設として機能したものと考えられる。出土遺物が少ないことから詳細は不明だが、土坑同士の重複がほとんどないことから、同時期に計画的に配置された可能性が窺える。

出土遺物は、縄文時代中期の土器が大半を占める。石器は少数であるが、石鏃や石匙などが出土している。



航空写真(上空から)

## (21) 向新田Ⅲ遺跡

所 在 地 宮古市田老字向新田 164-22 ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

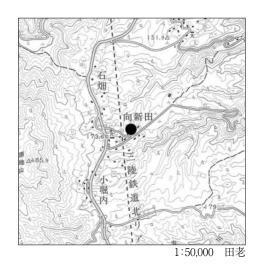
事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 9 月 16 日 ~ 12 月 5 日

調査終了面積 2,005 m<sup>2</sup>

調 查 担 当 者 鈴木博之・古舘貞身・久保友咲

主要な時代縄文・弥生



#### 遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所田老総合事務所の北約7kmに位置し、北上山地が太平洋に接する三陸海岸の海岸段丘上に立地する。遺跡は北西を上位とし、南東にかけて下る斜面上を利用して形成されており、標高は概ね145~147mである。調査前の現況は、畑地と一部宅地であったが、宅地造成のため大規模な地形改変が行われており、遺構の残存度は決してよい状況とはいえなかった。

#### 調査の概要

本遺跡の調査では、調査区中央に水道管が通っており、また住居移転に伴う諸事情の為、一度に全 面発掘調査が行えなかったが、以下のことが明らかになった。

検出遺構は、縄文時代から弥生時代にかけての竪穴住居跡 17 棟、土坑 13 基、焼土・炉 6 基である。 竪穴住居跡については、出土遺物他から判断して、縄文時代前期に属するものと晩期及び弥生時代前期に属するもののようである。晩期及び弥生時代前期に属するものについては一部重複が見られる。 土坑については副穴をもつものが 2 基あるが、一つは円形の陥し穴状遺構、もう一つはフラスコ状土坑の崩落したものと考えている。焼土・炉については、特に、基本土層の II 層(黒色土)で検出したものは竪穴住居跡に伴うものであった可能性が高い。

出土遺物は、土器が大コンテナ 10 箱で主に晩期末葉から弥生時代前期のものと、一部縄文時代前期と思われるものがある。石器については中コンテナ 7 箱である。



重複する竪穴住居跡



調查風景

### (22) 青野滝北 I 遺跡

所 在 地 宫古市田老字青野滝北地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 10 日 ~ 9 月 19 日

調査終了面積 4,200㎡

調 查 担 当 者 鈴木博之・古舘貞身・鈴木貞行

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所田老総合事務所の北約6kmに位置し、海岸段丘上に立地する。遺跡の標高は北端の谷部で概ね152m前後、南端の尾根部で概ね165m前後である。調査前の現況は山林である。今年度に発掘調査を実施した青野滝北Ⅱ遺跡の南に隣接する。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 15 棟、フラスコ状土坑 3 基、陥し穴状遺構 1 基、土坑 9 基、炭窯跡 2 基である。竪穴住居跡は調査区南端尾根の北側麓に集中しており、重複しているものが多い。ほぼ全ての竪穴住居跡から複式炉もしくは石囲炉を検出した。

遺物は縄文土器が大コンテナ27箱、石器が中コンテナ14箱、石製の有孔垂飾品が2点、石棒が2点出土している。縄文土器は中期後葉のものが主体であり、竪穴住居跡からの出土が多い。



調査区全景 (直上)

### (23) 青野滝北Ⅱ遺跡

所 在 地 宫古市田老字青野滝北地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 10 日 ~ 6 月 20 日

調査終了面積 2,100m<sup>2</sup>

調 查 担 当 者 鈴木博之·古舘貞身·鈴木貞行

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所田老総合事務所の北約6kmに位置し、海岸段丘上に立地する。遺跡の標高は概ね153m前後で、調査前の現況は山林である。今年度に発掘調査を実施した青野滝北I遺跡の北に隣接する。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 1 棟、陥し穴状遺構 3 基、土坑 4 基である。竪穴住居跡の床面からは石囲炉と土器埋設炉を検出し、2 棟が重複している可能性があったが、精査の過程で単一の遺構であると判断した。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ4箱、石器が中コンテナ1箱、石製の有孔垂飾品が未成品を含め3点である。縄文土器は中期後葉のものが主体であるが、早期の土器も少量出土している。



調査区全景 (直上)

### (24) 青野滝北Ⅲ遺跡

所 在 地 宫古市田老字青野滝北地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 10 日 ~ 9 月 30 日

調査終了面積 2,300㎡

調查担当者 鈴木博之‧古舘貞身‧鈴木貞行

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所田老総合事務所の北約6kmに位置し、海岸段丘上に立地する。遺跡の標高は概ね145m前後で、調査前の現況は山林である。今年度に発掘調査を実施した青野滝北II遺跡の東に位置し、谷を挟んで隣接する。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代中期後葉の竪穴住居跡 3 棟、陥し穴状遺構 1 基である。竪穴住居跡は調査区 東側の尾根から西へ延びる緩斜面にかけて散在しており、いずれも石囲炉をもつ。陥し穴状遺構は竪 穴住居跡と重複しており、陥し穴状遺構が古い。

出土遺物は、縄文土器が中コンテナ2箱、石器が中コンテナ1箱である。



調査区全景 (直上)

### (25) 高根遺跡

所 在 地 宮古市山口第11地割55ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 9 日 ~ 11 月 14 日

調査終了面積 2,690m<sup>2</sup>

調 查 担 当 者 西澤正晴・光井文行・中島康佑・久保友咲

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所から北西 2.9kmにあり、山口川に面した北上山地からつづく丘陵の先端に立地する。調査地は、2つの尾根とそれに挟まれた谷部に及んでいる。調査前の状況は山林や畑地であった。高根遺跡は、これまで宮古市教育委員会によって過去に2度調査が行われており、縄文時代中期の集落や墓域として知られている。

#### 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡 32 棟以上、フラスコ状土坑 57 基、土坑 18 基、溝跡 1 条、遺物包含層(捨て場遺構) 4 箇所、製鉄炉 2 基である。竪穴住居跡は、縄文時代中期に属すると考えられ、複式炉をもつものが多く、急な斜面に階段状に立地している。とくに北側にある南向き斜面上に多数が立地している。フラスコ状土坑は、縄文時代中期に属すると考えられ、南側の尾根上に集中している。大型のものが多く、直径 2 m前後、深さ 1.5 m前後のものがほとんどである。縄文時代中期の包含層は谷を挟んだ両斜面や谷底にある。これらの包含層は、厚さが 1 m以上もあり、破片の大きな土器片が多量に含まれており、土器捨て場の可能性がある。製鉄炉は斜面中位に 2 基の存在を確認しており、周囲にはフイゴの羽口、鉄滓が散在している。

これまでのところ、縄文時代中期を中心とした狭い時期に展開した集落であることが判明している。 今年度出土した遺物は、縄文土器が大コンテナ 173 箱、縄文時代の石器が大コンテナ 30 箱、鉄滓中 コンテナ 1 箱、骨・貝類中コンテナ 15 箱、土製品小コンテナ 1 箱である。なお調査は来年度も継続 して行われる予定である。



高根遺跡全景写真



包含層土器出土状況

### (26) 素产,\*\* 以 遺跡

在 地 宮古市松山第7地割1-1ほか 所

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

業 名 宮古西道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 10 日 ~ 5 月 27 日

調査終了面積 3,240㎡

調查担当者 福島正和・鈴木次郎・清水 彩

主要な時代縄文・弥生



#### 1:50,000 宮古

#### 遺跡の立地

遺跡は、JR山田線宮古駅の南西約3kmの閉伊川を臨む高台に位置する。遺跡の立地する高台は二 又の段丘となっており、調査区は先端が北方向へ延びる尾根筋と西方向へ延びる尾根筋のそれぞれ稜 線上である。両尾根は同一の谷を共有し、それぞれこの谷に向けて急峻な斜面となっている。調査区 は斜面部を除いた稜線上のみであるが、標高は70~80mである。調査前は全体が山林であった。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 1 棟、貯蔵穴 1 基、陥し穴状遺構 10 基、弥生時代の竪穴住居 跡2棟、時期不明の炭窯6基、土坑2基である。縄文時代の竪穴住居跡は円形平面形態に石囲炉を有 する。陥し穴状遺構はすべて溝状の形態のもので、尾根の稜線に沿うように分布している。2棟検出 した弥生時代の竪穴住居跡はいずれも方形の平面形態である。

出土遺物は、縄文土器小コンテナ 0.5 箱、石器小コンテナ 0.5 箱、弥生土器小コンテナ 1 箱、土製 紡錘車1点である。縄文土器は中期後葉の大木9式、弥生土器は器表面を交互刺突文と沈線によって 加飾されたいわゆる天王山式・赤穴式に該当する。弥生土器は全体の器形が判明するものはみられな いものの、いくつかの器種構成が想定される。1点の土製紡垂車は弥生土器に伴って竪穴住居より出 土したものである。

検出遺構および出土遺物から木戸井内Ⅵ遺跡は、縄文時代中期後葉の居住域、弥生時代後期の小規 模集落が営まれていたようである。弥生時代後期の竪穴住居跡は岩手県内ではきわめて類例が少なく、 今回の調査は貴重な調査事例となった。



縄文時代の竪穴住居(西から)



弥生時代の竪穴住居(東から)

# (27) 磯鶏石崎遺跡

所 在 地 宮古市磯鶏第1地割石崎地内ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

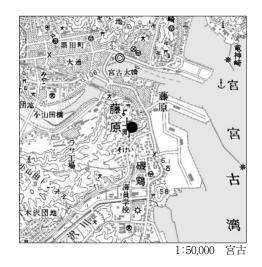
事業 名 宮古西道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 5 月 23 日 ~ 6 月 30 日

調査終了面積 618㎡

調査担当者 福島正和・鈴木次郎・清水 彩

主要な時代 古代



#### 遺跡の立地

遺跡はA地区・B地区に分かれており、A地区はJR山田線磯鶏駅の北約300mの段丘上に、B地区はそれより約500m東の宮古湾を臨む段丘上にそれぞれ位置する。遺跡の立地する段丘は舌状地形となっており、A地区は段丘上稜線上、B地区は段丘先端部の緩斜面地上である。A・B地区ともに調査前は山林であった。B地区については通常通り予定範囲の発掘調査を終えたが、A地区は遺構検出作業途中で工事計画の見直しが企図されたため調査不要となり、調査を中断、一部遺構を検出した状態までの記録保存に留めた。

#### 調査の概要

今回の調査では、A 地区で古代の竪穴住居跡と考えられる遺構を 4 棟検出し、B 地区で時期不明の炭窯と考えられる遺構を 2 基調査した。A 地区の検出遺構はいずれも平面方形を基調としており、表土除去未了の西側にも同様の遺構が連続するものと推察される。B 地区の炭窯とみられる 2 基の遺構は斜面部に土坑状の掘り込みを有し、底面付近で炭化物や焼土粒が一定量認められた。

出土遺物は A 地区で土師器が小コンテナ 0.5 箱出土し、B 地区で縄文時代の土器と石器が数点出土した。A 地区出土の土師器は遺構を検出した尾根稜線上から北へ向けて下る斜面部で出土した。

A 地区の竪穴住居跡 4 棟は検出で留めたため時代は断定できないが、検出した平面形状や周辺で出土した遺物から考えて、奈良時代を中心とする集落であったと推測できる。

B地区については詳細な時期が明らかではないが、古代以降に製炭がおこなわれた生産域であったことが判明した。また、縄文土器や石器の出土からB地区周辺域での縄文時代の人々活動があったものと考えられる。



A 地区全景(南東から)



B 地区全景(西から)

### (28) 沼里遺跡

所 在 地 宮古市津軽石第4地割79-4ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

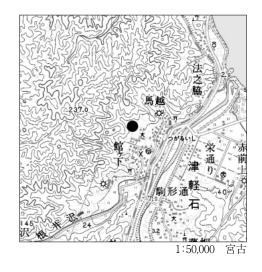
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年4月7日~5月2日

調査終了面積 400m²

調查担当者 米田 寛・近藤行仁・佐藤直紀

主要な時代縄文・古墳・奈良



#### 遺跡の立地

遺跡は、宮古市立津軽石小学校の西約300mの丘陵地に位置する。調査区の現況は植林であった。 今回の調査区は遺跡範囲の北端に位置し、昨年度調査が行われた津軽石大森遺跡と隣接する。本遺跡 は標高18~23mを測り、津軽石川西岸の津軽石集落を見下ろす位置にある。

#### 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居跡 5 棟、陥し穴状遺構 6 基、土坑 1 基である。竪穴住居跡はすべて古墳時代末~奈良時代である。

出土遺物は、縄文土器が小コンテナ 0.1 箱、土師器が大コンテナ 3 箱、石鏃、石匙、磨石、砥石、 敲石等の石器が中コンテナ 2 箱、土製紡錘車が 2 点、匙形土製品 1 点である。



沼里遺跡調査区全景

### (29) 荷竹日向 I 遺跡

所 在 地 宮古市津軽石第16地割地内ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 10 日 ~ 12 月 26 日

調査終了面積 15,600m<sup>2</sup>

調査担当者溜浩二郎・藤本玲子・小野寺純也・

中川重紀・立花雄太郎・藤田崇志

主要な時代縄文・弥生・平安・中世



#### 遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所から南南西約 9.3kmに位置し、西側から延びる丘陵地の先端部に立地し、南側の七田川との間に広がっている。北側に昨年調査が行われた払川皿遺跡が所在する。調査前の現況は畑地および山林であった。遺跡の標高は平坦部で 20 m、山頂部で 72 mを測り、約 50 mの比高差がある。

#### 調査の概要

検出遺構は、古代が竪穴住居跡 52 棟、竪穴住居状遺構 17 棟、土坑 117 基、畝間状遺構 3 箇所、焼 土 14 基、鍛冶工房跡 2 箇所、鍛冶炉 5 基、排滓場 2 箇所で、中世は山頂部に堀跡・溝跡・柱穴状土坑、 平場に竪穴建物跡があるが、遺物はなく、時期の詳細は不明である。他に縄文時代の陥し穴状遺構を 52 基検出した。

出土遺物は、排滓場から出土した鉄滓が大コンテナ80箱、土器は縄文土器小コンテナ1箱、土師器・ 須恵器大コンテナ10箱、他に刀子・鏃・鎹などの金属遺物が160点と顕著である。



遺跡全景

### (30) 石峠Ⅱ遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町石峠第2地割6-30ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

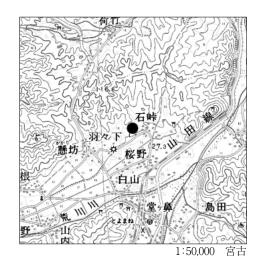
事 業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成26年4月8日~11月5日

調査終了面積 1,400㎡

調 查 担 当 者 北村忠昭・佐藤 剛・松政里奈

主要な時代縄文・古代・中世



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR山田線豊間根駅の北北東約1kmに位置し、荒川川左岸の丘陵裾に立地する。標高は約35~50m前後であり、調査前は畑地及び山林であった。北西側には中世城館である内館遺跡が隣接している。今年度は、昨年度の継続で4,998㎡を対象としていたが、3,598㎡分が調査未了となり、来年度に継続する予定である。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 78 棟(前期・中期)・竪穴住居状遺構 11 棟・フラスコ形の土坑 13 基(中期)・陥し穴状遺構 105 基(円形・楕円形・溝状・方形)・土坑 38 基・焼土 1 基・不明遺構 1 基・柱穴状土坑 12 個、古代の竪穴住居跡 2 棟、中世の墓壙 2 基、中世〜近世の掘立柱建物跡 6 棟、土坑 5 基、柱穴状土坑 44 個、時代不明の墓壙 ? 1 基・土坑 1 基・製鉄炉 2 基・土取り穴 1 箇所・不明遺構 7 基・柱穴状土坑 2 個である。出土遺物は、縄文土器大コンテナ 47 箱、剥片石器大コンテナ 5.5箱、礫石器大コンテナ 168 箱、土製品 2 点、石製品 1 点、コハク 3 点、土師器少量、須恵器 1 点、陶磁器少量、銭貨 30 枚、鉄滓大コンテナ 18 箱、羽口小コンテナ 1 箱、中世人骨等である。

今年度の発掘調査では多数の竪穴住居跡が重層的に確認され、繰り返し居住域として利用されていたことが判明した。また、昨年度と同様、多様な陥し穴状遺構が多数確認され、大規模な狩猟場であったことも判明した。その他に、今年度の調査での特筆するべき点は、人骨の伴う中世墓が確認されたことである。沿岸部での確認例は少なく、貴重な資料と言えよう。来年度も継続して調査を行う予定になっており、多数の遺構・遺物が確認されることが想定され、遺跡の詳細な内容が判明することが期待される。



調查区全景



縄文時代中期後半の竪穴住居跡

### (31) 間木戸 I 遺跡

所 在 地 下閉伊郡山田町山田第3地割地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

事 業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 8 日 ~ 12 月 19 日

調査終了面積 7,660 m<sup>2</sup>

調 査 担 当 者 村上 拓・村田 淳・中村隼人・高橋静歩・

佐藤奈津季・森 裕樹・酒井野々子

主要な時代縄文・古代



#### 遺跡の立地

遺跡は、山田町役場の北方約 1.5kmに位置する。北西側から延びる丘陵の縁部に立地し、南東側は北から南西に流下する沢により区切られている。沢の対岸には昨年度調査が行われた間木戸Ⅱ・同V遺跡が所在し、また南西側で沢田Ⅲ遺跡と接している。

#### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 161 棟・竪穴住居状遺構 1 棟・土坑 180 基(うちフラスコ状土 坑 32・陥し穴状遺構 1)・炉 27 基・埋設土器 1 基・溝跡 19 条・遺物包含層 600㎡、古代の竪穴住居 跡 11 棟・溝跡 3 条・焼土 1 基、時期不明の土坑 2 基・溝跡 4 条・切土範囲 1 箇所・盛土範囲 1 箇所・排滓場? 1 箇所・柱穴状土坑約 2500 個である。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ 334 箱、土師器・須恵器大コンテナ 4箱、石器大コンテナ 44 箱、 鉄滓類大コンテナ 6 箱、鉄製品(釣針・馬具・刀子等)数点、獣骨・貝類大コンテナ 5 箱分、有孔垂 飾品 2 点、土偶 1 点、土錘 1 点である。

今回の検出遺構・遺物のうち、主体となるのは縄文時代である。縄文時代の竪穴住居跡は南向きの斜面地に夥しい数が構築されているが、ほぼ全てが中期中葉~後葉のものであり、短い時間幅で何回も建て替えられていたことがわかる。また、フラスコ状土坑等の土坑類からは前期末~中期初頭の遺物が出土することから、調査区周辺にはこの時期の竪穴住居跡が存在するものと思われ、前期末~中期にかけてこの一帯には大規模な集落が形成されていたと考えられる。



縄文時代の竪穴住居跡



古代の竪穴住居跡

### (32) 沢田Ⅲ遺跡

地 下閉伊郡山田町山田第3地割33-1ほか 所 在

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所

業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 8 日 ~ 11 月 28 日

調査終了面積 3.600m<sup>2</sup>

調査担当者 阿部勝則・佐藤淳一・河本純一・佐藤あゆみ・ 中島康佑・南野龍太郎

主要な時代縄文・古代



#### 1:50,000 大槌

#### 遺跡の立地

遺跡は、山田北小学校の北東側約300mに位置している。調査区は、山田湾に向かって南向きに開 けている場所で、現在の山田湾の汀線より800mほど内陸に入った地点である。調査区の標高は12 ~30 mで、地形により尾根・谷・低地に分かれる。現況は山林・原野である。今年度は、昨年度か らの継続調査で、低地を主とする 3.600㎡について調査を行った。

#### 調査の概要

主な検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 79 棟、フラスコ状土坑 26 基、土坑 44 基、古代の竪穴住 居跡 13 棟、鉄生産関連遺構として工房跡 1 棟・炉 1 基、貝層 5 箇所などである。出土遺物は、縄文 土器・土師器大コンテナ 160 箱、土製品中コンテナ 1 箱、石器中コンテナ 27 箱、石製品中コンテナ 1箱、鉄滓類中コンテナ13箱、動物遺存体中コンテナ120箱、植物遺存体中コンテナ1箱などである。 調査区の南西側を除く全域で、縄文時代中期の竪穴住居跡とフラスコ状土坑などが濃密に重なった 状態で確認された。竪穴住居内の炉の形態は、地床炉・石囲炉・土器埋設炉・複式炉などさまざまな 形態がある。竪穴住居跡の埋土からは、クリを主とする堅果類、獣骨や貝類なども出土しており、縄 文時代の食生活を知ることのできる貴重な事例である。遺存状態は良くないが、中期の竪穴住居跡の 下位から前期の竪穴住居跡も確認された。当該時期の出土遺物量も多く、当該地区には、中期の集落 跡が形成される以前に前期の集落跡が形成されていた可能性がある。古代の竪穴住居跡は、調査区全 域に散在しており、すべて北カマドである。出土遺物などから奈良時代と推測される。調査区の南西 側では、地形の落ち込みが確認され、集落跡の南西端と推測される等高線に沿って貝層が確認された。 2年間の調査で、当該地域における縄文・古代の集落跡の様相を考えるうえで貴重な資料が得られた。



縄文時代の竪穴住居跡



古代の竪穴住居跡

### (33) 世屋遺跡

所 在 地 上閉伊郡大槌町吉里吉里第12地割字田屋8 ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所

業 名 三陸沿岸道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 9 月 16 日 ~ 12 月 19 日

調査終了面積 3.600m<sup>2</sup>

調查担当者 米田 寛・巴 亜子・鈴木貞行・佐藤直紀

主要な時代縄文・古代・中世・近世



1:50,000 大槌

#### 遺跡の立地

遺跡は、JR山田線旧波板駅から北へ約500mの緩斜面地に位置する。調査区現況は造成林であっ た。調査区は事業地内に3箇所設定された。遺跡背後の鯨山(標高610m)から注ぐ沢流路によって 形成された小支谷に数多くの遺構・遺物が分布し、今回の調査区も谷底付近の緩斜面地に位置する。

#### 調査の概要

検出遺構は、製鉄関連の工房跡4棟、製鉄関連炉跡7基、木炭窯跡10基、土坑3基、排滓場、炭 化物集中2箇所、焼土2基である。焼土は縄文時代、それ以外は古代~中世に属すると考えられる。

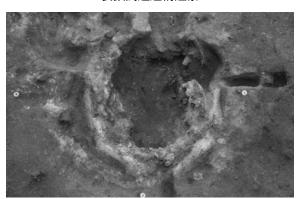
出土遺物は、縄文土器大コンテナ2箱、土師器3点、鉄床石2点、鞴羽口中コンテナ12箱、鉄滓 中コンテナ100箱、炉壁中コンテナ3箱、永楽通宝1枚である。



製鉄関連遺構遠景



工房内の製鉄関連炉



炉壁溶着滓出土状況



重複する木炭窯跡

### (34) 松磯遺跡

所 在 地 上閉伊郡大槌町吉里吉里第13地割字松磯3 ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所

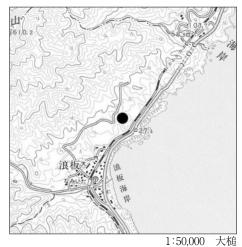
業 名 三陸沿岸道路

発掘調査期間 平成 26 年 11 月 17 日~ 11 月 28 日

調査終了面積 450m²

調查担当者 米田 寛・巴 亜子・鈴木貞行・佐藤直紀

主要な時代 縄文



### 遺跡の立地

遺跡は、IR山田線浪板海岸駅より北東へ約1kmの地点に位置する。遺跡は、船越湾に注ぐ浪板川 に面した緩斜面上にあり、尾根上・斜面部・斜面下平坦面がある。標高は49~66 mで、現状は山林 であった。

#### 調査の概要

昨年度調査の隣接地 450㎡を対象として行った。調査の結果、遺構は縄文時代中期のフラスコ状土 坑3基、土坑1基、遺物包含層1箇所が見つかった。

出土遺物は、縄文土器が大コンテナ6箱、石器類中コンテナ2箱、鉄滓2点が出土した。



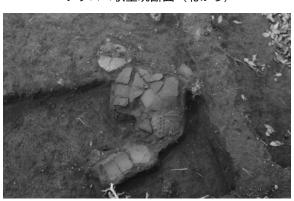
尾根部完掘 (南から)



フラスコ状土坑断面(北から)



フラスコ状土坑完掘(東から)



遺物包含層遺物出土状況(西から)

### (35) 田鎖車堂前遺跡

所 在 地 宮古市田鎖第11地割車堂前地内

委 託 者 沿岸広域振興局土木部宮古土木センター

事業 名 宮古西道路

**発掘調査期間** 平成 26 年 6 月 2 日 ~ 12 月 12 日

調査終了面積 2,650m<sup>2</sup>

調査担当者福島正和・鈴木次郎・宮内勝巳・近藤行仁

主要な時代 平安・12世紀・中世・近世



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR山田線千徳駅の南西約1.5kmの閉伊川とその支流である長沢川によって開析された平野部に位置する。遺跡の標高は6m前後であり、周囲は水田域である。ただし、今回調査した地点はその中でも微高地に立地しており、調査前は畑地が広がっていた。今回は予定されていた面積の約50%調査を終了し、追加調査および今年度未了範囲については次年度調査する予定である。

#### 調査の概要

今回の調査では、平安時代~近世にかけての遺構面と遺構を検出した。平安時代の遺構面では、古代(9~10世紀)の竪穴住居跡 11 棟・土坑 20 基、12世紀の井戸跡 1 基・溝跡 2 条・土坑 25 基を調査した。中世(15~16世紀)の遺構面では、竪穴建物跡 2 棟・掘立柱建物跡 3 棟・畠 1 箇所・暗渠 1 条・土坑 5 基・柱穴状土坑 243 個を調査した。近世の遺構面では、掘立柱建物跡 2 棟・畑 1 箇所・土坑 11 基・柱穴状土坑 32 個を調査した。

出土遺物を時代毎に数量を列記すると、古代の土師器・須恵器大コンテナ8箱、鉄製品・石製品小コンテナ81箱、12世紀のかわらけ・陶磁器片小コンテナ1箱、鉄製品小コンテナ1箱、銭貨1枚、中近世陶磁器小コンテナ1箱、中世の銭貨10枚である。

今回の調査で田鎖車堂前遺跡は古代〜近世にかけての複合遺跡であることが判明した。古代は9世紀を中心とした集落が展開しており、閉伊川流域平野部における古代集落について新たな知見を得ることができた。また、この地域で12世紀の遺構および遺物がまとまってみられる遺跡はこれまで数少なく、特にかわらけは宮古地域で初出である。同時に、鉄製品は小札、馬具などの鉄製品も非常に稀少な出土事例であり、この遺跡が12世紀において閉伊地方の拠点であったことが推測される。



平安時代の竪穴住居跡(南西から)



平安時代終り頃の溝跡(北から)

### (36) 千鶏 IV 遺跡

在 地 宮古市重茂第12地割上野地内 所

委 託 者 沿岸広域振興局土木部宮古土木センター

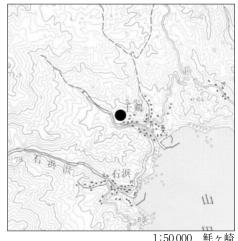
業 名 主要地方道重茂半島線地域連携道路整備事業重茂地区

**発掘調査期間** 平成 26 年 9 月 16 日 ~ 11 月 7 日

調査終了面積 2,000㎡

調査担当者 佐藤淳一・佐藤あゆみ

主要な時代 縄文



1:50,000 魹ヶ崎

#### 遺跡の立地

遺跡は、JR山田線豊間根駅から東へ約9km、重茂半島の南東部に位置する。調査区は海岸線から 沢沿いに内陸へ約500m入った標高40~50m付近の県道に隣接する緩傾斜地で、県道の新設及び拡 幅に伴う事業のため概ね東西に細長く、調査前は荒地もしくは畑地であった。隣接する県道部分は、 平成8年に宮古市教育委員会によって発掘調査が行われており、縄文時代の竪穴住居跡などが確認さ れている。発掘調査は次年度以降も継続される予定である。

調査区の基本土層はⅠ層:表土、Ⅱ層・Ⅲ層:表土下の整地・攪乱層、Ⅳ層・Ⅴ層:遺構・遺物の 包含層、Ⅵ層:地山、に大別される。現代の廃棄物等が多量に混入していたⅢ層と、Ⅳ層の上部まで は重機で土を掘り下げ、その後、遺構の検出作業を行った。調査区は地形状況、標高、基本土層等の 観点から、南区、西区、中央区、東区の4つの地区に区分し調査を行った。

調査の結果、遺構は竪穴住居跡 1 棟、土坑 13 基、焼土 1 基、遺物集中地区 3 箇所を確認した。遺 構は全て西区と中央区の西側において確認しており、他の区域(南区、東区、中央区東側)では確認 されていない。中央区西側で確認した竪穴住居跡は複式炉を伴うもので、埋土下部から大木10式と 推定される土器片が出土していることから、縄文時代中期末の遺構と推定される。出土遺物は、土器 が大コンテナ8箱、礫石器が中コンテナ5箱、剥片石器・石製品等が小コンテナ1箱、それぞれ出土 している。出土遺物の大部分は西区と中央区からの出土である。土器の大部分は縄文土器であるが、 時期は前期~晩期まで多様である。



千鶏Ⅳ遺跡全景(北から)

## (37) 宮野貝塚

所 在 地 大船渡市三陸町綾里字宮野 15 - 3 ほか

委 託 者 岩手県警察本部

事 業 名 警察施設災害復旧事業

発掘調査期間 平成26年4月7日~5月30日

調査終了面積 375㎡

調查担当者 星 雅之·佐々木隆英

主要な時代縄文・弥生・古代



#### 遺跡の立地

遺跡は、大船渡市役所から東約8.5km、三陸鉄道南リアス線綾里駅の南約200mに位置する。調査地は南向き緩斜面地にあり、標高は約18m、調査前の現況は宅地である。

#### 調査の概要

検出遺構は、土坑 10 基、柱穴状土坑 42 個、獣骨・炭化物集中区 1 箇所で、全て縄文時代と推定される。

出土遺物は、土器大コンテナ 18 箱、土製品小コンテナ 1 箱弱、石器類大コンテナ 8 箱、石製品小コンテナ 4 箱、獣骨小片少量である。土器は、縄文時代前期~晩期、弥生時代前期、平安時代が出土している。主体時期は、縄文時代前・中・晩期である。土製品は総数 21 点で、ミニチュア土器、土偶、円盤状土製品が出土している。石器類は、剥片石器が 216 点、礫石器 279 点、石製品 79 点が出土した。



宮野貝塚全景

## (38) 伽羅之御所跡第 23 次調査

所 在 地 西磐井郡平泉町平泉字花立 212-5 ほか

委 託 者 県南広域振興局土木部

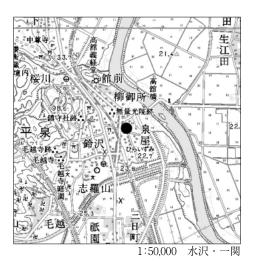
事 業 名 一般県道平泉停車場中尊寺線電線共同溝整備事業

**発掘調査期間** 平成 26 年 5 月 16 日 ~ 10 月 31 日

調査終了面積 2,240㎡

調査担当者 杉沢昭太郎・白戸このみ

主要な時代 12世紀後半



#### 遺跡の立地

伽羅之御所跡は、JR東日本東北本線平泉駅の北約400mに位置し、遺跡の西側は特別史跡無量光院跡、北側では柳之御所遺跡、南側は鈴沢の池跡等と接する。地形は概ね平坦で、現況は県道であった。

#### 調査の概要

伽羅之御所跡は、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』の中に登場する藤原秀衡の常居所で、息子の泰衡が 引き継いだとされる「伽羅御所」のあった場所と考えられている遺跡である。

今回の調査では、12世紀の遺構として堀跡1条、掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基、土坑49基、塀跡1条、溝跡9条、整地層3箇所、性格不明遺構1基、柱穴状土坑約154個が検出された。12世紀の遺物として、かわらけが中コンテナ3箱、陶磁器が小コンテナ0.5箱出土している。堀跡は西北西~東南東方向へ延びており、上幅が約5.5mある。堀跡の見つかった位置は「伽羅御所」というより隣接する「無量光院」の南辺に相当する可能性もある。堀跡からは12世紀後半のかわらけが出土した。掘立柱建物跡は梁行4間、桁行7間の南北棟で総柱建物になると考えられ、12世紀後半よりも古い。検出された遺構は堀跡の北側よりも南側のほうから多く見つかっている。



無量光院跡から伽羅之御所跡へと延びる堀跡

# (39) 八幡沖遺跡

所 在 地 一関市室根町折壁字八幡沖地内

委 託 者 県南広域振興局土木部一関土木センター

事業名 地域連携道路整備事業折壁地区室根バイパス

**発掘調査期間** 平成 26 年 9 月 24 日 ~ 12 月 19 日

調査終了面積 5,110m<sup>2</sup>

調查担当者 杉沢昭太郎・中川重紀・鈴木貞行・

白戸このみ

主要な時代縄文・中世・近世



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR東日本折壁駅から約 1 km南西に位置し、新館山から北に張り出す細長い尾根上に立地している。大川を挟んで北側には金鶏城がある。調査区の標高は  $190\sim198$  mで大川からの比高差は約 45 mである。

#### 調査の概要

検出された遺構には、縄文時代の陥し穴状遺構7基、中世の堀跡2条、平場6箇所、柱穴状土坑8個があり、近世及びそれ以降のものとして、土塁1基、溝跡6条、水路跡1条などがある。

遺跡は、折壁地区を見下ろすように北に張り出した細長い尾根を、堀で大きく2つの曲輪に分け、それぞれの曲輪に小規模な平場が複数造られている。各平場には殆ど遺構が見られないため恒常的に使われた場ではない。今回の調査で見つかった堀跡はこの小規模な平場を区画するもので上幅約5m、深さは約2mである。縄文時代の陥し穴状遺構は尾根頂部にあり調査区外へと続いている。

遺物は、縄文土器2点、石器1点、近世陶磁器5点、釘1点である。



堀跡断面(東から)

### (40) 赤前Ⅲ遺跡

所 在 地 宮古市赤前第7地割6番地1ほか

委 託 者 宮古市都市整備部都市計画課

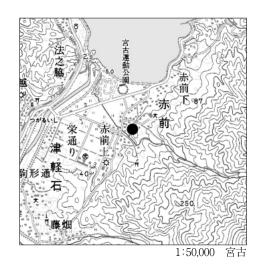
事 業 名 防災集団移転促進事業赤前・津軽石地区

発掘調査期間 平成26年4月8日~9月10日

調査終了面積 6,627㎡

調査担当者 村田 淳・中村隼人・高橋静歩・中島康佑

主要な時代縄文・平安・中~近世



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR山田線津軽石駅から東方約1.3kmに位置し、重茂半島の縁辺部の丘陵西側斜面部に立地する。標高は24~36 mであり、調査前の状況は畑地・林野であった。

#### 調査の概要

昨年度から継続調査である。今年度分の検出遺構は、縄文時代中期中葉~後葉の竪穴住居跡 22 棟・竪穴状遺構 2 棟・土坑類 26 基・石囲炉 1 基・焼土 5 基、平安時代の竪穴住居跡 2 棟・鉄生産関連炉 1 基・柱穴状土坑 28 個、近世の掘立柱建物跡 4 棟・柱穴状土坑 50 個・焼土 1 基、時期不明の柱穴列 4 条・畝間状遺構 3 箇所・土坑 29 基・焼土 19 基・溝跡 4 条・柱穴状土坑 160 個である。出土遺物は、縄文土器(中期中葉~後葉主体)大コンテナ 13 箱、土師器・須恵器大コンテナ 2 箱、陶磁器小コンテナ 1 箱、石器大コンテナ 5 箱、鉄製品(刀子・釘等) 20 点、鉄滓少量、寛永通宝・無文銭各 1 枚、獣歯・貝類少量である。

今年度の調査では、縄文時代中期中葉~後葉、平安時代、近世の遺構・遺物を検出した。縄文時代の遺構は竪穴住居跡が主体であるが、調査区中央のものは大木8式期、調査区北側のものは大木9式期と時期によって占地が異なる。また、西側斜面下に位置する平成25年度調査区では竪穴住居跡を含む遺構のほとんどが縄文時代前期末~中期初頭に属することから、2箇年の調査で調査区全域を含めて時代が新しくなるにつれて標高の高い地点(遺跡範囲の東側)に集落が移動していることが判明した。平安時代の遺構としては一辺6.5 mと本遺跡では最大規模の竪穴住居跡が検出されているが、検出数は昨年度よりも少ない。しかし、昨年度分を含めると竪穴建物跡(工房含む)が40棟近く検出されており、この時期にも大規模な集落を形成していることが判明した。この他、近世の遺構として掘立柱建物跡がある。このうち調査区北側で検出した1棟は3×6間(1間=約2m)であり、宮古地域でも規模の大きな部類に属するものである。



縄文時代の竪穴住居跡



近世の掘立柱建物跡

### (41) 浜川目沢田 I 遺跡

所 在 地 下開伊山田町大沢浜川目第11地割ほか

委 託 者 山田町

事 業 名 大沢地区漁業集落防災機能強化事業

**発掘調査期間** 平成 26 年 6 月 2 日 ~ 12 月 17 日

調査終了面積 6.240m<sup>2</sup>

調 查 担 当 者 須原 拓 · 久保賢治 · 野中裕貴 · 南野龍太郎

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は山田湾から約200 m北側に位置する。海岸から続くと推定される低地面およびそこから一段上がる低い段丘末端に立地する。標高は2~7 mである。調査前は水田・畑地であったが、調査区の南側は戦時中、旧日本軍による石油貯蔵庫建設のため、遺跡の南側は削平が激しい。

#### 調査の概要

検出遺構は縄文時代中期後葉(大木 8b~9式期)の竪穴住居跡 15 棟、後晩期の竪穴住居状遺構 1棟、中期・晩期の土坑 46 基(うち7基はフラスコ状土坑)、性格不明遺構 1 基、埋設土器 3 基、焼土 1 基、柱穴状土坑 40 個である。出土遺物は、縄文土器が大コンテナ 437 箱(中期、晩期主体。他に前期、後期が含まれる)、石器大コンテナ 133 箱で、古代の土師器、須恵器、近世以降の陶磁器もみつかった。

遺構の分布は中期が主に北側の段丘末端部に、晩期の遺構は南側の低地面に分布する傾向がある。 中期の竪穴住居跡は石囲炉や複式炉が伴われ、また床面中央や炉の脇に伏甕を設置するものも見受け られる。また遺構群上に層厚 30cmの遺物包含層が堆積し、大量の縄文土器や石器が出土している。

晩期は竪穴住居状遺構の周辺を中心にフラスコ状土坑や埋設土器、焼土遺構が分布しており、小規模集落を形成している。遺構群の多くは、概ね山田湾の方角に向かって崩落しており、古津波などの自然災害による崩壊があったこともうかがえる。またこの遺構群上も含め、調査区南側の広い範囲で層厚 20cm前後の遺物包含層が堆積し、多量の縄文時代後晩期の遺物が出土している。

今回の調査で、本遺跡が海沿いに立地するという縄文時代にしては特異な環境でありながら、中期と晩期において集落が営まれていたことが分かった。加えて多量の出土遺物群は、遺跡周辺も含め、さらに大規模な集落が展開していたことを推測させるものである。



調査区全景(北東から)



縄文時代中期の竪穴住居跡(北西から)

### (42) 燒山遺跡

在 地 下閉伊郡山田町船越第6地割地内 所

託 者 山田町 委

業 名 船越地区防災集団移転促進事業

発掘調査期間 平成26年4月7日~6月20日

調査終了面積 1,500㎡

調查担当者 久保賢治・須原 拓・南野龍太郎

主要な時代古代・中世



1:50,000 大槌

#### 遺跡の立地

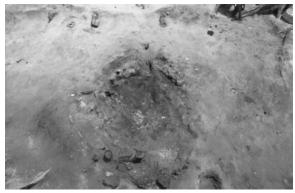
遺跡は、船越半島の山々と船越湾、太平洋を臨むことができる山地の麓に位置する。JR山田線船 越駅と山田道路との間に挟まれ、南東に開けた谷の北側斜面地に立地している。標高は約50mであ る。急斜面から緩斜面に移行する地形の変換点に、製鉄炉を伴う工房跡、重複が激しい楕円形の炭窯 跡、土坑などの遺構が集中している。当該地の一部は畑地として利用された。その後、戦後の早い時 期に杉が植林され、調査以前は杉林であった。

#### 調査の概要

調査区南側には横断する沢跡があり、その北側斜面地に古代~中世の鉄生産関連の遺構群がほぼ同 一等高線上に分布する。製鉄工房跡 4 棟、製鉄炉 9 基、炭窯跡 12 基、土坑 12 基を確認した。製鉄工 房跡は緩斜面地に形成され、中央に製鉄炉、その周囲の平場と用途不明の土坑で構成されている。工 房の手前(谷側)は廃滓場へ続く緩やかな斜面が形成され、奥(山側)は平場とともに床面から緩や かに壁が立ち上がる形状をなしている。炭窯跡の規模は幅約1m、長さが3m~4m程あり、重複 が激しく、繰り返し同じ地点で炭作りを行っていたことが分かった。製鉄炉で使用する燃料を生産し ていたことがうかがえる。

出土遺物は、使用済みの羽口中コンテナ 25 箱や多量の鉄滓大コンテナ 110 箱が主である。製鉄工 房跡の床面からは複数の羽口と共に小刀が1点出土した。また、遺構は確認されていないが、縄文時 代の土器片、石器類が少数ではあるが出土した。

今回の調査からこの焼山遺跡は、製鉄に必要な原料や燃料が得やすく、鉄生産に適した地であった ことが明らかとなった。岩手の鉄文化を教えてくれる貴重な遺跡である。



製鉄炉と工房壁の羽口



小刀と羽口の出土状況

### (43) 赤浜Ⅱ遺跡

地 上閉伊郡大槌町赤浜1丁目207番地ほか 所 在

委 託 者 大槌町

業 名 土地区画整理事業 赤浜地区

**発掘調査期間** 平成 26 年 11 月 4 日~ 12 月 18 日

調査終了面積 1,875㎡

調査担当者 小林弘卓・濱田 宏・宇部めぐみ・栃澤 星

主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、大槌町役場から東へ約3kmの地点に位置し、標高2~6mの大槌湾へと繋がる緩やかな南 向きの斜面裾に立地している。遺跡を含む赤浜地区は東日本大震災の甚大な被害を受けた区域であり、 調査区現況も宅地であったが、建物はすべて損壊・撤去されている状況である。

#### 調査の概要

今回の調査地点は宅地造成の盛土が厚く、斜面下方にあたる南側においては約1.5 mの層厚が認め られた。また、地形的にも北方山側からの崖錐性の堆積が著しく、これらを合わせ遺構検出面まで最 大3m掘削が必要となった。そのため、今年度の調査は遺構検出にのみ留めることとした。

検出された遺構は、竪穴住居跡6棟、土坑3基、焼土10基、配石遺構2箇所、遺物包含層約900㎡ である(12/18 現在)。竪穴住居跡や土坑は北側に集中して検出されており、十和田中掫火山灰で覆わ れたものも数棟確認された。周辺に縄文時代前期中葉を主体とする遺構が広がる可能性が考えられる。 調査区中段~南側においては縄文時代後期の遺物包含層が広がる。検出段階ではあるが、注口土器や 土偶等が出土している。また、若干の時期差があると考えられるが、包含層よりやや上段部分から、 配石遺構が2箇所検出された。まだ一部のみの検出ではあるが、円礫群が弧状または円形に配置され た可能性が推測される。これらは来年度の調査によって明らかになるものと考えられる。



配石遺構周辺(南から)

### (44) 高田城跡

所 在 地 陸前高田市高田町字洞の沢、鳴石、本丸地内

委 託 者 陸前高田市

事業 名 土地区画整理事業高田西地区

**発掘調査期間** 平成 26 年 4 月 7 日 ~ 11 月 28 日

調査終了面積 27,000㎡

調查担当者 村木 敬·中村利至久·野中裕貴·

栃澤 星

主要な時代 中世



#### 遺跡の立地

高田城跡は、陸前高田市役所仮庁舎の南東約900m、氷上山より南へ延びる丘陵上に位置する。標高は45~55m前後で南側の眼下に広田湾を望む立地となっている。調査前の現況は山林であった。本城館は以前からその存在が知られており、八幡館または東館とも呼ばれていた。

#### 調査の概要

本年度は調査以前に想定されていた5つある曲輪の内、曲輪IVとVを対象に調査を行った。曲輪IVからは、曲輪10箇所、切岸9箇所、虎口2箇所、土塁2基、堀跡1条、掘立柱建物跡1棟、土坑5基を検出した。館は、尾根を切り出した後に縁辺部を版築によって城館の形を築き上げるという構築の特徴が明らかとなった。また、曲輪Vは、近現代の削平を受けていることが判明した。この結果、城館の範囲が曲輪  $I \sim IV$  までと狭まることが分かった。時期については、判断できる遺物が少なく、使用されていた時代についての言及が難しい。次年度も継続予定である。



遺跡遠景

### 報告書抄録

|                 |  |                             | どはっくつちょ            | うさほう           | こくしょ              |                    |                |             |                          |
|-----------------|--|-----------------------------|--------------------|----------------|-------------------|--------------------|----------------|-------------|--------------------------|
|                 | 平成 26 年度到  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 副 書 名           |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 卷次              |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| シリーズ名           | 岩手県文化振   | 興事業団埋蔵                      | 文化財調査報告            | 書              |                   |                    |                |             |                          |
| シリーズ番号          | 第 647 集  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 編著者名            | 小林弘卓   |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 編集機関            | (公財) 岩手県   | 具文化振興事業                     | 団埋蔵文化財・            | センター           |                   |                    |                |             |                          |
| 所 在 地           | 〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001 |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 発行年月日           | 西暦 2015年3月23日  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| ふりがな            | ふりがな   | りがな コード 北緯 東経 調本期間調査面積 調本原田 |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 所収遺跡名           | 所 在 地  | 市町村                         | 遺跡番号               | 0 / //         | 0, "              | 調査期間               | m²             | - //        | 調査原因                     |
|                 | 九戸爺  |                             |                    | 40 度           | 141 度             | 2014.09.04         |                |             |                          |
| 南川尻遺跡           | 九戸師<br> 250525 たいち<br> 洋野町種市                         | 03507                       | I F 48-1197        | 24 分           | <br>  41 分        | ~ 634              | 6,340          | m²          | 三陸沿岸道路                   |
| HITTING IN      | 第 28 地割  | 00001                       | 1 1 40-119/        |                |                   | 00141000           | 0,040          | 111         | 建設事業                     |
| man discount of |  |                             | <u> </u>           | 51 秒           | 54 秒   2014.10.30 |                    |                |             |                          |
| 所収遺跡名           | 種別   | 主な時代                        | 主な遺<br>竪穴住居跡       | <u>構</u><br>2棟 | -                 | 主な遺物               |                |             | 特記事項                     |
|                 | 集落跡  | AM Londo (I)                | 土坑                 |                | 縄文土器              |                    |                |             |                          |
| 南川尻遺跡           | 狩猟場  | 縄文時代                        | 陥し穴状遺構             | 11 基           |                   |                    |                |             |                          |
|                 | A 11 a 21 ±  | ロボック 土                      | 焼土                 | 1基             |                   | 2 17 2             | 7 III -> A     | . L         | 57 ± A = 1± 1 = 1 = 1    |
|                 |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             | 竪穴住居跡は尾根上の               |
|                 |  |                             |                    |                |                   | -                  |                |             | は尾根上の西側から集<br>重複が見られないこと |
| 要 約             |  |                             | 人の心思をかり<br>ものと推測され |                |                   |                    |                |             |                          |
|                 |  | (CHIE C 10/C (              | 3 V / C 1正成 C 4 C  | · ///1         | (-31 3/(-99) C    | - 0 (19/11 0 4)    | U ( V /C )     | ^           |                          |
|                 |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| ふりがな            | へいせいにじ   | ゅうろくわく                      | ビけっくつちょ            | ネ <i>キ1</i> チネ | >/1 F             |                    |                |             |                          |
| ļ               | へいせいにじゅうろくねんどはっくつちょうさほうこくしょ<br>立式 2c 年度発掘週末報生業       |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 副書名             | 平成 26 年度発掘調査報告書                                      |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 巻 次             |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
|                 | 岩手県文化振興事業団文化財調査報告書                                   |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| -               |  | 典爭未 <u>因</u> 义化原            | 初朔宜報百音             |                |                   |                    |                |             |                          |
|                 | 第 647 集  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
| 編著者名            | <del> </del>   | 1 本 // 上 四 主 米              |                    | 1.3.5          |                   |                    |                |             |                          |
| 編集機関            | <del> </del>   |                             | 団埋蔵文化財             |                |                   | 10) 600 600        |                |             |                          |
| 所 在 地           |  |                             | 下飯岡 11 地割          | 185 番地         | TEL (C            | 19) 638-9001       |                |             |                          |
| 発行年月日           | <del> </del>   | 三 3 月 23 日                  |                    |                |                   |                    | T              |             | T                        |
| ふりがな            | ふりがな   |                             | - F                | 北緯。//          | 東経。//             | 調査期間               | 調査面            | ī積          | 調査原因                     |
| 所収遺跡名           | 所 在 地  | 市町村                         | 遺跡番号               | - , "          | - , "             |                    | m <sup>r</sup> |             | ;;                       |
|                 | 九戸都洋野前   |                             |                    | 40度            | 141 度             | 2014.04.09         |                |             |                          |
| 下向遺跡            | 中野第1地割   | 03507                       | I F89-1394         | 18 分           | 45 分              | ~                  | 2,400          | m²          | 三陸沿岸道路                   |
| I I I DELLA     | 地内   | 00001                       | 1100 1004          |                |                   | 2014.05.12         | 2,400          | ***         | 建設事業                     |
|                 |  |                             |                    | 20 秒           | 46 秒              | 2014.03.12         |                |             |                          |
| 所収遺跡名           | 種別   | 主な時代                        | 主な遺                | 構              |                   | 主な遺物               |                |             | 特記事項                     |
|                 | X  | 縄文時代                        | 陥し穴状遺              | 構6基            | 縄文                | 土器・弥生土岩            | 器・             |             |                          |
| 下向遺跡            | 狩場   | 弥生時代                        | 土坑                 | 1基             | 石器                |                    |                |             |                          |
|                 | 今回の調査  | -<br>で縄文時代後昇                | 明と考えられる            | 溝状を呈           | する陥した             | 穴状遺構が 6 差          | 基検出さ           | れた。         | 。この時期では他に楕               |
|                 | 円形や円形の   | 陥し穴状遺構さ                     | も検出される例            | Jが見られ          | るが、この             | の形態の違いし            | は狩猟の           | 対象!         | 動物や狩猟方法の違い               |
| <b>一</b>        | によるものと   | も考えられる。                     | 住居等の遺構             | は確認で           | きなかった             | が弥生時代中             | 期から行           | <b>炎期</b> σ | )土器も出土している。              |
| 要約              |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
|                 |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
|                 |  |                             |                    |                |                   |                    |                |             |                          |
|                 |  |                             |                    |                |                   | Sec Ada piles - Ar |                |             | 北系による数値である。              |

※緯度、経度は世界測地系による数値である。

|   | <u> </u>                    |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
|---|-----------------------------|--|---|--------------------|------------|---------------|-------------------------|------------------|------------|--|--|
|   | へいせいにじゅうろくねんどはっくつちょうさほうこくしょ |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 書 名   | 平成 26 年度多                   | 平成 26 年度発掘調査報告書  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 副書名   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 巻次  |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| シリーズ名   | 岩手県文化振                      | 興事業団埋蔵   | 文化財調査報告                                       | 書                  |            |               |                         |                  |            |  |  |
| シリーズ番号  | 第 647 集                     | 第 647 集  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 編著者名  | 藤本玲子                        |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 編集機関  | (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター    |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 所 在 地   | 〒 020-0853                  | 岩手県盛岡市   | 下飯岡 11 地割                                     | 185 番地             | T E L ((   | 19) 638-9001  |                         |                  |            |  |  |
| 発行年月日   | 西暦 2015年3月23日               |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| ふりがな  |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  | 調本百円       |  |  |
| 所収遺跡名   | 所 在 地                       | 市 町 村  | 遺跡番号  | 0 / //             | 0 / //     |               | m <sup>*</sup> 調査原因     |                  |            |  |  |
|   | 下閉伊郡                        |  |   | 39 度               | 141 度      | 2014.07.07    |                         |                  |            |  |  |
| 恕袋Ⅱ遺跡   | 田野畑村                        | 03484  | K G 11-2263                                   | 56 分               | 50 分       |               | 0.005                   | 120 <sup>2</sup> | 三陸沿岸道路     |  |  |
| 伯衣Ⅱ退跡   | 尾鼾愛 46- 1                   | 03464  | N G 11-2203                                   |                    |            |               | 3,695                   | 111              | 建設事業       |  |  |
|   | ほか                          |  |   | 50 秒               | 23 秒       | 2014.09.05    |                         |                  |            |  |  |
| 所収遺跡名   | 種別                          | 主な時代   | 主な遺   | <br>構              | 1          | 主な遺物          |                         |                  | 特記事項       |  |  |
|   |                             |  | 雨裂跡   | 1条                 | 縄文土器       |               |                         |                  |            |  |  |
| 沼袋Ⅱ遺跡   | 狩猟場                         | 縄文時代   | 旧河道   | 1基                 | 寛永通宝       | П             |                         |                  |            |  |  |
|   | 東向き急斜                       | <br> <br>  面中腹部と裾  | 陥し穴状遺構<br>  郊付近に縄文明                           | 21 基               | <br>       | 21 基 旧河道      | 1 冬                     | 雨裂器              | 旅1条を確認した。う |  |  |
|   |                             | 東向き急斜面中腹部と裾部付近に縄文時代の陥し穴状遺構 21 基、旧河道 1 条、雨裂跡 1 条を確認した。う<br>5 溝状陥し穴状遺構 18 基、楕円形陥し穴状遺構 2 基、円形陥し穴 1 基で、逆茂木痕を有するものがある。調 |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
|   |                             | を区中央付近には東西方向に谷川が形成されており、検出された旧河道から調査区東側に広がる沼地に集まる  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 要約  | 動物を狙った                      | 狩猟場であった  | こことが明らか                                       | となった               | 0          |               |                         |                  |            |  |  |
|   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
|   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| ふりがな  | へいせいにじ                      | ゅうろくねん。  | -<br>どはっくつちょ                                  | うさほう               | こくしょ       |               |                         |                  |            |  |  |
| 書 名   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 副 書 名   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 卷次  |                             |  |   |                    | -          |               |                         |                  |            |  |  |
| シリーズ名   | 岩手県文化振                      | 興事業団埋蔵   | 文化財調査報告                                       | ·書                 |            |               |                         |                  |            |  |  |
| シリーズ番号  | 第 647 集                     |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 編著者名  | 藤本玲子                        |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 編集機関  | (公財) 岩手県                    |  | 団埋蔵文化財・                                       | センター               |            |               |                         |                  |            |  |  |
| 所 在 地   | 〒 020-0853                  | 岩手県盛岡市   | <br>下飯岡 11 地割                                 | <br>185 番地         | T E L ((   | 019) 638-9001 |                         |                  |            |  |  |
| 発行年月日   | 西暦 2015年                    | 三 3 月 23 日   |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
| ふりがな  | ふりがな                        | <b>J</b> -   | - ド   | 北緯                 | 宙終         |               | 調査面                     | i秸               |            |  |  |
| 所収遺跡名   |                             |  | 遺跡番号  | 0 / //             | 東経。/ "     | 調査期間          | PPIEE<br>m <sup>2</sup> | 47月              | 調査原因       |  |  |
|   | 下閉伊都                        | 1, 1,  | , <u>, , , , , , , , , , , , , , , , , , </u> | 20 144             | 1 / 1 125  | 00140707      |                         |                  |            |  |  |
| ぬまぶくろ   | 田野畑村                        |  |   | 39 度               | 141 度      | 2014.07.07    |                         |                  | 三陸沿岸道路     |  |  |
| 沼袋Ⅲ遺跡   | 尾肝要 73                      | 03484  | K G 21-0213                                   | 56 分               | 50 分       | ~             | 950r                    | n²               | 建設事業       |  |  |
|   | ほか                          |  |   | 33 秒               | 25 秒       | 2014.09.05    |                         |                  | 定以予不       |  |  |
| 所収遺跡名   | 種別                          | 主な時代   | 主な遺   | <del></del><br>構   | i<br>I     | 主な遺物          |                         |                  | 特記事項       |  |  |
| DI 权退跡石   | [ 1里/川                      | 上な时代   | 土な退<br>雨裂跡                                    | <del>暦</del><br>1条 | -          | 工な退物          |                         |                  | 付心爭坦       |  |  |
| 沼袋Ⅲ遺跡   | 狩猟場                         | 縄文時代   | 土坑  |                    | 縄文土器       | 片             |                         |                  |            |  |  |
|   | 4.2 5.22.1                  | 7 1 114 1:3 1: 1:  | 陥し穴状遺構  | 7基                 | 1.15.52.55 | - 1h          |                         | LH               | + + + 1.   |  |  |
|   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  | 土坑4基を確認した。 |  |  |
| 陥し穴状遺構は全て溝状で逆茂木痕を有するものがある。調査区南北に西から東へ向かって沢が形成され、<br>査区は沢間に位置する。こうした水辺に集まる動物を狙った狩猟場であったことが明らかとなった。 |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
|   |                             |  |   |                    |            |               |                         | ・こなつに。           |            |  |  |
|   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
|   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |
|   |                             |  |   |                    |            |               |                         |                  |            |  |  |

| ふりがな   | へいせいにじゅうろくねんどはっくつちょうさほうこくしょ  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
|--------|--|----------------|-------------|--------|-----------|------------|-----------|--|--------------------|--|
| 書 名    | 平成 26 年度発掘調査報告書  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| 副 書 名  |  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| 巻 次    |  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| シリーズ名  | 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書   |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| シリーズ番号 | 第 647 集  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| 編著者名   | 杉沢昭太郎  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| 編集機関   | (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター   |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| 所 在 地  | 〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001   |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| 発行年月日  | 西暦 2015年3月23日  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| ふりがな   | ふりがな   |                | - ド         | 北緯。//  | 東経。//     | 調査期間       | 調査面積      |  | 調査原因               |  |
| 所収遺跡名  | 所 在 地  | 市町村            | 遺跡番号        | 6 / // | 6 / //    | 四五/97 1-7  | m²        |  | 阿里沙科               |  |
|        | <br>  一関市<br>  世<br>  ちなまきまりかべもざ<br>  室根町折壁字   | 03209          | N F 93-1069 | 38度    | 141 度     | 2014.10.16 |           |  | 市道千刈田向山線<br>道路改良事業 |  |
| 八幡沖遺跡  |  |                |             | 56 分   | 26 分      | ~          | 1,000 m²  |  |                    |  |
|        | 41-3   |                |             | 1秒     | 28 秒      | 2014.12.19 |           |  |                    |  |
| 所収遺跡名  | 種別   | 主な時代           | 主な遺         | 进      | 主な遺物 特記事項 |            |           |  |                    |  |
| 別权退跡石  | 但加   | 土な時代           | 基塩          | 1条     |           |            |           |  |                    |  |
| 八幡沖遺跡  | 城館   | 中世             | 土坑          | 1条     |           | 銭貨         |           |  |                    |  |
|        | 生吐 は七 欧  | 마 [7 카 라 기 티 1 | 性格不明遺構      | 1基     | 担 た 振 ベ-  | トキノーへのけ    | h 赤公) ァ バ |  | これ ごれ の曲 松戸 正田     |  |
|        | 遺跡は折壁地区を広く見渡せる北に張り出した尾根を堀で大きく二つの曲輪に分け、それぞれの曲輪に小規模な平場を複数造りだして城館にしている。調査区は南側の曲輪西辺部にあたる。南側の曲輪からは殆ど遺構・ |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
|        | 実な 十物を 後   |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
| 要 約    |  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
|        |  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |
|        |  |                |             |        |           |            |           |  |                    |  |

※緯度、経度は世界測地系による数値である。

#### 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集

### 平成 26 年度発掘調査報告書

印刷平成27年3月16日 発 行 平成27年3月23日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 電 話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

発 行 (公財) 岩手県文化振興事業団

〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13番1号

電 話 (019) 654-2235

FAX (019) 625-3595

印 刷 有限会社 博光出版 〒 020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号 電 話 (019) 641-0671